

山田美妙著  
日本地名

日本大辭所發行所  
日本全辭書 卷一



## 緒言

- 一、此第一部名所古跡門に於いては神社佛閣名所書跡を主として擧げ、まづ五畿内から始めて次ぎは東海、次ぎは東山道に移る。
- 二、神社佛閣の舊領の程度は力めて記し、其祭禮其他の時日は故さらに既往研究の便を料り、事情の許すだけは陰曆にした。或ひは攝社、末寺など今日既に廢滅に歸したのものもあるもの、其著名なのは皆別題にして採り、及ぶだけ其委曲を盡くした、是も既往研究の便を料るため。
- 三、地名の讀法其他の事すべて及ぶだけの勞をば盡くしたものの、素より誤謬漏脱の無いのは保し得られず、其邊は謹んで大方の斧正を仰ぐ。
- 四、此書日本全國の名所古跡門は此第壹卷から始めて第四卷までで盡きる。其次ぎは「一般地名門」と題し、すべて全國一般の地名を擧げ、是は五十音順に整列し、各題銘銘に其詳細な説明を與へる。
- 五、此書中の社寺、名所古跡其他神佛、人名などの便利な索引は第四卷に纏めて悉く出る。

明治廿六年十月

著者

次目卷壹第書辭全名地本日

忍海郡	葛下郡	廣瀨郡	十市郡	城下郡	宇陀郡	高市郡	山邊郡	葛上郡	葛上郡	平群郡	添下郡	添上郡	◎山城國	神ノ部及ビ名所古	跡ノ部及ビ名所古	佛ノ部及ビ名所古	跡ノ部及ビ名所古
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二二	二二	二二	一一	一一	一一	〇九	九九	八八	七七	七七	四四	四四	.....	.....	.....	.....	.....
九五	五四	七五	五五	五五	五五	〇六	六一	八七	七〇	七〇	七〇	七〇	五六	五六	五六	五六	五六

茨田郡	方野郡	讚良郡	河内郡	若江郡	澁川郡	高安郡	大縣郡	志貴郡	丹北郡	安宿郡	古市郡	八上郡	丹南郡	錦部郡	石川郡	◎河内國	吉野郡	宇智郡
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	.....	二二	二二
八七	七七	七七	七七	七七	七六	六六	六六	六六	六六	六五	五五	五五	五五	五五	五四	.....	三三	三三
一七	七五	七五	七二	七一	〇六	六五	六五	六二	六一	〇七	七六	六四	五四	〇六	〇六	.....	二〇	二〇

能勢郡	豐嶋郡	嶋下郡	嶋上郡	有馬郡	矢田郡	菟原郡	武庫郡	川邊郡	西生郡	東生郡	住吉郡	◎舞津國	日根郡	泉南郡	和泉郡	大鳥郡	◎和泉國
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	.....	三三	三三	三三	二二	.....
八七	七七	七七	七六	六六	五五	五五	五五	四四	三三	三三	三三	.....	三一	三〇	三〇	二八	.....
一五	七五	七五	七四	六四	五五	五五	五五	四四	三三	三三	三三	.....	一六	〇六	〇一	一四	.....

# 日本地名全辭書

## 第壹部 名所古跡門卷一

### 山城國

●上賀茂神社 愛宕郡上賀茂村。舊社領二千七百石。祭神、別雷命。山號、

賀茂山(又鴨山)とも書く。一名神山、日影山、御影山、二葉山。宮の東の傍を

流れる河を瀬見の小川(又、禪の小川)一名羽川、御手洗川と名付ける。本社

は天武天皇六年二月の造營。一説には祭神は瓊瓊杵尊、即ち天照太神の孫

地神第三代の神。●(一)攝社二十一、即ち第一、若宮、第二、新宮、第三、土師

尾の社、第四、藤尾の社、第五、鎮守の社、第六、太田の社、第七、白髭の社、第

(一)

八、川尾の社、第九、福徳の社、第十、諏訪の社、第十一、片岡の社、第十二、澤田の社、第十三、岩本の社、第十四、奈良の社、第十五、梶田の社、第十六、流木の社、第十七、杉尾の社、第十八、棚尾の社、第十九、橋本の社、第二十、山森三間の社、第二十一、氏神の社、此内、岩本、橋本の二社は住吉和歌の神で、昔し在原業平、藤原實方の兩朝臣が常に此二社を信向し、和歌に達することを祈つた(神祇拾遺)。(二)葵祭(あひまつり)古昔四月中の酉の日に行はれた神事。葵草を神に獻る。元明帝の和銅四年、始めて之を行はれ、以來非常な儀式となる。唯祭りといへば此葵祭りの義となる程有名で、此日は社司から葵を祭裏にも獻じ、簾に懸けられたといふ。後世になり、次第に儀式が廢れ、やがて元祿七年になり、更に再興された。(三)齋院(いづののみや)上古、嵯峨帝の敕願により皇女有智内親王を齋宮に立ててから以來、歷代未婚の内親王を人身御供として神に奉り、齋宮に置く例となる。内親王が無ければ諸王の子女を奉つた。此儀式は賀茂の外伊勢にもあり、御土御門帝の元久元年、繕子を齋宮に

立てた時まで凡て三十一人の數があり、之を限りとして絶えた。同じイツキノミヤの語ながら伊勢では「齋宮」の字を用ゐ、此賀茂では「齋院」の字を用ゐる。或ひは又音讀してサイヰン又はサイグウともいふ。(四)競馬(くらま)五月朔に足揃へして五日に行はれる。社人二十人、孰れも馬に乗り、半臂を着て、黒及び赤の狩り装束で左右各十番ひ相列んで行く。其東西に埒を構へ、遲速に由つて優劣を定める最も嚴重な儀式。◎臨時の祭り十一月下の酉の日。宇多帝の寛平元年十一月廿二日始めて行はれた。

◎下賀茂神社(しもがもじんじや) 愛宕郡(あたご) 舊社領五百四十石。祭神は二座、東は玉依姫(たまよひめ)、西は大山咋神(おほやまがひのかみ)。東の森を糺の森(たすけのもり)といひ、境内に清水がある。◎(一)攝社(しやくしゃ)第一、川合の社、第二、比良木(ひらぎ)の社。此境内に如何なる樹を栽ゑても數年の後には皆變じて柃になるといふ。今日でも境内に柃の樹が多い。第三、三井の社、第四、久我(くが)の社、第五、末刀(すえと)の社、第六、小鳥(こどり)の社、第七、靈璽(たまご)の社。(三)祭禮(まつり)上賀茂(かみがも)と同日。(四)御手洗水會(みでらしのみづあひ)一名、夏越祓(なごしのはらひ)又「和籬(わさき)と書く。六月十八日

から晦まで。

●松尾の社 葛野郡。京都から二里餘。舊社領九百三十石餘。祭神は大山咋命おほやまのひの市杵島姫命いちきしまひめのみこと。仁明帝の承和四年始めて祭禮(四月上の申の日、十一月上旬の酉の日)を行はれ以來儀式となる。◎文武帝大寶元年はたのとり秦都理が始めて神殿建立。◎文德帝仁壽三年つぎよみのみこと疱瘡流行の時、月讀尊つきよみのみことの示現に由り帝が社を此に遷した。●(一)附屬つぎよみ第一、月讀の社、第二、櫛谷しづいたにの社、第三、三之宮、第四、宗像むねかたの社、第五、衣手ころもての社、第六、四よつの大神おほかみ。(二)舍利塔せりだ每年陰曆十月十五日舍利會。

(參考)大山咋命おほやまのひのみこと大己貴命おほおみのみことの子。◎市杵島姫命いちきしまひめのみこと素盞烏尊すさぬののみことの女。

●石清水八幡宮いししみずはまつかみ 久世郡男山。舊社領七千四十石。普通に男山八幡おとこやまはちまんとして聞こえる。祭神三座、即ち應神天皇、玉依姫、及び神功皇后。舊幕時代までは神佛混合で天台宗で妻帶し、社務は新善法寺といふ所で行つた。坊舎は其頃四十一坊。◎清和帝の貞觀元年八月、大和大安寺の僧行教(武内宿禰の後

胤)が豐前國宇佐の社に參詣し、示現を蒙り、之を叡聞に達し、當所鳩峯に勸請し、其時香水が窟から湧いたとて「石清水」と名付けた。●(一)攝社しやくさ七、第一、若宮、祭神仁德天皇、第二、姫若宮、姉宇禰姫うねひめ、妹吳姫くれひめの二體を祭る、第三、水若宮みづわかみや、祭神は宇治の皇子、第四、上高良かみのたから、祭神、武内宿禰。第五、下高良しもふたから、祭神、玉垂命たまたれのみこと。第六、梅尾うめのおの社、祭神、大國玉命おほくにたまのみこと、本社ほんやの西半里。第七、下院厄神しものおんやくじんの社、山城攝津の境で祭る。舊曆、正月十八九日に祭禮。(二)放生會しやうじやうかい毎年八月一日から十五日まで生魚を買つて之を川に放つ儀式。養老四年、神託に由つて行ひ、後世斷絶し、延寶五年に再興された。年中行事、新中納言、世にかくて繋がるる身も援はなん生けるを放つ神の恵に。(三)臨時の祭りんじのまつり三月中の午の日、圓融帝天祿二年三月から起こる。

(參考)應神帝おほいのかみ仲哀帝なかつらひのみことの第四の御子。母は神功皇后。◎神功皇后かみのみこと仲哀帝なかつらひのみことの皇后、氣長足姫けながたるひめと號した。天皇の志しを繼ぎ、懷胎の身で新羅を征伐し、歸つて筑紫で皇子を産まれた、即ちこれが應神天皇となる。在位六十

九年、壽百歳で若櫻宮に崩じ、厩列陵に葬られた。◎玉依姫海神の女。豊珠姫の妹、鸕鷀草葺不合尊の妃。神武帝の御母。◎武内宿禰孝元天皇の曾孫、武雄心命の子。日本の宰相の屈指な人で景行、成務、仲哀、神功、應神、仁徳の六朝に事へ、大臣になつて國政を執つた。日本の大臣の號はこれから始まる。勇武絶倫、皇后に従つて新羅を伐ち三韓を平げ、歸つてから又叛徒を征し皇祚を固めた。

◎大原野社 乙訓郡王城の坤三里。舊社領十二石。桓武帝が始めて都を長岡に遷された時、三笠山に准じて春日神を此處に勧請し、鎮護の總官とされ、後ち又都を平安に移された時、此大原野に准じて改めて吉田山に勧請した。祭禮は陰曆二月上の卯の日。攝社は海神。

◎吉田社 愛宕郡神樂岡。舊社領五百九十石。神道受業の社として名高く、神祇に關した事を掌る段に於いては上流に位する。日本全國の神號は此處から印を押して定めて出す。●(一)宗源殿吉田社殿の稱。宗は内宮、

即ち天照皇太神宮の義。源は外宮、即ち豐受皇太神宮の義。(二)太元殿社内の齋場。

◎吉田山春日社。吉田社の後。舊社領十二石。祭神四座、大和國三笠山の神と同體。清和帝の貞觀年中鎮座。其前、都が奈良にあつた時には三笠山、長岡にあつた時には大原野、やがて都が平安に遷つて此吉田を何れも禁關の傍で寶祚の守護神とされた。●(一)攝社第一、神樂岡の社、第二、一言主の社、第三、率川の社、第四、水屋の社、第五、氷室の社、第六、榎本の社。

◎祇園社 愛宕郡八坂。一名感神院。舊社領百四十石。祭神三座、即ち第一牛頭天王(素盞鳥尊或ひは武塔天神)、第二、稻田姫(或ひは歲徳神)、第三、八王子(或ひは八將神)。圓融帝の天祿元年六月十四日始めて祭禮を行はれて後世儀式となり、毎年陰曆六月七日と同十四日とに祇園會といふ有名な祭りを行ふ(今は毎年七月十七日、及び二十四日)。山車を造つて氏子等が六角堂に集まり、園で前後を定め、京都市中を遷り歩く。昔し徳川時代では

此日四條通り高倉の東北に將軍家の櫓敷を構へ、これに儀式を示した。  
 (一)攝社第一、後見殿、祭神大己貴命。第二、蘇民將來、厄除けの神。第三、美御前、即ち田心姫、湍津姫、市杵島姫の三神を祭る。第四、護土地の社、又「牛王子」とも書く。第五、宦者殿、素盞烏尊を祀る。古式、陰曆十月廿日人民が群集して誓文の罪を行つたこと、の懺悔を此處に祈る。もと武藏坊辨慶が正尊を連れて此處で誓文を書いたといふ故事から起る。(二)神社年代「初めは播磨國明石浦にあり、貞觀十一年山城の北白川本光寺に遷り、同十八年此處に遷る。(三)窠の紋」本社の紋は窠を用ゐる。普通では胡瓜を縦に切つたものとし、此神を信向する者は胡瓜を斷つと云ひ傳へる。但しこれは誤りで此瓜の紋は木瓜の花の形ちで信長の紋で、信長が此祇園社を再興した處から其徳を顯すため後世用ゐることになつた次第といふ。  
 ◎稻荷神社 紀伊郡。禁裏の巽。又、「飯成」とも書く。舊社領百六石。祭神三座、中社倉稻魂、上社土祖神、下社大山祇女。一説五座、其時は別に伊弉册

尊、瓊瓊杵尊を加へる。◎元明帝和銅四年二月十一日(一説九日)三處に垂跡あり、嵯峨帝の弘仁十四年始めて社を建て、醍醐帝の延喜八年藤原時平が三處の神殿を營む。●(一)攝社第一、田中の社、祭神猿田彦神。第二、四大神、祭神四柱之兒神。第三、白狐の社。第四、御倉上の社。第五、鴨の社。第六、明日荷田の社。第七、御田の社。(二)祭禮「四月中の卯の日。天曆年中から始まる。後三條院延久元年正月二十六日天子行幸。(三)御火燒」十一月廿日。◎近代鍛冶屋は此日を韃祭りと云ふ。其由來は上古三條小鍛冶宗近といふ者が刀劔を作つて思ふやうで無かつた時、此山の埴土を取つて鍛つことを工夫し、遂に名劔を得た。是が爲めに後世一切鍛冶を業とする者が皆稻荷を尊信し、所謂韃祭りも始まつた。(四)初午「毎月二月午の日。垂跡の時が此日に當つたこと、の故事から行ふ。即ち所謂初午。  
 ◎藤社の社 紀伊郡深草の里。舊社領二百石。祭神、舍人親王、弓馬の神と仰ぐ。●(一)祭禮「毎年、端午の日。今は六月五日。甲冑、兵仗、騎射などある。



◎傳説、天應元年蒙古襲來の噂のあつた時、早良親王が征伐の命を承はり、常社に詣でて加護を祈り、軍勢を揃へた。此時猛風が敵船を打ち破り、戦はぬ中に敵軍が破れた。其故事から常社を弓馬の神とし、毎年五月五日、甲冑を帶した人など出て祭禮を行ふといふ。但し此説は受けられぬ。天應前後に外國から襲來した事實は無い。

(参考)〔舍人親王〕天武帝の子。博聞強記善く學問に通じ、元明帝の四年敕を奉じて日本紀三十卷を撰し、天平七年十一月十四日六十歳で薨じた。天平寶字三年諡號を賜はり、藤社に祭り、崇道靈敬皇帝といはれた。

◎〔早良親王〕光仁帝の子、桓武帝の弟。委細は次ぎに日本後紀を引く。桓武天皇以早良爲太子。於是早良與種繼有卻。延曆四年八月帝如平城。種繼爲留守。太子黨人射種繼于燭下斃。事覺。十月太子廢。將受弒。太子遣使諸寺、預修白業。諸寺恐而拒之。獨善珠納焉。謂使者曰、太子夙殃不盡。今受嚴譴。此度回債焉又幸也。乞勿結怨焉。委曲示諭。詞旨激切。使

者復命。太子喜曰、我聞師言、披忍辱之衣、以故不怕逆鱗之怒耳。太子幽死。其靈惱逼皇太子、醫巫不効。同十七年三月遣敕使參議五百枝于淡路國、奉迎早良親王骨、收葬于大和國八島陵。近年依親王崇、世人多病惱或天

死。  
◎〔上御靈社〕かみごりやうのやしろ 京都の東北。禁中のうぶすま生土神。舊社領十九石。祭神八座。◎〔二

第一、吉備大臣。第二、崇道天皇。第三、伊豫親王。第四、藤原大夫人。第五、橘逸勢。第六、藤原廣嗣。第七、文屋宮田丸。第八、火雷神。◎桓武帝の時、傳敕大師が敕を奉じて始めて祭る。

(参考)〔吉備眞備〕前右大臣、正二位勳二等。普通に吉備大臣と云ふ。右衛士の少尉下道朝臣國勝の子。遣唐使に従つて留學し、學問を究め、大いに名聲を唐國に轟かし、天平五年に歸朝し、正六位下を授かり、大學助となり、高野天皇の師匠となつた。其處で恩寵は甚だ厚く、吉備朝臣の姓を賜はり、勝寶四年入唐副使となり、歸つて正四位下を賜はり、太宰大貳とな

り、筑前國怡土城を創造し、寶字七年東大寺の長官に遷り、同八年藤原仲滿、即ち押勝が謀叛した時、眞備は其必ず走ることを思ひ、兵を分けて之を遮り、賊遂に謀に陥ちて旬日の中悉く平定になつた、其功で從三位勳二等を賜はり、參議中衛大將となり、神護二年中納言に任じ、右大臣となり、從二位を授かつた。此頃大學の釋奠はまだ備はらなかつた處、此眞備が禮典を誓へ、器物なども始めて調つた。又大和宿禰長岡と律令二十四條を定め、十分な法律を作つて桓武帝の延暦十年に始めて之を施行することになつた。寶龜元年致仕を願ひ、許されず、唯中衛大將を罷められた。同六年十月二日薨。年八十三。◎〔崇道天皇〕光仁帝の子、即ち早良親王。◎〔伊豫親王〕桓武帝の子、平城帝の弟、平城帝の大同二年藤原宗成の勸めに由つて謀反の志しがあり、發覺して其母藤原夫人吉子と共に捕へられ、川原寺に幽され、斷食させられた。是が爲め伊豫親王は母と共に毒を呑んで自殺した。◎〔藤原大夫人〕即ち伊豫親王の母、名は吉子。

◎〔橘逸勢〕又「はやなり」と讀む。右中辨從四位下入居の子、性質放誕、落、最も隸書に妙を得、宮門の榜題は皆其手に成つた。延暦の末入唐し、大いに唐人の賞讃を博し、橘秀才と云はれ、歸つて數官に仕へ、年が老いたため退いて仕へず、承和九年伴健峯の謀反に連坐し、拷問を受けたが服せず、死を減じ、伊豆國に流された。配所に赴く時、此逸勢に一人の女があり、泣いて跡を慕つた。護衛の兵が叱つて退けさせたが娘は聞かず、晝は止まり夜は行き、遂に善く從つた。逸勢が遠江國板筑驛に到つて其處で歿した時、其處に追ひ着いて此娘も大いに歎いた。やがて其死骸を驛に葬つた處、其傍に庵を造つて屍を守つて去らず、落髮して尼となり、妙中と號し、父の爲めに功德して晝夜怠らず、觀る者涙を催さぬはなかつた。やがて詔りが出、罪が赦免になつた處で自ら屍を負つて京都に還つたといふ。◎〔文室宮田丸〕淡海公の三男、藤原宇合の子、仁明帝の承和十年謀反が發覺して伊豆國に流された。

○しもぐりやうのやしろ下御靈社 京都寺町通竹屋町。祭神、上御靈社と同じもの。慶長年中の

勸請。

○きたののてんまんぐう北野天満宮 北野、王城の西、右近馬場うこんのば即ち北野神社。其名の似たため普通ふつうにこれと北野の天神とを混同する。舊社領五百八十石。祭神三座、東は菅原道眞の嫡子中將殿。中は大自在天神、即ち菅丞相。西は吉祥女、即ち菅丞相の妻、北の御方と稱された人。今の社は豊臣秀頼の建立。●(一)攝社しやくしや第一、宰相殿、即ち菅原道眞四世の孫在躬の男を祭る。圓融帝の侍讀となり、文章の名があり、寛弘六年十二月卒。年八十五。第二、和泉殿、菅原道眞六世の孫、菅原定義を祭る。第三、三位殿、和泉殿の次男菅原在良を祭る。第四、白太夫、菅公在世の友、渡會の神職を祭る。第五、紅梅殿、東門の東三町。(二)神かみ興岡しのをが本社鳥居の外の地の稱。(三)朝日寺社の西の觀音堂。(四)無實の罪で管公を陥れ、其恨みが残るなどといふ妄説が行はれ、遂に此處に祭られ、天子の造營とし、世の妄説も消えた。一條院の正曆二年敕使を大宰府の安樂

寺に遣はし、太政大臣正一位を贈られた。(五)祭禮「毎年三月二十五日、鳥羽院の天仁二年から始まる。現今は八月四日。

(参考)「菅原道眞」世に菅丞相、又菅公といふ。是善卿第四の子、母は伴氏。承和十二年の出生。野見宿禰の末で家は代代學問を業とした。幼年の頃から穎悟で、貞觀四年文章生に補し、九年得業生となり、十二年對策及第し、十八年侍從となり、元慶六年渤海國の使者が來たところで、諸儒が鴻臚館で之に接見した時、使者が菅公の詩藁を見て、非常に賞めて風情は白樂天に似たと云つた。仁和年中、讃岐守となり、同四年讃岐が早魃の時、自ら雨を城山神に祈り、寛平五年進んで參議となり、九年、中納言を経て大納言に升り、大將を兼ね、昌泰二年右大臣となり、右大將を兼ねた。此時、左大臣左大將藤原時平に忌まれ、遂に讒言されて、九州太宰府に在つて薨じた。實に延喜二年二月二十五日。年五十九。著述は「菅家御集」、「菅家文章」、「菅家後集」、「文德實錄」、「類聚國史」。

◎北野天神 きたのてんじん 天滿宮の廻廊の西傍にある神。名の似た爲め天滿宮と誤る。  
 ◎矢背天神 やせのてんじん 矢背の里。又「八瀬」と書く。菅原道真少年の時、比叡山法性房の室に入つて學問をした。其往來の時、休息した處に後人が社を建てて矢背天神といふ。

(参考)「法性坊尊意」姓は丹生氏。平安の人。應神帝の後胤。六七歳の頃から讀書を好み、肉類を食はず、殺生を好まず、近隣の僧が之を愛し、大悲の神呪を授けた處、尊意はやがて之を携へて梅尾寺に至り、日夜誦んで三年間家に歸らず、元慶三年十七歳で台山に上つて落髮し、二十一歳座主圓珍に就き台教を究め、延長三年旱魃の時、雨を祈つて奏功し、四年五月皇后、難産の時、救して不動の加護を進らせた處、明日皇子が安らかに御誕生になつた。七年詔りを奉じて疫病を除ひ、八年六月平希世、藤原清貫の二人が清涼殿で雷に逢つて死んだ時、帝も惶れて玉體が不豫になつた。其處で常寧殿に移つて尊意を召し、祈禱を爲せたところ、忽ちこ

れも平癒になつた。延長四年座主となり、天慶三年二月廿四日入寂。年

七十五

- ◎村上野天神 むらかみのてんじん 北山正傳寺村上野。菅公の別莊の跡。
- ◎菅公居住の舊跡 京都五條坊門通西洞院の東。
- ◎吉祥院天神 きぎやういんのてんじん 東寺の西南吉祥院村。
- ◎堀川天神 ほりかはてんじん 上京、堀川。
- ◎一乘寺天神 いちじやうじのてんじん 東山の下、一乘寺村。
- ◎山科天神 やましなのてんじん 山科、大宅村。
- ◎衣笠山天神 きぬがさやまのてんじん 京都、衣笠山鹿苑寺。
- ◎大塚天神 おほつかのてんじん 宇治郡大塚村。
- ◎文字天神 ふみこのてんじん 京都西七條猪隈。
- ◎平野社 ひらののやしろ 葛野郡北野の後。舊社領九十石。桓武帝の延暦年中始めて造營。祭神四座。第一、今木の神、即ち景行帝の御子、日本武尊、源氏の神とす。

る。第二、久度くはの神、日本武尊の子仲哀天皇、平氏の神とする。第三、古開ふるあきの神、應神帝の子、仁徳天皇、高階氏の神。第四、比賣ひめ太神、即ち天照太神、大江氏の神とする。第五、縣あがたの社、天穗日命あまのほりのみこと。○(一)攝社あがた熱田社、白狐たうゆ社、任部社。

(参考)天穗日命素盞鳥尊の子。

○梅宮うめのみや 葛野郡梅津の里。舊社領五十石。祭神四座。第一、酒解さかどけの社、即ち大山祇おほやまぎの神。第二、大若子おほわかこの社、即ち瓊瓊杵尊にぎはぎみ。第三、小若子こわかの社、即ち火火出見尊ひびでみのみこと。第四、酒解子さかどけのこの社、即ち木花開耶姬このはなさくや。○嵯峨帝さかの后嘉智子かちこ容貌美麗寵遇厚かつたが王子の無い爲め、之を當社に祈り、則ち懐胎し、社地の砂を采つて褥の下に布いた處が果たして王子(仁明帝)が安らかに誕生した。それから皇后は橘氏である處から橘氏の祖廟とされ、後世皆産婦が之を祈ることになつた。○祭禮まつり陰曆四月上旬の酉の日、十一月上旬の卯の日。承和年中から始まる。

(参考)大山祇伊弉諾尊が劍を抜いて刺遇突智を斬つて三段とした。其

一段が化して大山祇となつたと云ふ。○木花開耶姬このはなさくやひめ天山祇の女。○今宮いまみや社 愛宕郡紫野むらさきの。舊社領五十石。祭神、疫神。一條院の正暦五年、長保二年に疫病が流行り、人民が多く死んだ時、社を船岡山の北に建て、祭禮を行はれた。之を今宮と號し、疫病除けの神とし、中世になつて中絶し、元祿二年再興された。

○貴布禰神社きふねのやしろ 愛宕郡鞍馬山の乾。又「貴船」とも書く。舊社領十一石九斗。

祭神二座。第一、高麗たかまろ。第二、奥御前おくのみぜん。共に王城の鎮護。

○七之社ななのやしろ 京都安居院千本通の東。祭神、若宮春日大明神。文徳帝の仁壽元年染殿そめどのの願ひで勸請し、後ち冷泉院の時、伊勢、八幡、賀茂、松尾、平野、稻荷の六社を加へて併はせて七之社とした。○宇多帝の后が寵の衰へた

時、靈夢があり、白い砂で三笠山の形ちを神の前に築けとの神託があつた、其通りに爲た處が君の愛は前のやうになつた。此由來から今も願ひを掛ける人は砂を社地に運ぶ。○一説、七野社と云ふは野が七つ有つた故と云

ふ、即ち内野、北野、柏野、紫野、平野、浅野、蓮臺野。

(参考)高麗伊弉諾尊が軻邁突智を斬つた其一段。水徳の神で雨を祈れば應驗がある云ふ。

◎乙訓郡。祭神、火雷神。一説、加茂健角身命。旱の時、雨を祈る。

◎向日大明神。乙訓郡。祭神、正一位向日神。舊社領二十七石。

(参考)向日神素盞鳥尊の孫。母は須治比女。

◎山崎離宮。乙訓郡山崎。舊社領八百石。◎清和帝貞觀元年八月廿三日、

行教和尚が豊前の宇佐八幡宮を此處に勧請し、後ち神託に由つて男に遷された。もと此土地は弘仁帝の離宮である故、離宮八幡といふ。明治初年の兵火に罹り、其以來假り殿となる。

◎山崎明神。山崎離宮の左。祭神、大山祇神。

◎神並神社。神崎。祭神、賀茂、春日の二座。

◎神足神社。乙訓郡神足村。祭神未詳。◎文徳實録に據れば齋衡元年當

社を官社としたといふ。

◎小倉明神。山崎の北、圓明寺。祭神、正一位小倉大明神。神傳未考、祭禮。

陰曆四月二日。◎天王八王寺社。山崎の北、天王山。祭神、素盞鳥尊。祭禮、陰曆四月八日。

◎愛宕神社。山號、愛宕山。山は丹波桑田郡。社は山城葛野郡、京から嵯峨

まで二里、嵯峨から山まで五十町。舊社領五百八十石。祭神、伊弉册尊及び

火産靈尊。◎大寶年中、小角が當山に上らうとした時、嵯峨の奥に一人の僧

があり、泰澄(一名、雲遍上人)と云ふ名で同行して清瀧に到つた時、瀧の上

に雲が起こり、大雷雨となつて進むことが出来なかつた、其時二人は秘呪を誦して祈念し、晴れて見れば、地藏、龍樹、富樓那、毘沙門の四體が光りを放つて(一説、愛染も加はつて五佛現はれたともいふ)出現した、其處には天を摩る程の一大杉があつた。時に、天竺の日良、唐土の善界、日本の太郎坊(一名、築術)が各眷屬を將めて杉の上に現れ、是等何れも世に云ふ天狗であつ

たが奇奇妙妙の形ちて毛を被り、角を戴き、二人に告げていふ、「我等前二千年靈山會場に於て佛の附屬を受け大魔王となり、以つて此山を領し群生を利益す」と云ひ訖つて見えなくなつた。之に由り、二人は此大杉の樹を號して清瀧四所明神とし瀧の上に千手大士を安んじた。それ故、後世當山の開基をば泰澄、小角の二人とし、後ちに慶俊が之を中興し、和氣清磨が寺を建てた。(一)坊舎第一、教學院。第二、福壽院。第三、長床坊。第四、法藏院。第五、威徳院。第六、大善院。是等共に大覺寺派、眞言、天台兩宗で眞言を本宗とする。もと此愛宕山は讃岐の金毘羅の類で神職が無かつた。(二)火打權現げん愛宕山清瀧四丁の上。(三)本堂五座、即ち中、勝軍地藏、泰澄大師、不動明王、毘沙門天、龍樹大士、奥院三座。太郎坊榮術、役行者、穴戸司箭せん。(四)緣日、祭禮緣日は毎月廿四日。二月十五日の夜には松明を燃す。數は三本、高さ二丈餘。穢多が其周圍を廻つて劍舞する。四月酉の日、神輿が出、これを穢多が昇く。(五)清瀧川小野の里から出、中河村を經、高雄、愛宕の麓を巡

り、大井川となる。(五)渡猿橋とまげり清瀧川に懸かる橋。  
 (參考)慶俊姓は藤井氏。河内の人。道慈に事へて空宗を學び、大安寺法華等に居て業を修め、愛宕山を中興したとて有名な人。天應元年僧都と爲る。◎穴戸司箭せん長門の武人。兵法を此山に祈り、武名を得、終に少なからぬ關係を此山に持つことになつたといふ。  
 ◎若宮八幡 京都五條橋の東。舊社領八十石。◎後冷泉院、天喜元年救命に由つて六條に勸請し、後ちに五條に遷された。其舊地は今の西本願寺の境内となる。  
 ◎五條天神 京都松原通西洞院。祭神、少彦名命。弘法大師の草創。祭禮は陰曆九月十日。天子不豫の時は鞆たもを社に懸けて祈る。毎年大晦當社に詣でて白木と餅を受けける式がある(紀伊國粟島の條參考)。  
 ◎園韓神 京都醒井通高辻。舊寺號、壽福院。祭神二座、園神、韓神。桓武帝の大内裏燒失前には此社宮内省に在つた。◎祭禮陰曆二月、十一月、丑の

日

●繁昌社 京都高辻室町西入町。祭神、辨才天。辨才天の本名婆利才女を誤つて繁昌の社といふ。

●新住吉 京都醒井通り高辻下る町。祭神、攝津住吉大明神。舊社家の號千歳院。藤原俊成の勸請。

●榊宮 京都上京柳原。上古伊勢太神の遙拜所。毎月朔日、十一日、二十一日の三日祭主が神酒を榊の樹に供へて遙拜した。

●新玉津島社 京都松原通り烏丸西へ入町。俊成卿の勸請。此處が元、藤原俊成の邸跡といふ。

●縣宮 禁裏、北の御門の邊。上古、縣召の除目を行はれた時、之に逢ふ輩が何れも此社に昇進を祈つた。

●山王社 京都上京柳原。次ぎて同じ故事。山王神輿寓居の跡。

●日吉社 京都祇園社乾の方。上古、訴へることがある時は日吉の神輿を昇ぎ出し、其時此に寓居した。其跡に社を建てた。

●岩神社 大宮通西上立賣の北。本體は方六尺許りの濃茶色の岩石。上古は禁裏の庭石であつたといふ。靈驗があるとして神に祭る。乳母が之に祈れば乳が出るといふ。社家は眞言宗、號は蓮乘院。

●諏訪大明神 京都五條橋通り室町と烏丸との間。勸請年代未詳。舊社家東漸院。

●諏訪大明神 京都東洞院六角下る町。其縁で其土地を諏訪町といふ。

●小野御靈社 小野の庄東河内村。祭神、惟喬親王。

(参考)「惟喬親王」文德帝の第一の御子。母は紀名虎の女静子。承和十四年の出生。洛外、山崎水無瀬宮に閑居し、詩を吟じ、歌を詠じ、性質櫻花を賞し、在原業平を伴つて河内の櫻などを觀、やがて出家して小野に隱れ、

小野宮と號した。貞觀十五年二月薨。年二十六。

●瀧社 小野の庄杉坂村。祭神、小野道風。◎社前に小さな池があり、旱



魘の時も涸れず、之を硯の水とする。

〔参考〕〔小野道風〕從四位上木工頭。寛平五年出生。村上帝康保三年十一月卒。年七十一。弘法大師、藤原逸勢、同佐理と共に天下四人の能書と云はれた。

◎小野篁社 小野の庄杉坂村。

〔参考〕〔小野篁〕正四位下岑守の長子。家は清貧で、母に事へて至孝であつた。嵯峨帝の弘仁十三年文章生となり及第し、天長九年父を喪つた。博學多聞、承和元年聘唐の副使となり、同五年春出帆した。此時、乗船の事に就いて篁は憤り、病と稱して留まり、謠を作つて遣唐使を刺つた處から帝の逆鱗を招き、隱岐國へ流された。當時の文章では天下無雙、草書では能筆の人として後世模範とする。同七年赦免され、從三位に叙せられ、左大辨となり、文德帝の仁壽二年十二月二十三日薨。年五十一。

◎江文大明神 大原、井出村。祭神、未考。

◎赤山大明神 叡山、西、坂本。祭神一座、唐の神。慈覺大師の建立。一説、素盞烏尊を祭るといふ。

◎鼠 禿 比叡山の麓。三井寺の僧頼豪の靈を祭る。頼豪の傳は馬琴が傳衍して「頼豪阿陶梨怪鼠傳」と題し、世に出した。

◎後白川院社 白川寺の前。

◎由岐明神 愛宕郡鞍馬山。祭神は大己貴尊、少彦名命。醫術を守る神として祭る。天子不豫の時は鞆を懸ける處から此名が有り、故に又「鞆明神」とも書く。

◎祭禮〔陰曆九月九日。〕

◎石神社 石神通、六角下る町。祭神二座、即ち豐磐間戸命、奇磐間戸命。◎後冷泉院の永承五年六月十六日建立。同六年十一月神階從三位を授かる。

〔参考〕〔豐磐間戸命、奇磐間戸命〕並に太玉命の御子。天照太神が天の磐戸から出られた後ち再び入り賜はぬやうにと磐戸を守つた神。

◎出雲路道祖神 寺町の北、相國寺の後。祭神、猿田彦命。上古は京極一條の大路にあり、朱雀院の天慶二年京極に遷され、一切旅行、往來等を守る神とする。一名さいのかみ、さえのかみ。

◎五條新町道祖神 京都五條新町(前参考)。

◎御所八幡宮 京都三條坊門高倉の東。◎康永三年足利尊氏が卜部兼豊に命じて始めて祭らせた。

◎五所八幡宮 京極鞍馬口の北。第一、筑前大分宮。第二、肥前千里宮。第

三、肥後藤崎宮。第四、薩摩新田宮。第五、大隅正八幡。◎後柏原帝の大永七

年遙拜所として合祀された。

◎精大明神 京都中御門西の洞院。蹴鞠の神。祭神三座。一は計案林、二は

春陽花、三は樹尊。何れも形ちは猿に似て、額に金字で名を顯し、紀氏の人

から祭り初め、歳の初めの申の日社前で蹴鞠を行ふ。

◎踏葉明神 小下野。祭神、藤原旅子。

(参考)藤原旅子(藤原百川の女、桓武帝の妃、淳和帝の母)。

◎熊野權現 東山の聖護院内。嵯峨帝の光仁年中役行者の十世、日圓和尚

の勸請。堀川院の寛治年中、三井寺、及び園城寺の僧、増譽僧正が聖護院と

號して當寺に住んで以來聖護院が通稱となる(今熊野權現参考)。

◎今熊野權現 智積院の南。本尊は十一面觀音。白川法皇の敕願。熊野本

宮を勸請し、聖護院、若王寺、今熊野を洛の三山といふ。

◎若王子熊野權現 京都黒谷の東。崇徳帝の勸請。那智山の若王子宮と遷

された(前参考)。

◎崇徳天皇社 聖護院の西北。人皇七十五代の天子。鳥羽帝の第一の御子。

◎御廟野 日岡の麓。天智帝が崩御して昇天された時、御履を残り留めら

れた所といふ。

◎羽束師社 乙訓郡久我曠。祭神、高皇產靈尊。

◎清荒神 京橋通り草堂。舊寺領六石。舊院、常施寺。開基大空上人。

◎城南神 乙訓郡鳥羽・祭神、鳥羽法皇。

(参考)「鳥羽法皇」人皇七十四代の帝。諱は宗仁、堀川院第一の皇子。二十歳で位を第一皇子顯仁(崇徳院)に譲り、三十九歳で落飾し、鳥羽法皇と號し、院中に在つて政を聽き、保元元年七月二日崩せられた。

◎鹽竈明神 京都五條下る寺町。淳和帝の猶子、源融が奥州鹽竈の社を此處に勧請して鹽を焼き、毎月難波の浦の潮水を三十斛連送した故事がある。

(参考)「源融」淳和帝の猶子、嵯峨帝の子。改めて源氏の姓を賜はり、人臣に列なり、官は左大臣に至つた。宇多帝の寛平七年八月廿五日薨。年七十三。好んで鳥魚蟲類を飼ひ、草木を愛した。世には六條河原院と號された。

◎宗像社 京都五條下る寺町御影堂の南。祭神三座、田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神。◎延暦十四年五月藤原冬嗣が始めて祀り、京都の東西の

市に置いて守護神となし、市姫と呼んだ。◎[祭禮]陰曆九月七日。

◎宗像社 京都一條。前の宗像社の對。

◎戎宮 洛東建仁寺門前。本尊は蛭兒命。建仁寺の開基千光國師築西和尚が唐から歸朝の時、難風に逢つた處、波の中に蛭兒の像を發見した。之を船中に祭つた處風が止み浪が靜かになつた。後に洛陽に社を建てたのが即ち此社となる。

◎戎宮 四條通り室町。◎有名な茶人武野紹鷗が此社の隣に住して大黒菴と號した。紹鷗は甲斐の武田の一門で、剃髮して一閑齋武野紹鷗と稱し、和泉堺に住し、後ち此處に住まつた。弘治元年十月二十九日病死。

◎櫻葉宮 出水通り千本東へ入る町。祭神天照皇太神。◎初め右近の馬場にあり、五日荒手番ひの時、燦爛たる日光が特に此馬場に赫いたとて世人がやがて、之を日降神明と稱したといふ。

◎福大明神 堀川の西猪隈の東一條大路の南。祭神、白狐の尾。◎初めは

高倉九條殿の地に在り、寛永年中此處に移された。著聞集の記事によれば  
 知足院殿といふ人が志願の愜はぬことがあつて大權坊に祈らせた。その  
 十四日目に知足院殿が晝寢をして居た處、美人が枕頭に見えたが其髪の  
 長さは裾まであり、宛然天女のやうであつた。其處で其美人の髪を捉へや  
 うとした處、振り放して逃がれ、其髪も脱けた。夢が覺めて見れば狐の尾  
 であつた、之を見て翌日は願ひが成ると行者が云つたが果して其通りで  
 あつたといふ。俗説當社に紀貫之を祀るといふ。

◎伊勢向神社 いせむきのじんじや 淀の小橋の東河中。祭神、天逆あまさかるとむかつひめのみこと向津姫命。

◎粟田口神明宮 粟田口。清和帝が菅原船津に詔りして勸請させた。後ち  
 元弘、建武の兵火に焼け、寛永年中、伊勢の野呂左衛門源宗光が此處に塾居  
 し、神託を蒙つて再興した。

◎綾小路神明宮 あやのこうぢ 高倉の西。源三位頼政が宮中で怪鳥を射つた時、當社に  
 祈願を籠めたといふ。それ故頼政神明ともいふ。

◎富小路神明宮 京都五條上る町。

◎白山通神明宮 京都五條上る町。

◎姉小路神明宮 京都小路西へ入る町。

◎宇治橋神明宮 久世郡宇治橋。

◎市原村神明宮 市原村。

◎山科神明宮 山科の追分。

◎齋院村神明宮 齋院村。

◎梅津村神明宮 梅津村。

◎四疊明宮 洛陽の西。祭神、源爲義の末子乙若丸。

◎麗玉子の宮 西山鳴瀧村。祭神、班子皇后。仁和寺の鎮守。

(参考)班子皇后、仲野親王の女、宇多帝の母。

◎六宮權現 ろくぐわんげん 京都西八條大通寺内。祭神、源氏の祖六孫王經基。地は其居  
 宅の跡。

(參考)〔六孫王經基〕清和帝の孫、多田滿中の父、源氏の祖。  
 ◎四の宮神 宇治郡山科里。祭神、天兒屋根命、天太王命。別名兩羽大明神。◎光孝帝の弟人康親王が遁世し、禪師の宮と號し、此邊に閑居した。之を蟬丸が訪ひ來つて和歌を詠じたといふ故事がある。

◎田原の社 宇治郡田原。祭神、田原天皇。

(參考)〔田原天皇〕天智帝の第二の皇子。施基皇子と號した。光仁帝の御父で光仁帝が即位の後ち寶龜元年田原天皇と諡を奉る。

◎木幡の神 宇治郡木幡。祭神、天忍穗耳尊。素盞烏尊の子。

◎宇治の離宮 宇治。祭神、藤原忠文。

(參考)〔藤原忠文〕宇治民部卿と號し、參議右衛門督に任じた。朱雀院の天慶三年平將門謀反し、此時忠文は征夷大將軍となり追討使となり、やがて將門が誅されて後ち、秀郷、貞盛等は恩賞があつたが忠文だけは賞がなかつた。之を恨んで斷食して死んだ其靈が祟りを爲すといふ處か

ら祠を建てて之を祀つた。後冷泉院の治曆三年十月七日正三位を授かる。

◎橋姫の社 宇治川の橋本。祭神、未詳。俗傳、住吉大明神が夜當社に通ふ、其夜には今でも時ならぬ激浪があるといふ。

◎水垂の社 淀の小橋の邊。祭神、淀姫大明神。◎此邊を大荒木の森といふ。

金龍寺の開山千觀阿闍梨が應和年中肥前國佐賀郡河上社から此淀姫大明神を遷して、此處に勧請した。村上帝の時、正一位淀姫大明神の爵を賜はる。

(參考)〔淀姫大明神〕神功皇后の妹、所謂豐姫。

◎御香宮 紀伊郡伏見。舊社領三百石。祭神、神功皇后。鎮座年代未詳。秀吉が城を築かうとする時、社を東に遷した處、崇りがあつて又舊地に復した。其後ち東岡を呼んで古御香宮といふ。

◎金札の宮 御香宮の境内。祭神、天津大王神。

◎天満宮 水垂社の傍。菅丞相左遷の時、鳥羽から船に乗り水垂の岸に著いた。それから後世此處を天神口といふ。

◎春日の社 柞杜。奈良街道柏野の西、木津村の乾。神武帝が長髓彦を伐つた時、此處で長髓彦が尿を揮に遺して逃げ去つた。それから其地を揮尿と名付けたのが今誤つて柞杜となる。◎〔祭禮〕毎正月申の日から亥の日まで行はれる。傳説、此頃は悪鬼が人を惱す處から兒女、牛馬等は他に避けて、唯丈夫ばかり留守して戸を閉ぢ出入しなかつた。亥の日に神輿を御旅所に遷すことで其時は社司が白頭巾を被り、柳の枝を持ち、土人は鋤等農具を持つて供奉する儀式があり、やがて社司が器中の五穀を撮んで農夫に與へる。其時得た處の種の多いものを蒔けば其穀は必ず熟するといふ。若し少いのを蒔けば實らぬといふ。其輿が還行の翌日兩村の人が争つて組を曳き勝負し、又其年の豊凶を占ふ。

◎野の宮 嵯峨二尊院南の林。伊勢齋宮の野宮。

◎齋宮 下嵯峨九太町の東。

◎車裂神 嵯峨。祭神、清原頼業。

〔参考〕清原頼業、天武帝の裔。父は音博士祐隆といふ。頼業は高倉帝の侍讀となり穀倉院別當に補せられ、常に禮記を讀む毎に歎じ、大學中庸の兩編は必ず後世達悟の人があつて抽いて一部の物とするであらうと云つたが、果たして其通りであつた。文治五年四月卒。年六十八。其子孫は世世天子の侍讀となつた。

◎大辟の神社 太秦。祭神、秦の始皇帝。太秦廣隆寺の縁起に由れば秦始皇の祖神で仲哀帝の時、功滿王が來朝して之を奉じたと云ふ。一説、又此神の本體は石であるともいふ。又一説、欽明帝の朝に秦川勝と云ふ者、秦の始皇帝の裔といふが此處に建てて吾が祖神を祭つたものといふ。續日本後紀に據れば嘉祥二年神階從五位下を授けられた。

◎木枯明神 太秦廣隆寺の南。清和帝の敕に由つて乙訓郡から藥師佛を

迎へた時、向日明神の影が楓の木に在り、俄に其木が枯れた、之を勸請し、木枯明神と名付けた。

●木嶋神社 葛野郡太秦。廣隆寺の鎮守三十八社の内。祭神、一座、天照坐御魂神。嵯峨帝が唐から得た書卷の中に「遊仙窟」が有り、紀傳博士に示されたが孰も讀めなかつた。時に木嶋社の近邊の草菴に老翁が兩眼を閉ぢて遊仙窟を誦んで居たことを學士伊時が聞いて其處に到り、誦習を請ひ、其言ふ儘に假名を付け、遂に一帙を誦み畢つて歸つてから後ち、其老翁に寶物など贈つたが其老翁の影は見えなかつた、是が恐らくは是れ木嶋大明神の化現であつたらうなどといふ。

●裏柳明神 嵯峨の中院。祭神、橘喜智子。仁明帝の母后。

(参考)「橘喜智子」仁明帝の母后。佛法を信じ、薨する時には遺言として、決して死骸を葬らず郊原に棄てると命じた。由つて、嵯峨野に棄てた處、犬が來て食つて死骸は分散した。其御髮は二尊院の門前にあり、之を長明

神といひ、其骸骨は小倉山の麓にあり、之を日裳明神といひ、其御手は野宮の左、龜山の麓に遺る、之を拳の社といふ。

●水尾社 愛宕山の西、水尾村。清和帝の御廟。

●安倍晴明の社 堀川の西一條大路の北。此處が安倍晴明の居宅の跡といふ。

(参考)「安倍晴明」仲麻呂の末。父は大膳太夫益材。晴明は幼年から聰明で、賀茂保憲に就いて天文を學び、其蘊奥を究め、其他曆算推歩の術に至るまで残らず修め、萬代不朽の名を残した。

●大將軍の社 京都中に四個處。第一東、即ち岡崎、第二西、即ち紙屋川、第三南、後世滅じて其跡は分らぬ。第四北、紫野大徳寺門前。○桓武帝が平安城の四方に之を築いて王城の鎮護とした。

●楊速の神社 京都猪熊三條の南。上古刑部省が此邊にあつた、即ち今日の牢屋で其刑死した者の爲めに社を建て祭事を行ふ。之を死杖の祭り、又

活速祭りなどともいふ。

◎山城二十二社 世に言ふ山城の廿二社は左の通り、一伊勢、石清水、加茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、石上、大倭、廣瀬、龍田、住吉、日吉、梅宮、吉田、廣田、祇園、北野、丹生、貴布禰。

◎俊成卿古跡 京都五條松原通室町東。此處に居た爲め俊成卿を世に五條三位といふ。

(参考)「藤原俊成」中納言俊忠の子。最も和歌に長じ、左金吾藤原基俊に従つて其奥儀を探り、崇徳、後鳥羽の二朝に仕へ、千載集を撰した。凡て人物に由つて歌を取らず秀吟に由つて取つた爲め大いに名聲を博した。元久元年卒。年九十一。

◎定家卿の古跡 京都二條北京極の西。それ故世に定家卿を京極中納言あもさぶといふ。

(参考)「藤原定家」俊成卿の子。父に繼いで日本屈指の歌仙といはれる。

◎定家卿の山庄 嵯峨二尊院の東。爲家卿も此處に住した。即ち有名な小倉山庄で定家が此處で百人一首を撰した。之を小倉の色紙といふ。

◎橘諸兄の邸跡 相良郡井手。

(参考)「橘諸兄」敏達帝の六世美奴王の子。葛城王と稱し、左僕射となり、和銅元年十一月廿五日天皇が其忠誠を賞めて杯に浮かんだ橘を賜はつた。それから橘と名のり、天平寶字元年正月薨。

◎閑院の古跡 京都二條通西洞院西へ入る町。閑院左大臣藤原冬嗣の舊宅地。

◎參議是善の宅地 京都烏丸下立賣下る舊堀内町。

(参考)「是善」菅原道眞の父。後ちに歡喜光寺と號した。北野の祭りの日には此地の枇杷を探つて神前に供へる儀式がある。是善は清和帝の時、大江音人等と貞觀格貞觀式等を撰て、文章博士の第一と云はれた。

◎關白兼家の宅 京都一條通北新町東一町。其時代では町尻殿まちしりのと號した。



それ故往時は新町通を町尻通りとも云つた。

◎小野萱の古跡 京都黒門通二條上る。今は城内となる。

◎公任の古跡 京都西洞院四條通下る町。

(参考)「公任」四條大納言と號し、後一條院の時の人で和漢の學に達し、詩歌管絃に通じ、圓融帝から以來數朝に事へて官は大納言に至つた。

◎公任の山庄 愛宕郡八鹽岡の邊。此邊公任御幽居の古跡を後世、朗詠谷といふ。

◎俊惠法師の舊跡 山城久世村福田寺。

◎壬生忠岑の宅地 壬生の地藏の北。今は田となる。

(参考)「壬生忠岑」延喜五年古今集の撰者四人の一となる。其子忠見も亦歌人の評がある。

◎藤原時平の古跡 京都中の御門榎本通北堀川の東一町。

(参考)「藤原時平」世にいふ本院左大臣。關白太政大臣藤原基經の嫡男。

宇多帝の寛平九年大納言に任じ、左大將を兼ね、其妹の穩子は醍醐帝の后となつた。昌泰二年左大臣に任じ、左大將は故との如く、延喜元年八月三代實錄五十卷を撰し、延喜九年四月四日薨じた。年三十九。贈、正一位大政大臣。此人の失徳としては菅原道眞を讒して貶したことであつた。

◎有智子内親王の山庄 嵯峨の西の庄。

(参考)「有智子内親王」嵯峨帝の女官。和漢の學に通じ、善く文を作り、弘仁五年加茂の齋院となり、同十四年二月嵯峨帝が齋宮に行幸あり、文人墨客をして春日山莊の詩を賦させた。此時内親王は塘光行蒼の韻を探り得て忽ちに詩を賦した。時に年十七歳。其詩は左の通り、「寂寂幽牀水樹裏。仙輿一降一池塘。栖林孤鳥識春澤。隱澗寒花見日光。泉聲近報初雷響。山色高晴暮雨行。從此更知恩願渥。生涯何以答穹蒼。」天長十年二品に叙せられた。年四十一。

◎小野小町の宅地 北山、小野。今は藪となる。俗傳にいふ、此樹を人が採

れば祟りを爲ると。

◎えんのぎやうじや役行者の古跡 京都室町三條上る町。今は民家となる。

(参考)「役行者」は舒明、天智及び天武の朝の優婆塞。大和の人で山城其他諸山に入つて法術を修めた(大和葛城山参考)。

◎在原業平の古跡 京都三條坊門の南、高倉の西。

(参考)「在原業平」は平城帝の孫、母は伊登内親王。容姿閑雅、善く和歌の才に達し、三十六歌仙の一といはれた。從四位上藏人頭右近中將に至り、陽成帝の元慶四年五月廿八日卒した。年五十五。深秘抄に據れば業平は幼名を曼陀羅丸といひ、十四歳の時、真雅僧正に從つて密法を學んだ。それ故詠じた和歌も多くは真言の奥旨を得たといふ。

◎紀貫之の古跡 京都榎木町柳の馬場通の北、通稱櫻町。後ちに中納言成範卿が櫻を多く植ゑた爲め櫻町中納言といはれた。後ちに豊臣秀吉の北きたの政所が此處に住んだ。

(参考)「紀貫之」木工頭で後ちに大内記となり、延喜五年詔りを奉じて、古今集二十卷を紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑と共に撰した。和歌の達人で第一流に位し、筆跡なども巧みであつた。世に和歌の二條家派として傳へるのは貫之を頭として次ぎに基俊、俊成、定家、爲世、頼阿、經賢、孝尋、堯惠、堯孝、常縁、宗祇、實隆、道遙院、公條(稱名院)、實澄(三光院)、玄旨などといふ。◎「東常縁」姓は平氏。美濃の人。和歌の達人。◎「宗祇」一名、自然齋、又種玉菴。紀伊の人、樂師飯尾氏の子。幼年の頃一律院に入つて薙髮し、各地の名所古跡を遊歴した。性質和歌を好んで東常縁に古今集の奥旨を傳はり、連歌の風致を興起し、之を「花の下」と名付け、遂に連歌の棟梁となつた。常に香を焚き鬚を薫じて、「吾れ鬚を愛するにあらず香氣の常に在らんことを欲す」と云つて居た。文龜二年七月晦箱根湯本で寂年八十二。◎「細川玄旨」即ち幽齋として聞こえる。字は藤孝、累代足利家の臣で長岡といふ苗字を名乗り、信長、秀吉に仕へ、丹後を領し、武人と

しての名と共に和歌でも名があつた。

◎慈鎮和尚の古跡 京都東山大谷、即ち今の智恩院邊。

(参考)〔慈鎮〕天台の座主で能く和歌を詠じた。

◎清少納言の古跡 萬里小路通中御門と春日通との間。今は民家となる。

(参考)〔清少納言〕一條院の皇后宮の女房。舍人親王の曾孫通雄が始めて姓を清原と賜はり、それから後ち清の字が通り名となつた。詞才あり、其漫筆「枕の草紙」は紫式部の「源氏物語」と相並んで後世大作とされる。皇后が薨じて後ち清少納言は四國に移り、それから洛の誓願寺で出家して往生を遂げた。一説、老いてから阿波の撫養郡蜷村で死んだといふ。

◎徹書記の古跡 靈山の稱名寺の住僧。其寺は二條烏丸に移し、秋の道場と云はれ、後世寺町大炊の道場聞名寺の内に遷された。

(参考)〔徹書記〕姓は紀、名は正徹、字は清岩。東福寺の佛照派の僧。和歌に通じ、和歌と筆跡とは屈指の名がある。始めて菴を構へ松月と號し、後

ちに山科の居所で招月と字を改め、遺藁を「草根集」と名付けた。

◎道滿の宅 京都大宮通三條下る。

(参考)〔道滿〕は播磨の人で占ひを善くし、阿部晴明と術を比べやうとして京師に到つたが及ばなかつた。或る時關白道長公を呪咀した。其事を道長は知つて居つたが道滿の所在が分からず、やがて晴明が白紙に鷲を書き、風に任せて之を放つた處、道滿の屋根の上に落ちた爲め遂に捕へられたといふ。

◎自然居士の古跡 京都東山高臺寺。此高臺寺はもと雲居寺といはれた。居士は即ち雲居寺の住僧。(和泉國参考)。

◎佐藤忠信の邸跡 七條坊門不動堂の東南。

(参考)〔佐藤忠信〕義經の忠臣。佐藤繼信の弟。吉野を遁れて此處に住んで居た。

◎源賴光の邸跡 京都一條堀川。後ちに右大將道綱卿の家。

(參考)「源賴光」源滿仲の長子。勇名あり鎮守府將軍に任ぜられた。大江山で酒頭童子を誅し、市原野で鬼同丸を斬り、春宮坊で妖狐を退治し、御一條帝の治安元年七月廿四日卒した。

●源義經の館跡 楊梅通油小路の西。所謂六條堀川の館。土佐坊昌俊しやうしゆんが源賴朝の命により夜討ちをした時、義經は此處で防いた。今は田となる。

●大塔宮の邸跡 京都吉田神樂岡の東の麓。此處から白川に出る道を俗に呼んで大塔道といふ。

(參考)「大塔宮」名は護良親王。後醍醐帝の御子。早く天台座主となり、性質は剛毅で皇室を扶け、武家を覆す志しがあり、武事を好み、天皇に勸めて北條を討ち宿志を貫かうとして足利直義に鎌倉に幽され、遂に弑された。時に建武二年。

●清盛の古跡 京都八條大宮の西の方、即ち平清盛の西八條の御所といはれる所は此處で、清盛も此處で薨じた。

(參考)「清盛」保元、平治の役に謀略で爲義、義朝、義平を殺し、諸國を擅に領し、威を海内に振ひ、官は相國となつた。其女を宮中に入れて皇子を生み、之を安德天皇と稱し、一族の官位は益進み、幼主を挾んで福原に遷り、入道して淨海と名付け、權を振つた。養和元年閏二月四日薨。年六十四。

●源義朝の邸跡 紫竹村大徳寺の末寺、大源菴方丈の南の庭。其妾常磐牛若丸を此處で生み、其時用ゐた産湯うぶゆの井といふは今もある。

(參考)「義朝」六條判官爲義の子。御白河院の時、新院(崇徳帝)が重祚の志しを挾み、遂に保元の亂が起つた時、義朝は新院に反對して、父と争ひ、後ちに平治の亂の時、平清盛を憎んで藤原信賴と亂を起こし、過つて負け、家人長田忠致に弑された。實に平治二年正月三日。嫡子には悪源太義平、二男朝長、三男頼朝、妾腹には牛若丸。

●武藏坊辨慶の古跡 京都二條河原の東南。

●羅生門らせいもんの礎の跡 上古、大内裏の南門、九條通の南西。即ち東寺の西千本

通。

◎伊勢の古跡 京都二條南東洞院。伊勢は百人一首に見える女性の歌人。庭に結び松があり、能因法師が讃岐前司兼房と同車で此處を過ぎた時、其松を見て伊勢の宅地たることを知つて下乗したといふ。

◎虎關の古跡 千本通。關白兼經公が楞伽寺を此處に建てて虎關を置かれた所。

(参考)「虎關」名は師鍊。藤原兼經公の三男。母は源氏。文殊童子と號された。經書を一覽すれば輒ち暗誦する位で八歳の時、寶覺和尚に従つて出家し、十歳の時、祝髮して受戒し、寶覺入寂の後ち四方に遊び、正慶年中東福寺に遷り、何くも無く位を退き、曆應年中敕を奉じて南禪寺に住した。晚年海藏院に退休し、貞和二年七月廿四日遷化した。年六十九。本覺國師と謚された。其著述は「佛語心論」、「元亨釋書」、「十勝論」、「正脩論」、「濟北集」、「三重韻」、「并語錄」等。

◎茶人殊光の宅 六條堀川醒牛通の西。其土地に井があり、之を醒が井と號し、其水は清冷の名が有る。

(参考)「珠光」南都稱名寺の僧。還俗して此處に住し、足利義政に愛せられ、茶の湯を立てた。

◎利久の井 京都北野尼寺の東南竹林の中。豐臣秀吉が北野社の南の林間で大茶の湯會を設けた、其時千利久が此井の水を用ゐた。

(参考)「千の利久」名は宗易。和泉堺の人。初めの名は與四郎。其先は室町家に仕へ、同朋役を勤め、名を千阿彌と云つた。それ故其子孫は千を苗字とした。茶人では屈指の人で後世に至つても其流末を仰ぐ。後ち秀吉の怒りに觸れて遂に刑戮に遇つた。

◎吉次が井 京都西陣五辻通南櫻井の辻。所謂金賣り吉次の宅地の跡。源牛若が始めて奥羽に赴く時首途を此處で祝ひ、それから其邊の水を「首途の水」といふ。

◎半井なかいら 烏丸中立賣の北。昔し施藥院の醫者和氣氏の家内に大きな井があり、板で半分に仕切り、半分を製藥の用とし、半分を雑用の水とし、それから半井氏と號した。日本で醫術を云ふ者は和氣、丹波二家を中興の醫宗とする。

(参考)「和氣氏」氣或ひは家と書く。垂仁帝の皇子鐸石別命たてしほのみことから出、清麻呂の後といはれる。其後ち和氣時雨わきときりと云ふ者があり、それから名聲が世に鳴り、其子孫に良醫が多かつた。正親町帝の時、半井瑞策と云ふ者一名を驥菴と呼び、業を受け繼ぎ明國に入つて妙術を學び、大いに家聲を起して、通仙院の號を賜はつた。◎「丹波氏」後漢の靈帝の子孫。歸化して丹波國に住し、遂に日本の醫宗の一派となつた。其後ち康賴に至り、丹波氏を賜はり、醫で當世に鳴り、白河院の承暦四年高麗の王が病氣で醫を日本に求めた時、丹波雅忠の醫術が異國に聞こえた爲めに行かうと望んだが朝廷では惜んで許さなかつた。◎「曲直瀬道三」字は一溪。京都柳

原の人。近江天光寺に入り經典を學び、十三歳で詩文を學び、弱冠の時、關東に行つて足利丈伯と云ふ者に群書を學び、醫術を善くした。二十五歳の時、醫善道に謁し、次第に妙術を究め、遂に一代の名醫となつた。著はす處の書は若干あり、文祿四年八十九歳で卒。其子東井、孫は玄鑑相續いて名家といはれた。

◎宅間法印の塚 鳴瀧。

(参考)「宅間澄賀法印」宅間派の畫工として屈指の人。

◎血洗ちあらひの池 栗田山の麓。源牛若と關原與市と戦ひ、血に染みた刃を洗つたといふ。傍に「蹴揚の水」といふのがある。

◎美止呂みとろが池 鞍馬山路の傍。

◎廣澤の池 鳴瀧大の麓。月の名所。池中に深い淵があり、其中に大きな鯉が居る。

◎御池 三條坊門。舊も二條殿の邸宅。其御所の泉水も水は極はめて冷た

く、昔しは盛夏に甜瓜を冷やして禁裏に獻じたといふ。

◎智井の水 北山岩倉十二所明神の傍、三井寺の関伽の水といふ。

◎御手洗の水 京都烏丸四條坊門下る町東側、祇園の神事に氏子が此水で身を潔める。

◎吉水 圓山安養院の内、旱魃の時、應驗があるといふ處から此邊の水を吉水と名付けける。

◎明星の水 吉田本社の前、橋の東の方の井の水、ト部兼俱が此水で垢離を祈つた時、明星が出て水上に降臨したといふ。

◎臙の清水 臙の里。

◎洞峠 男山の南、八幡宮遙拜の地。

◎連理の芝 市原の南野の中村、東西を隔ててある故に連理の芝と名付ける。賀茂の社司が貴布禰社に参り、歸路此邊の虎杜草を採り、互に大小多寡を争ふて戯れとする。

◎並か岡 仁和寺の東南、一の岡、二の岡、三の岡相並ぶ。

◎戻橋 一條堀川、淨藏貴所の法術で父の三善清行が此處に蘇生した。

◎八瀬の里 愛宕郡比叡山の西麓、天武帝が大友皇子を逐はれた時、御背に天を射中てられた所、それから「矢背の里」といふ。山中に隠れて鞍を置いた處を鞍馬山といふ。今は八瀬の婦人は黒薪を賣つて業とする。

◎橋本 八幡山の麓、神龜二年行基が山崎河に到つて一大柱あるを見、橋を造つた。天正二十年秀吉が改めて造る。其長さは百八十間、廣さ五間、柱百三十八本で後世になつて毀れた。

◎紙屋川 北野と平野との中間。

◎鳴瀧川 仁和寺の乾般若寺の麓。

◎狐川 淀の水垂村の南、淀川から出る。

◎有栖川 嵯峨の川端村東の入り口。

◎大堰川 丹波路から出て末は淀川に入る。戸南瀬瀧も亦これに入る。嵐

山の麓から出て南へ流れるを梅津川といひ、五町許りと過ぎて桂川といふ。

◎白川 今出川通東智恩院の前に出、東北へ半里行く。山から多く白い石を切り出す、これを白川石といふ。

◎宇治川 琵琶湖から出て、岩石の間を過ぎ奔湍瀧のやうで船で渡ることを得ず、其橋を宇治橋といふ。治承四年頼政が平等院に在つて平氏の軍勢の攻め寄せる時、橋の中間を切り落とし、大いに防いた。此川は歴史上有名な川で頼朝と義仲との戦ひには佐佐木高綱が梶原景季と先陣を争つた。

◎關戸の宿 山崎。其昔し、當國の南界で關があつた其跡。

◎氷室山 一條の東北。

◎雲林院 大徳寺の門前の村の名、船岡と北野との間。上古、常康親王、僧正遍昭等が此處に住した。櫻の名所。

◎弦女會 建仁寺の前。弦女會は「弦をめせ、即ち買へ」との義。傳教大師が唐から歸朝の後ち弓の弦を造つて業として居た。其子孫が相續いて建仁寺町に在り、毎六月祇園會に神輿を昇ぐのを例とし、世に之を大神人といふ。

◎松之丸殿の古跡 京都西洞院中立賣の北。松の丸町と名付ける。

(参考)「松之丸殿」大岡秀吉の妾。秀吉薨去の後ち尼になつて此處に住し誓願寺を再興した。

◎青蓮院 栗田口。天台宗。舊寺領千三百三十餘石。始めは十輪院と號した。開基は傳教大師から九世の人、行玄大僧正。本明治廿六年九月焼失。凡そ諸宗の僧徒が任官し、緋衣、紫衣を許されやうとする者は當寺に來つて願ふのが舊例となつて居た。又尊圓親王から筆法傳授の家で世に之を御家流と名付ける。

(参考)「行玄」京極大閤師實の男。其後胤世世親王の寺となる。◎「尊圓法



親王〔伏見帝の王子、母は右衛門佐俊衡の女で祝髪して僧となり。初めは尊彦と云ひ、後ち改めて尊圓と號し青蓮院に入つた。行玄から十七葉の門跡で本朝近代の能書といはれた。後光嚴院の延文元年九月薨。御年五十九。〕○〔慈鎮和尚〕名は慈圓、關白忠通の男。九條殿月輪殿の弟。覺快親王の附弟で山門の座主に任ずること四度。嘉祿元年九月廿五日東坂本大和の庄小島坊で入寂。嘉禎三年三月慈鎮と諡された。

○曼珠院 一乘寺村。天台宗。舊寺領八百二十七石。號、竹内の御門跡。開基は八條宮二品法親王良尙始めて北山の後に建て、明暦三年此處に遷された。

○毘沙門堂 山科。舊寺領五百七十石。寛文中建立。開山花山院大僧止公海(後ち親王寺となる)初めは相國寺塔の壇の毘沙門町にあり、後ち此處に遷された。

○常修院 北山大原の邊。天台宗。舊寺領九百六十四石。梶井宮二品親王

慈胤即ち後陽成院宮の建立。開基、傳燈大師。即ち慈覺大師の弟。京師の御坊を梨本といふ。

○聖護院 東山聖護院村。舊寺領千五百石。開基、智證大師。○清和帝の貞觀八年奏して持念院を建て、冷泉院で寶祚を祈り、園城寺の長吏で修驗行者を定め、當山を本山とし、道寛法親王宮(水尾院の皇子)から道祐、道尊、道承相續いて三門跡と云はれた。開基から是れ迄三十七世。○崇徳院の天治二年三井寺の行尊を大僧正となし、能野三山の檢校とし、山伏しの事を預からせた。○山伏の大峰入りは役行者が白雉三年十二月卅日始めて葛城山に入つた、是れが初めて、順の大峰入りといひ、翌年七月十六日復た大峰入りを爲た、是れを逆の峰入りといふ。それから義學、義玄相續いて入峰し、後ち聖護院の七世道譽白河院熊野御參詣の先達となり、累世御門跡は十九歳になると七月廿五日は必ず入峰する。其處で峰入りの時は髪を長さ一寸八分に翳り、兜巾、鈴掛け、二刀を佩き、前驅扈從の儀式が嚴重であつ

た。其前日には東山の勝軍地藏に至つて護摩を修する。●(一)〔若王寺〕東山。(二)〔勝仙院〕六角堂。(三)〔積善院〕聖護院村。

◎照高院 白川。天台宗。舊寺領千石。最上四天王院と號した。後世聖護院の御隱居寺となす。

◎勸修寺 南山科。舊寺領千石。後醍醐帝の勅願、開山濟高大僧正。親王寺となり、南都東大寺を兼帯する。初めの寺領は五百石で元祿年中濟深二品法親王の時から千石となる。◎昔し、渤海の人が此處を過ぎて馬から下り、拜して、此處は靈區である、此處から高貴の人が出て伽藍の地となるであらうと云つた。果たして醍醐帝の御母が此地に生まれた人でそれから寺を勸修寺と名付けたといふ。◎延喜四年勅命に由つて定額寺と號し、同十年濟高大僧都を當寺の長吏に任じ、天慶七年貞譽律師が二世の長吏となつた。

◎隨心院 小野。開山、仁海僧正。中興、増俊阿闍梨、即ち中納言國俊の子。

中古以來攝家御門跡となる。

(参考)〔仁海〕元果阿闍梨に事へて密學を稟け、博く衆流を研究し、密學の講義を始めた處、諸方から來つて業を受くる者甚だ多く、世に小野密派と稱された。後一條院の寛仁二年六月旱魃の時、救命に由つて神泉苑で雨を祈り、大雨遂に三日も降つた。凡て雨を降らせた事が九度もあつた故人が雨僧正あまてらすじやうと稱した。後冷泉院永承元年五月十六日入寂。年九十二。◎醍醐寺 宇治郡。舊寺領四千八百石。醍醐、朱雀、村上の三代の帝の勅願。聖寶僧正の開基。本尊、如意輪觀音(聖寶の作)。巡禮で第一番(女人結界)。山の上の觀音堂の前に靈水あり、醍醐の味に似たとて寺號と爲つた。

(参考)〔聖寶〕讚岐の人。十六歳の時、眞雅法師に就いて得度し、三論を元興寺、唯識及び華嚴を東大寺で學び、又高野眞然に謁して密教を稟け、清和帝の貞觀の末醍醐寺を開き、顯密二教を演じ、又南都東南院を建て、三論の宗を講じ、凡て丈六の大佛を造つたこと二十餘回もあつた。仁和三

年傳法阿闍梨の位を賜はり、寛平二年貞觀寺の座主となり、延喜二年僧正に任じ、延喜九年七月六日入寂した。年七十八。病中太上天皇の訪問を受けたほどで、其所持して居た如意は背に五つの獅子を刻み、面に三鈷杵を彫り、顯密兼學を表し、興福寺の維摩講師は必ず此如意を持つて儀式を行ひ、若し此如意が無い時は講會を差し措いた位鄭重にされた。聖寶が監督して居た寺は東寺、西寺、醍醐寺、東大寺、興福寺の五寺であつた。

◎下醍醐・菩提寺 上醍醐の麓。女人の參詣を許す。開基、三寶院覺僧正。即ち左大臣俊房の男。

◎大佛殿・方廣寺 京都七條通、伏見街道。草創、妙法院二品法親王。舊寺領千六百卅三石。天正十四年豐臣太閤の建立。慶長七年同内大臣秀頼が銅で盧遮那の大佛像を鑄た。此寺に鐘を奉納するとて圖らず、徳川家康どの悶着が出来て遂に大坂の戦ひとなつた故事のある有名な寺。●(一)大佛

佛體長さ十間、面長さ二間、眼横五尺、豎三尺、鼻高さ五尺五寸、横四尺、鼻孔二尺、口二尺八寸、横八尺、耳長さ一丈、掌から指の端まで二間、拇の周圍六尺五寸、膝の周り二十三間、足裏一丈四尺、横七尺、螺髪三百五十本、太さ各二尺五寸、白毫直径二尺、後光高さ十八間、横九間、蓮花壇各八尺。(二)大佛堂[堂の桁行き四十五間二尺五寸、梁行き二十七間五尺五寸、棟の高さ二十五間、柱九十二本、徑五尺五寸、上の屋棟は千五百二十八坪、同唐草瓦二百九十六枚、下の屋棟千四百七十二坪、同唐草瓦三百八十枚。(三)二王門[桁行き十五間二尺五寸、梁行き六間一尺、柱數十八本、仁王高さ一丈四尺、狛犬居長七尺。(四)鐘樓堂[四間四方、鐘の高さ一丈四尺、徑九尺二寸、厚さ九寸。◎三十三間堂 大佛殿の傍。舊寺領十石六斗。鳥羽院の御願で平忠盛が建立し、十一面觀音千一躰を安置し、崇徳院の天承元年開眼供養あり、導師は忠尋僧正。是から平・愈山・得長・壽院と號した。◎御白河院が又千手觀音千躰を造り、改めて蓮華王院と號した。◎堂の長さ六十四間一尺八寸六分、

料高さ四尺七寸八分、幅一尺三寸半、椽高さ一丈六尺五寸、縁の幅七尺五寸、  
◎此處で弓術を試みる人が昔し矢數を射つた。射る人は縁の南端七尺九寸の處に坐を占めた。

◎智積院 大佛殿の東南。舊寺領五百石。豐臣秀吉の建立。妙心寺の南北和尚を開祖とし、祥雲院と號した。其前織田信長が根來寺の徒黨を患み、伽藍及び新義派を滅したのを徳川家康が憐み、殘僧中の拔群の者二人を擇び一は長谷寺の小池坊に遣はし、一は當寺に住せしめて新義派を再興させた。それから祥雲院は妙心寺に遷り、改めて智積院となる。

◎耳塚 大佛の門前。豐臣秀吉が朝鮮征伐の時、獲た敵の耳と鼻とを埋めた所。塚の周圍百二十間、高さ五間、石塔高さ二間、臺石方一丈二尺。

◎養源院 大佛の近處。天台宗。舊寺領二百石。淺井備前守長政が卒して戒名を養源院と稱した、其息女崇源院殿は徳川台徳院相公の夫人で父の爲めに此處に寺を建てた。

(參考)〔淺井長政〕近江の武人。其先は佐佐木京極家から出、後ち長政に至つて織田信長に滅された。

◎最勝寺 白川。舊寺領千石。鳥羽院の敕願。龜山院再興。

◎金藏院 葛野郡西岩倉山。天台宗。開山隆豐和尚。昔しは五十坊、後世は四坊。

(參考)〔隆豐〕名は行善。薩摩河邊郡の人。高麗に渡り、歸つて觀音を造り、其靈驗が叡聞に達した。元正帝の養老二年精舎を造り、天平勝寶三年十月三日入寂。

◎蓮華光院 建仁寺の裏。舊寺領三百石。

◎賢相院 愛宕郡岩倉。天台宗。舊寺領四百十二石。

◎大雲寺 右と同所。圓融帝の勅願。日野中納言文範卿の草創。眞覺上人の開基。本尊十一面觀音は行基の作。

◎眞如堂・極樂寺 神樂岡の東。舊寺領百五石。鈴聲山と號し、一條院の敕

願。叡山の二戒算上人の開基。浄土宗を兼學し、念佛の道場とする。本尊は阿彌陀、慈覺大師の作で身長三尺三寸。

◎東北院 眞如堂の西北。舊寺領六石。後一條院の長元三年建立。もと上東門院の御所。和泉式部の塔、軒端の梅などがある。

◎法成寺 京極東近衛の北。後一條院の朝御堂關白道長の建立。治安二年落成。導師院源。其金堂に三丈二尺の大日如來を安置し、一一蓮花の葉の上には百體の釋迦を置いた。

◎西園寺 寺町筋違長福寺の北。西園寺公經の草創。初め大徳寺の西北にあり、常住心院と號し、義滿が其地を請ふて金閣寺を造つたため此處に移し、後ち改めて西園寺と稱した。

◎法嚴寺 山科。寶龜九年四月行睿居士が履を遺した所。天智帝の時建立（清水寺参考）。

◎遣迎院 廬山寺の南。四宗兼學。善惠上人の開基。

◎廬山寺 寺町今出川通。舊寺領五十七石。御嵯峨帝の寛元三年住心覺瑜上人建立。天台の別院、四宗兼學となり、晋の惠遠法師が老翁に化し廬山の二字を授け、それから日本廬山天台講寺と稱するといふ。

◎仁和寺 京都大内山。眞言宗。舊寺領千五百石。光孝帝の仁和四年敕願建立。本尊は弘法大師作天子等身の阿彌陀。宇多帝讓位後此處で密教を修められた。三尊供養の導師は弘法大師の弟子眞然僧正。寺内は古來櫻花の名所として聞こえる。櫻は不思議に皆低く枝幹盤屈する。

◎大覺寺 葛野郡嵯峨。眞言宗。舊寺領千十六石餘。もと嵯峨帝の宮、後に寺となる。貞觀十八年始めて大覺寺の號が付く。◎後宇多帝は徳治二年落飾して此寺に住せられた。◎（一）内金堂後醍醐帝の元弘元年の建立。（二）内塔御光嚴院の應安六年建立。（三）廡舎濟治院と名づけ、此處で僧尼の病氣を療治する。

（参考）恒寂即ち此大覺寺の開山。淳和帝の第三の御子。能書の評があ

り、嘉祥二年薨して當寺に入り、丈六の阿彌陀像を造つた。仁和元年九月十日年六十歳で入寂。

○泉涌寺 大佛の東南。禪、律、真言、淨土四宗兼學派。舊寺領六百八十一石。文德帝の齊衡三年左大臣緒嗣の建立。建保六年大和守中原信房が俊柄を伴持とした。初めは泮輪寺と號し、後ち仙遊寺と改め、清水が湧き出た處から泉涌寺と改めた。○累代の天子の陵が多く此處にあり、四條帝以來代代であつたが明治になつて寺は焼けた。●(一)來迎院〔舊寺領二十八石。(二)新善光寺〕初めは一條の大宮に在つた。(三)悲田院〔舊寺領五十石。上古施藥悲田の兩院を置き、飢寒病難の人を救つた。初めは洛の大應寺にあり、應仁年中此處に移された。(四)戒光寺〔舊寺領百六石。開山は曇照法師。入宋して歸朝の時、丈六の釋迦の像を持ち來り本尊とした。(五)十八羅漢の像〔當寺の寶物。唐の禪月大師の畫。(六)貝多羅葉〕。

(參考)〔俊柄〕字は不可樂。肥後飽田郡の人。生まれて數日樹下に棄てら

れたが三日も経つて恙なかつた。其姉が抱いて歸つて母に告げ、それから不可樂とした。性質非凡で四歳の時池邊寺に投じ、七歳で能く佛書を讀み、九歳の時、大般若經を讀み、十歳で法華經を六日で讀み終つた。十四歳の時顯密を學び、十八歳で落髮し、十九歳で具足戒を受け、建久十年入宋し、寧宗皇帝の慶元五年天台に登り、又禪旨を經山寺に受け、翌年丁宏律師に従つて律を習ふこと三年、秀州に到つて天台の奥旨を究め、嘉定四年歸朝し、建曆四年肥後筒が嶽に寺を建て正法寺と號した。此俊柄が宋から持つて來た書は凡そ二千百三卷で律宗の經書二百二十七卷、天台の章疏七百十六卷、儒書二百五十六卷、華嚴章疏百七十五卷、雜書四百六十三卷。嘉祿三年二月八日寂。年六十二。

○萬祥山・大通寺 櫛笥通七條。舊寺領二百八十石。貞純親王の邸宅。六孫王經基の舊地。開祖は木幡廻心上人。○源實朝の母、政子が當所で剃髮し、二位の尼本覺と號し、尼寺となし、遍照心院と號した。○元祿二年徳川家

で再興。

◎法金剛院 はつこんがうゐん 並ならびか岡おかの南太秦うづまさの東。戒律、真言、淨土兼學。もと右大臣清原

夏野の山莊。舊寺領七十石。文德帝の天安二年建立。其頃の號は天安寺。

◎崇徳帝の母后待賢門院再興。院は康治二年剃髮して真如法尼と名付け、

久安元年八月廿二日薨じた。◎崇徳院の大治五年法金剛院と改號。

(参考)〔圓覺律師〕此寺中興の祖。性は大島氏。伊豆の人。法金剛院に入

つて融通念佛を修し、嵯峨の清涼寺を建て、慶長元年九月十四日遷化し

た。

◎良岑寺 よしみねでら 西山小鹽村の西。四宗兼學。本尊十一面觀世音、三尺の立像。◎

御朱雀院の長久三年源算上人開基。中古、慈鎮和尚、尊圓法親王等が此處に

住居した。其後ち淨土宗西山派の始祖善惠上人が此處に居り、昔は五十

餘坊あつたが後世は七坊になつた。◎〔千手觀音〕長八尺。順禮第二十番の

禮所。仁弘法師が草堂觀音を造つた餘木で此像を造つた。

◎三鈷寺 さんこじ 良岑寺の上。源算上人退隱の地。初めは往生院と名付け、敕願寺となつて往生の字を避け、山の形ちが三鈷に似て居る處から改めて三鈷寺とした。

(参考)〔源算〕因幡の人。生まれた時、路傍に棄てられて三日も経たが恙かつた。隣人が之を拾ひ育て、總角の頃叡山に上つて剃髮し、壯年に及んで還俗し、四十五歳の時再び本山に返り、後ち西山良峯に至つて苦行し、承徳三年三月入寂した。年百十七。

◎觀念三昧院 三鈷寺の東坂。蓮生房の開基。

(参考)〔蓮生房〕本名字都宮彌三郎頼綱。元久二年下野で遁世し、それから京に上り、攝津勝尾山に到り、源空上人を師として出家し蓮生房と號し、又實信房とも稱へた。正元元年十一月十二日卒。

◎勝持寺 西山大原野。大原寺と號し、四宗兼學。開基行基。四十九院の一。有名な櫻があり、世に花寺といふ。秋は紅葉の美觀あり、遊人も群集す

る。  
 ◎まきののぞさん 榎尾山・西明寺 高雄の北、平等心土院と號し、弘法大師の弟子智泉上人の開基。建治年中和泉の榎尾の自證上人が再興し、それから律院となる。舊寺領三十五石。

◎とうじ 東寺 九條大宮、眞言宗。舊寺領二千三十石。別號秘密傳法彌勒山救王護國寺又、金光明四天王救王護國寺。位置は大内裏の羅生門の東に當たる。◎上古外客を鴻臚館に迎へた時、桓武帝の救命で建てた。◎嵯峨帝の弘仁十四年沙門空海に地を賜ふて伽藍とし、國家鎮護の道場とした。◎河海抄に據れば、東の鴻臚を東寺となし、弘法に賜ひ、西の鴻臚を西のとなし、守敏に賜はられたといふ。●(一)南大門「東は金剛の像、蓮慶の作、西は力士の像、湛慶の作。(二)中門「東は雄夜叉おしや、西は雌夜叉めしや。(三)鎮守「第一、稻荷大明神、密宗一家の總鎮守。第二、八幡大菩薩。

(参考)「釋實惠」承和二年東大寺の長者となつた。姓は佐伯氏、讃岐の人。

初め大安寺の泰基に唯識を學び、後ち弘法大師に従つて兩都の密法を稟け、承和十四年十一月十三日寂。年六十三。

◎大報恩寺 上立賣千本。舊寺領百石餘。山號、瑞應山。本尊釋迦如來及び十大弟子。俱舍、天台、眞言の三宗兼學であつたが、後世は専ら眞言となる。開基求法上人。◎「涅槃講」貞治二年足利尊氏が本寺に命じて涅槃講を行はせ始めてから常典となり、毎二月遺教經會があり、其時は智積院の僧が來つて勤める。

(参考)「求法」名は義空。藤原秀衡の孫。

◎願成就院 即ち小野の經堂。大報恩寺の末寺。足利義滿の建立。山名氏清を追善の爲め。

(参考)「山名氏清」武名あり、功で領地十一箇國に及んだ。時氏の長子として自ら南朝の勅命と稱し、義滿を襲ひ、遂に誅せられた。後ち義滿も其前功を感じ、其菩提の爲めに塔を建て、一萬部の法華經を供して追福を



し、後ち此處に移された。

◎上品蓮臺寺 船岡山の下。眞言宗。舊寺領十百石。聖徳太子の開基。寛空僧正の中興。寺號は金峯山。

(参考)〔寛空〕姓は文屋氏。河内の人。康保元年僧正となり、天祿三年二月六日入寂。年八十九。

◎光明山引接寺 舟岡の南。舊寺領七石七斗。開基は定朝。本尊其自作の閻魔王。中興定覺上人。◎庭前に櫻あり、之を普賢象と名付ける。花を折つて京師所司職に獻じ、米三石餘を賜はり、遂に例となつた。◎〔白毫院〕當寺内。紫式部と小野篁との塔婆がある。

(参考)〔定覺〕政田氏。肥後國の人。寛仁年中始めて大念佛を修した。◎〔閻魔王〕本名、閻摩羅、又中略して閻羅。日本大辭書参考)地獄の王で兄と妹とがあり、兄は男を掌り、妹は女を掌る。十王經に據れば閻摩に十王あり、第一秦廣王、即ち不動。第二初江王、即ち釋迦文佛。第三宋帝王、

即ち文珠。第四五官王、即ち普賢。第五閻摩王、即ち地藏。第六變成王、即ち彌勒。第七大山王、即ち藥師。第八平等王、即ち觀音。第九都市王、即ち勢至。第十五道天輪王、即ち阿彌陀。

◎高尾山神護國祚寺 嵯峨の北、京都から三里。光仁帝の勅願。舊寺領二百二十石。弓削道鏡が稱徳帝に愛せられ、大師となり法皇の位に昇り、其寵に誇り、八幡の神託と偽つて帝位を望んだ。之を和氣清磨が妨害し、道鏡の邪が露れ、下野に流された(豊後宮参考)。其後ち光仁帝の勅命に由り、國家の鎮護として清磨が此寺を建てた。初めの名は神願寺、桓武帝の延暦二十一年改めて神護國祚寺といふ。天長二年沙門空海に賜はる。●(一)金堂(當寺内)。(二)藥師像(五尺五寸)。(三)寶塔(眞濟僧正建立)。(四)鎮守(影向八幡宮、金堂の東南)。(五)法華會(長和五年三月十日當山の堂で始めて法華會を行はれた。此れから此日を鎮花祭と稱する)。(参考)〔眞濟〕京都の人。延暦十九年始めて出家して大小乗を學び、弘法

大師に従つて密法を受け、二十五歳の時、傳法阿闍梨の位になつて高尾の峯に入り、十二年間出なかつた。承和元年勅を奉じ、入唐し、途中難船して二十三日間海上に漂ひ、同船の中真濟と真然との二人は活きた。それから歸朝し、文徳帝の時、僧正の號を受けたが辭し、其名をば先師の弘法に譲つた。之が爲め空海と真濟とは共に僧正となつた。天安二年帝が病氣になつた時、よく看病し、貞觀二年二月廿五日入寂。年六十一。世に此人を栴本紀僧正といふ。

◎乙訓寺 今里村。一名、法皇寺。舊寺領百石。推古帝の草創。弘仁二年弘法大師を此寺の別當とし、推古帝の一百年忌、曼陀羅供を修し、其後寛平法皇の行宮となり、法皇寺と名づけ、南禪寺の伯英徳俊禪師之に居て禪寺となし、後ち真言宗で之を守ることゝ爲つた。◎桓武帝の太子早良親王が當寺に幽せられた事實がある(上御靈社参考)。

◎貞觀寺 開基真雅僧正。

◎鎌倉山・月輪寺 愛宕山、鐵鳥居の東十三町。本尊千手觀音。愛宕山坊兼帶。院號福壽院。愛宕山の五峰の一。大鷲峰と名づける。慶俊僧都の草創。空也上人が月輪山に來住した時、寒蟬の瀧の龍女が婦人に化して上人に見えていふ、「師の誦經の軸に必ず佛舍利あり。我に與へよ」と。それから軸を割いて見た處、果たして其言つた通りであつた。其處で其佛舍利を龍女に授けた。もと此山には水が無かつたが、其恩を報ずるために忽ち清泉が迸り出て、今日いふ靈水が出來たといふ。

◎補陀落寺 靜原村。真言宗。本尊千手觀音。開基延昌僧正、即ち惠亮和尚の弟子。村上帝の天徳三年深養父が建立した。當寺には水が無かつた處、延昌が尊勝の呪を誦じて冷泉が出た。應和四年五月十五日寂。

◎清閑寺 東山。高倉院の御宇建立。◎高倉帝の陵、小督局の墓などがある。

◎般舟院 五辻の南。舊寺領五十石。般舟三昧院と號する。文明年中惠篤

上人開基。文祿三年豊臣秀吉が伏見城を築いた時、此處に遷された。

◎神泉苑・護國寺 三條大宮通の西。舊寺領四十石。桓武帝遷都の後ち此處に乾臨閣を建てられた。方八町の園で、此處で池があり、弘法大師が此處で雨の經を修し雨乞ひをした處で、後世有名な地になつた。其後ち寺院を建て池も小さくなつた。

◎壬生寺みぎでら 京都五條坊門大宮の西。舊寺領四十六石。本尊、地藏菩薩。稱徳帝の朝、鑑真和尚の開基。別號、小三井寺、寶幢三昧院、地藏院。◎上古は律院で西大寺の派であつたが、今は眞言宗となつた。◎〔鑑真和尚像〕木堂にある。普通に之を夜叉神と誤る。◎〔大念佛〕毎年陰曆三月十五日から廿五日まで。

◎勸學院 壬生寺の近所。嵯峨帝の建立。左大臣冬嗣の祈願所。

◎清和院 一條七本松邊。もと正親町の南、京極の西に有り、寛文中此處に遷された。本尊は地藏菩薩。一演僧正の作。身長六尺二分。清和帝の御

身の長さを摸して造つた。帝の所持された佛舍利を兩眼の瞳とし、宸筆の法華經を腹中に納れた。

◎感應院 清和院内。舊寺領四十一石。清和帝の貞觀七年建立。開基壹演法師。或る時壹演が觀音の像を得、勝地を探つて安置しやうと思つて居る中、老翁の告げがあつて遂に此處に開くことになつた。

◎梅尾山うめのおの・高山寺 高尾の西南。舊寺領八十五石餘。開基法性房尊意。◎北野神社きたの参考。中興明惠上人。◎建永元年後鳥羽の院から明惠上人に賜ひ、寺を造り、高山寺と號し、華嚴興隆の地とした。元は五院あつた。●(一)金堂〔本尊釋迦。(二)三重塔(三)羅漢堂(四)經藏(五)鎮守〕四社。第一、中央、大白光神、即ち梵語で鬱多羅迦神。天竺雪山の神。禪法擁護の誓ひがある處から之を勸請する。第二、左の北、善妙神。新羅國の女神で、華嚴擁護の誓ひがある。嘉祿元年八月十六日から以上二神を祭る。第三、右の南、春日大明神、第四、同端、住吉大明神。

〔参考〕「明惠上人」名は高辨。初めの名は成佛、姓は平氏。紀伊在田郡の人。父は宿直の侍ひであつた。九歳で父母を亡ひ、高尾山の文覺に従つて俱舎頌を讀んで善く熟し、十歳悉曇章を習ひ、十三歳で苦行し、十六歳で東大寺の戒壇で受戒し、十九歳興然阿闍梨こうねんに従つて兩部の密法を稟け、北山の梅尾に止まり、次第に世に顯れた。承元二年紀伊に還り、伽藍を建て、寛喜四年正月十九日入寂した。年六十。◎明惠が始めて茶の實を當山に植ゑた。

◎善光寺 梅尾の麓。尼寺。明惠上人が遷化して三十三年の後ち建立。阿難尊者の塔がある。鎮守善妙神。

◎觀勝寺 東山。開基行基菩薩。上古、王城鎮護の爲め一切經を四方の山上に納め、之を岩倉と號した、此處も其一。

◎蟹かに滿寺 相良郡綺田村。本尊釋迦如來、長八尺八寸。相傳、昔し此邊に一人の婦人が有り、佛道を信じて仁慈の念に富んだ。ある日里人の蟹を捕へ

るのを見、其故を尋ねた所、煮て食ふためと答へた。大いに之を憐れみ、わが家にある他の美味の品と其蟹とを交換し、辛くして蟹の命を救つた。其父も亦仁慈の人で、ある時野外で一足の蛇が蛙を飲むのを見受け、又之を憐れみ、蛇に向かひ、もし其蛙を放ちたならば自身の娘を與へるといふ事を約束した。蛇は其どほり蛙を免した、その夜直ちに翁の家に一壯年に化して尋ね行き、その娘即ち蟹を救つた人を妻に受ける事を言ひ入れたので今更一家は驚き怖れ、しばらく三日の猶豫を望んだが、扱其三日間に何の手段も出来なかつた。ただし娘は驚かず、一室に籠居して一心に佛を念じ、やがて三日目の夜その蛇が重ねて來たところ、何所からとも無く數多の蟹が這ひ出して其蛇の身を寸寸に齧み切り、娘は安らかに助かつたといふ、是を縁起として聖人が其所に寺を建て、終に此蟹滿寺を成した。

◎九品くほん寺 鳥羽。鳥羽法皇が城南の離宮を營み、九箇所の寺院を造つた其一。◎戀塚 止鳥羽。所謂鳥羽の戀塚。源渡の妻袈裟御前は當世の美人で

あつたが、遠藤武者盛遠が之に悪想し、其母を劫かして吾が手に入れやうとした。母は恐れて之を娘に告げた處、娘は屹と死を決し、盛遠を欺き、夜忍んで我が室に来て髪の毛を探れ、若し髪の毛が洗ひ髪であつたらば夫と思つて殺せ、其後ちこそ君が心に従はうと云つた。盛遠は喜び、其通り夜行つて洗ひ髪を探つて直ちに殺し其首を檢した處、夫では無く、袈裟であつたので、盛遠も其貞潔を感じ、且つ悔やみ、且つ泣いて薙髪して僧となつた。之が即ち文覺上人で、此袈裟御前のために塚を造り、之を此處に祭つて戀塚と云ふことになつた。

◎威王山・剛福寺 上久世村。號は金藏院。本尊は藏王權現で、役小角の作。此佛像はもと吉野山にあつた。◎仁王門の兩金剛運慶の作。

◎迎陽山・福田寺 久世村。開基行基。

◎補陀洛山・寶積寺 山崎。舊寺領六十石。離宮八幡社領の内。本尊は不動、毘沙門。共に行基の作。燒失後、安阿彌改造。◎聖武帝神龜四年勅願。開

基行基菩薩。中興參河入道寂照。◎仁王門兩金剛運慶、湛慶の作。(二)「打出の小槌」寺の什物の一。俗に隠れ簀、隠れ笠と共に稀代の重寶とする。此小槌からは好む處の物が自由に出るといふ。今は唯名ばかりで僅に象として遺るのは追儼の鬼の面ばかり。此は文武帝の慶雲二年天下の疫病が流行した時、行基が始めて追儼の法を修して鬼を逐ふとて被つたものといふ。

◎神宮寺 離宮の北。舊寺領五十石。

◎戒光寺 山崎。舊寺領百二十石。◎此寺の慈信と云ふ僧は常に鉢を飛ばして乞食したとて世に之を空鉢上人と號した。延喜年中攝津の中山寺に往き、觀音像に向かつて、靈區を求めて安置しやうと願つた。其處で夢に像が告げていふには「山崎は民縁熟す。由つて彼處に移せ」と。それから又鉢を飛ばして營造を求めた。が、多くの人は侮つてそれを妨害して皆病氣となつたが、中で悔悟した者は病氣が残らず愈えたとところから、遂に此

處に遷すことになつた。慈信が其時持つて居た鉢は此處へ埋め、鉢尾村といふ。

◎大悲山・觀音寺 山崎。眞言宗。寛平法皇草創。延寶九年木食以空上人再興。

◎吉祥院 東山の西南。元慶四年、菅相丞の北の方吉祥女が舊地を募つて建てた寺といふ。

◎智福山・法輪寺 嵯峨大井川の西。舊寺領七十石。開基道昌。本尊虚空藏。初めは葛井寺と號した。◎此境内に井戸が有り、道昌が之を汲んで垢離を取つた時、星が天降りした處から落星井と名づけ、其井桁の上に祠を建てて鎮守とした。天慶年中空也上人再興。

(參考)道昌讚岐の人。幼年の時出家して三論を學び、空海に従つて灌頂壇に登り、天長七年召されて佛名懺悔導師となつた。貞觀十六年僧都となり、同十七年二月寂。年七十八。一生涯に法華を講じたことが五百

七十回。

◎愛宕山・清涼寺 所謂嵯峨の釋迦堂。眞言宗。舊寺領九十七石。開基恒寂法師。本尊阿彌陀。もと左大臣源融の山庄、棲霞觀と云ふ處であつたゆゑ、棲霞寺と名付け、貞觀年中改めて寺となし、空海に賜ひ、淳和帝の皇子を開祖となした。舊寺領千十六石餘。●(一)法泉院「本尊虚空像。役行者の作。(二)五大堂「本尊大威徳天の牛、弘法大師の作。(三)釋迦如來「毘須羯摩の作。(四)嵯峨帝の陵「五「檀林皇后の塔「六「恒寂法師の塔「一説、融大臣の塔「七「齋然法師の塔「八「定家卿の塔「九「大念佛「毎年陰曆三月九月から十五日に至る。弘安二年から始まる。(十)御身拭ひ「毎年三月十九日、本尊の身を拭ふ。一一水記、「永正元年三月十九日嵯峨釋迦御身拭參詣。(十二)牛華幔「高倉帝の皇女、安嘉門院の御車の牛が肥大で、毛が美しく最も愛された處から、其牛の像を華幔に寫して清涼寺本尊の帳に懸けたものといふ。(十三)優填の像「一條院の朝、東大寺の齋然法師が宋國に入つて優填第

二の摸像を禮し、佛土張榮を雇つて模刻させた。それから鄭仁徳の舟に乗つて歸朝し、其時又「一切經」五千四十八卷と十六羅漢畫像とを齎し來り、蓮臺寺に到つた。大臣公卿も皆車から下りて之を拜した。其優填の像は今も嵯峨の清涼院にある（元享釋書）。宋史、「雍熙元年日本國僧裔然與其徒五六人浮海而至。獻銅器十餘事并本國職員令王年代紀各一卷。裔然衣綠自云、姓藤原氏、父爲眞連。裔然其國五品品官也。善隸書而不通華言。問其風土、但書以對云、國中有五經書及佛經白居易集七十卷。並得自中國。土宜五穀而少麥交易用銅錢。文曰乾元大寶。畜有水牛驢羊。多犀象、產絲蠶、多織絹。薄緻可愛。樂有國中高麗二部。四時寒暑大類中國。國之東境接海嶼夷人所居身面皆有毛。東奧州產黃金、西別島出白銀以爲貢賦。國王以王爲姓傳襲至今王六十四世。文武僚吏皆世官。太宗召見裔然存撫之甚厚、賜紫衣、館于太平興國寺。上聞其國王一姓傳繼、臣下皆世官、因歎息。永延元年二月歸朝、長和五年卒。贈號弘濟大師」。

◎廣隆寺

葛野郡ラフキ太秦ラフキ。舊寺領六百石。本尊、藥師如來。推古帝の十一年

聖德太子の命を承けて秦川勝の建立。一名秦公寺、又蜂岡寺。●(一)聖德太子束帶の像「每朝の天子即位の後ち、御衣を賜はつて之に着せる例。陰曆八月廿二日大法會があり、九月十二日の祭りには僧が鼻高の面を被り、背向きで牛に乗つて經を讀む。(二)伊佐良井いさらゐ境内の井。(三)救世觀音坐像」身長二尺八寸。扶桑略紀、「推古帝十一年白百濟國獻金銅彌勒像亦置蜂岡寺。此像時時放光羅及任那貢佛像一軀金塔并舍利佛幡等即居佛像於葛野秦寺」。

(參考)「秦川勝」秦始皇の後身といふ。欽明帝の朝、大和初瀬川の洪水に

大きな壺が流れて來た。其中に小兒があり、成長して姓を秦と云ひ、それから川勝と名付けた(播磨國大酒社參考)。樂人としては聞こえた人で、聖德太子に従つて樂を作り、日本の樂の祖先と云はれる。

◎岩屋山・金峰寺 京都の西北。開基弘法大師。本尊不動明王、大師の作。

◎遍照寺 嵯峨廣澤池の西北。僧正遍昭の宅地。開基寛朝僧正。  
◎海印寺 粟生の西。號、木上山寂照院。開基道雄僧都。

(参考)「道雄」姓は佐伯氏。慈勝法師に從つて唯識を受け、因明論に通じ、又長歳和尙に華嚴宗を學び、弘法大師に密法を習ひ、夢想に因つて乙訓郡木上の境で寺を造り、華嚴教を置き、仁明帝嘉祥三年僧都に任じ、仁壽元年六月寂。

◎音羽山・清水寺 さいふつでら 京都東山。舊寺領百三十四石。本尊楊柳觀音。坂上田村麿建立。◎(一)奥の院千手觀音行願居士草庵の跡。(二)地主權現「鎮座大已貴命。本堂の後。(三)田村堂」寺の東。田村將軍並に鈴鹿御前の影像がある。(四)「經書堂」清水坂。◎光仁帝寶龜九年七月釋の延鎮が淀河を泝つて一支流の金色を呈して居るのを見、其水源を究めて瀧の下に到つた處、白衣を着けた一老翁が居た。其姓名を問へば對へて、「吾れは行睿と云ふ者で此地に二百年も隠れて居るが、千手千眼の神呪を持つて汝を待つて居た。」

と云つてやがて見えなくなつた。彼の翁は觀音の示現で、それから延鎮も其像を刻まうと思つたが資力が無くて止め、延暦十七年坂上田村丸が鹿を獵りに來て此處に休息した處で延鎮は其事を談した。田村丸も感歎し自宅を移して寺となし、像を刻ませた。延暦七年東夷が蜂起して時、紀古佐美を征夷大將軍として之を討たせたが利が無く、それから同十年大伴弟麻呂、坂上田村丸等を遣つて征伐させた。同六年田村丸征夷大將軍となり、翌年七月清水寺を建て、同二十年復た東夷高丸と云ふ者攻め上り、此時も田村丸敕を奉じて之を征し、延鎮の法力を乞ひ、奥州に戰つて遂に勝軍さとなつた。やがて敵の首を京に奉り、先づ當寺に至つて參詣し、殿に入つて像を見れば矢傷の痕があるのみならず、而も佛の足は泥塗れであつた。これでは軍中で矢を拾ひし二人の者は此二佛であつたかと田村丸驚き、此事を奏問したので帝も大いに崇敬を加へた。◎後ち又主馬八郎盛久と云ふ者が平家滅亡の後京都に竄れ、嘗て等身千手觀音の像を作つたのを清



水寺の本尊の右に安置し、千日之に參詣しやうとした處、賴朝が北條時政を遣はして之を探し求め、盛久が毎夜參詣するといふ事を聞き之を待つて遂に生捕りにして鎌倉に送り、梶原景時に其宿願の赴きを問はせた處白狀しなかつた。但し平家重代の家人故由比が濱で頸を刎ねることになつた時、西に向かつて念佛し又南に向かつて念佛すること數十遍で、いざ首を打たうとした處太刀が折れ、光明二條盛久が身を照した。之を見て打たうとした宗遠は大いに驚き其事を訴へると、丁度此時賴朝の北の方の方でも夢に盛久の赦免を乞ふた老僧があつた。北の方が「汝は誰か？」と問ふた處對へて、「吾は洛陽東山の清水邊の僧である」と云つた。覺めてから其事を賴朝に告げたので、遂に賴朝も此不思議に感じて盛久の死罪を宥し、紀伊の本領を復した(長門木平家物語)。

◎子安塔・泰産寺 清水樓門前。昔し光明皇后が伊勢太神宮の瑞示に由つて一寸七分の觀音の像を得、孝謙帝を産み、それから天平二年（天平二年）藤里に三

重の塔を建て、其像を安置して泰産寺と號し、後世之を子安の塔と名付け

る。  
◎法琳寺 小栗栖。仁明帝承和七年の草創。もと大元堂と號し、常曉に賜はつた。

(参考)〔常曉〕小栗栖の路傍の藥子で、長じて元興寺の豐安に事へ、承和元年入唐し、栖靈寺の文璫に遇つて密教を稟け、次第に奥義を究めて遂に阿闍梨の位を受け、貞觀七年十一月卅日入寂した。

◎笠置寺 木津川の巽二里許。或ひは鹿鷲とも書く。解脱上人が般若臺を設けて此處に居り、元弘の亂に後醍醐帝も一時籠もられて賊と戦ひ、城は終に陥ちた。

(参考)〔解脱上人〕名は貞慶。藤原尙書貞憲の子。建曆三年二月二日寂。年五十九。

◎安樂壽院 伏見竹田。又上菩提院ともいふ。舊寺領五百石。鳥羽法皇の

建立。

◎海住山寺 木津川東南の山。天武帝の敕願。開基えんのぎやうじや役行者。中興解脱上人。

◎六地藏 伏見。文德帝の仁壽二年小野篁が六體の地藏を安置した。即ち伏見の法雲山大善寺。其後平清盛が六箇所に分け、毎年七月廿四日を功德日となした。今は一體しか遺らぬが猶右六地藏の名がある。◎舊の一番は御菩薩池、二番は山科、三番は伏見、四番は鳥羽、五番は桂、六番は常盤に有つた。

◎吉祥山・安祥寺 山科。仁明帝の皇后の建立。開山弘法大師及び眞雅。

◎因幡堂・平等寺 松原通鳥丸。舊寺領四十石。一條院の長保五年因幡國

司大納言橘行平卿の息光朝法師の建立。本尊藥師如來。足利義教の再興。

◎高臺寺 愛宕郡八坂。舊寺領五百石。山號、鷲峰山。豊臣秀吉の政所湖

月尼公が慶長年中建立。此地は往古雲居寺の境内。尼公以下長嘯子及び木下氏の墓がある。

(参考)「長嘯子」初めの名は勝俊。其先は尾張の人。豊臣秀吉の姻家。善く和歌を作り、後ち遁世して京都の靈山に住んで自ら東山夢翁と稱し、風月を賞し、更に大原野に卜居し、平素愛する和歌を集めて「舉白集」と名付け、世に行はれさせた。

◎谷堂・最福寺 松尾社の南。天台宗。開基、延朗上人。

(参考)「延朗」源氏。但馬養父郡の人。八幡太郎義家の曾孫。承元二年正月十二日寂。

◎櫻元菴 山田村。嵯峨法輪寺の南。有名な西行櫻がある。或ひは西行菴の舊地ともいふ。

(参考)「西行法師」俗名は佐藤兵衛尉憲清。秀郷九世の孫。武名あり、世を厭つて遂に遁世の志しを生じ、出家して圓位と號し、後ち西行と改め、天下を周遊して、和歌を弄した。風塵に拘らず、鎌倉に往いて頼朝に謁見した時、頼朝が之に銀の猫を與へたが、外に出るや否や其邊に遊んで居た

子供に與へて去つた。建久九年二月十五日寂。

◎小鹽山・十輪寺 西山大原野。天台宗。在原業平が鹽を焼いた地。●(一)「花山院從一位左府定好、父母子孫の塔」。(二)「在原業平及び父母の塔」。

◎元慶寺 山科。天台宗。本尊藥師如來。陽成院元慶元年草創。僧正遍昭も一時此寺に居たことがある。

(參考)「僧正遍昭」俗名は長峰宗貞。仁明帝の寵を受け、嘉祥元年三月十一日帝の崩御を哀み、叡山に登つて薙髮し、慈覺に就いて台密を學び、元慶三年僧正となり、花山の僧正と稱し、敕を受けて元慶寺の座主となり寛平二年正月十九日遷化した。年七十四。

◎明星山・御室戸寺 宇治。天台宗。本尊千手觀音、長二尺一寸。順禮第十番。光明帝の敕願。開基智證大師。中興觀空上人。

◎平等院 宇治。天台宗。後冷泉院永承六年建立。供養御堂關白賴通公。◎源三位賴政が宇治川で平氏に敗られ此寺で自殺したとて名高い。寺内に

に「扇の芝」といふがあり、形ちは扇を開いたやうで、側にある松を「馬繫ぎの松」といふ。◎「鳳凰堂」院の構造が鳳凰の羽を擴げたのに似たとどの名。日本建築術の妙を極はめたもので、明治廿六年の米國大博覽會にも其雛形が出品になつた。

◎朝日山・惠心院 宇治。天台宗。本名は龍泉寺。弘法大師が唐の青龍寺を摸して此寺を建て、龍泉寺と號し、後ち台嶽惠心僧都が此處に來つて住居してから惠心院と改めた。

◎六角堂・頂法寺 誓願寺通鳥丸。天台宗。本尊如意輪觀音。順禮第十八番。開基聖德太子。坊舎五軒。其中の池の坊は後世活花の宗匠として仰がれる。

◎雲居寺 東山、花園院邊。仁明帝承和五年淨藏貴所建立。崇徳院天治二年西山上人再興。

(參考)「淨藏貴所」三善清行の第八子。母は弘仁帝の孫女。天人が腹に入

ると夢見て娠み、寛平三年に生まれ、四歳で千字文を読み、一を聞いて二を知り、七歳で始めて出家し、遂に非凡な僧となつた。康保元年十一月廿一日遷化。年七十四。

◎革堂かばたう・行願寺 寺町竹屋町。舊寺領二十石。本尊観音。身長八尺。行圓上人建立。初め一條寺町にあり、寶永三年類焼後此處に遷された。順禮第九番。

(参考)「行圓上人」鎮西の人。僧となつて常に千手大悲の陀羅尼を念持して他念無く、一條帝の寛弘二年京師に遊び、頭に寶冠を戴き、身に革の着物ものを被て歩いた處から世に之を異しまひ、呼んで革上人といひ、此寺をも革堂と名付けた。

◎神光院 西賀茂。醍醐金剛院兼帶。行圓上人が革堂の観音を造り、其後ち建てた寺(前條參考)。

◎松尾山・鞍馬寺 王城の北二里。舊寺領二百二十六石。本尊毘沙門天。天

台宗。延暦年中藤原伊勢人修造。開基恒眞和尚。昔此山に大蛇があり、

峰延法師が調伏して大蛇が死んだ。それから今も此處を大蟲嶽おほむしのたけといふ。

◎一説には天武帝が大友皇子と合戦の時、天皇が御馬に鞍を付けたまふで此處に繫がれた。それから鞍馬と名づけたともいふ。●(一)竹切りの

行いひ「毎年六月廿日行ふ。(二)僧正そうじやうが谷たに源義經が牛若丸と云つた頃、此山に居て異人に逢つて劍術を修めたと所といふ。

◎補陀ふた洛山らくざん・六波羅密寺 清水寺の南。舊寺領七十石。村上帝の天曆五年空也上人建立。

(参考)「空也上人」名は光勝。尾張の國分寺で薙髮して空也と稱した。天下を佚遊して多く人民の利を計り、天慶九年彌陀の名號を唱へて勸化し、天曆九年天台に上り、座主延昌に就いて得度し、自ら十一面觀音の像を刻み、六波羅密を建てて之を安置した。圓融院の朝天祿三年九月遷化。

年七十。

◎紫雲山・極樂院 四條坊門油小路西入町。開基空也上人。一老空忍、所謂鉢敲き。即ち元は一人の固有名であつたが後世普通名となる。頭髪を生やし、京都内外を往來し、瓢箪を敲き、唱名念佛して茶筌を賣つて業とした。俗に居て俗で無く、僧に居て僧で無く、然し其行ひは十戒を守つた。

◎西光寺 山科。時宗。空也上人遷化の所。天和元年愚性和尙再興。空也の塔がある。大雲寺の住職。

◎金玉山・雙林寺 東山吉水の南。舊寺領廿四石五斗。本尊藥師。左大史尾張定躬建立。中興國阿上人。●(一)平泰頼入道塔。(二)西行法師の塔。(三)「頼阿の塔」。

◎十禪寺 山科四宮。號、柳山。本尊觀音。聖德太子の作。

◎靈山・正法寺 東山清水寺の麓。舊寺領廿三石五斗。元祖傳教大師。中興國阿上人、別號德禪寺。坊舍十箇寺。みな宣阿彌、恩阿彌などといふ。

◎東山・長樂寺 吉水の内。舊寺領八石四斗。宇多帝の朝建立。中興阿證

坊印誓上人。

◎安養寺 吉水。舊寺領八石三斗。慈鎮和尚再興。天台宗。中古から時宗となつた。◎圓山の嶺に有る古塚を將軍塚といふ。

◎一條道場 寺町一條。舊寺領十八石。

◎四條道場 寺町四條上。舊寺領二十三石二斗。號、錦陵山金蓮寺。廣議門院の本願。開基淨阿上人。昔しは具平親王の宅地であつた。◎境内に頼阿法師の墓がある。

◎六條道場 寺町錦小路。舊寺領四十石六斗餘。開基一遍上人。初め六條に在り、天正年中此處に移した。

◎七條道場 七條東洞院。舊寺領百九十七石餘。開基一遍上人。

◎市屋道場 六條北富小路。舊寺領二十八石四斗。開基空也上人。初めは七條北堀川の西市町に在り、中興後天台宗となり、弘安年中一遍上人が來て禮讚念佛を修した。

◎大炊道場 京極大炊御門。舊寺領七十四石六斗。初めは一條油小路にあつた。

◎大谷道場 東山。舊寺領七石五斗。

◎法國寺 舊寺領百三十七石。

◎印稱寺 京極。舊寺領二十三石。

◎御影堂 五條橋の西。新善光寺と號する。本尊は一遍上人第二世應阿彌自作の如來。其後平敦盛の妻が尼となつて當寺に住んでから多くの尼が出来、扇子を作つて業とした。御影堂の扇子として傳はるのはこれ。寺中皆香阿彌珠阿彌などと名づける。

◎寶福寺 三條西の郊外。石地藏。舊寺領二十三石。もと鳥部野にあり、聖武帝の朝行基が始めて山城五戸陀林を置いた。此處は其一で、鶴林と名づけ、其後ち他阿上人住持となり、慶長の初め豊國社を營み、火葬の臭氣不淨を避け、建仁寺の門前に移され、又當所に移つた。◎五戸陀林とは鳥部

野、中山、最勝河原、東寺の西野狐塚及び鶴林。

◎來迎堂 富小路六條坊門。一名新善光寺。本尊如來。信濃善光寺の摸像。

初めは五條堀川の西にあつた。

◎來迎寺 北山大原。大念佛宗開基良忍上人。

(參考)〔良忍〕尾張國富田の人。叡山に登つて台教を聞き、僧となつた。崇

德帝の天承二年二月朔日寂。

◎融通寺 寂光院近處。崇徳院大治二年良忍上人開基。

◎寂光院 愛宕郡草生村。本尊地藏。身長八尺。内陣長押の間に六萬體の

地藏がある。開基良忍上人。◎〔建禮門院の塔〕後の山にある。

◎京都五山佛閣

◎瑞龍山・天平興國南禪寺 粟田口。京都五山の一。舊寺領五百石。龜山法

皇御願。大明國師普門開山。塔頭三十一院。

(參考)〔普門〕號は無開。信濃の人。初め東福寺にあつて入宋し、後宇多帝

の弘安三年歸朝し、正應年中龜山上皇の救命を受けて此寺を開基した。同四年十二月十二日寂。年八十。大明國師と謚され、又佛心禪師ともいふ。

◎靈龜山・天龍資聖禪寺 葛野郡嵯峨。五山の一。舊寺領七百二十石。元龜山院の舊跡で、敕を奉じて足利尊氏が建立した。或る時尊氏が夢に金龍を寺の南の川の中に見た處から天龍と名を付けた。開山夢窓國師。◎(一)塔頭(二十二)。(二)雲居庵(うんごあん)其庭の奇石を琢いて櫃に納めてある。大きき七八尺、廣さ五六尺で、其面には四句の文字がある、即ち「乾坤之内、中有一室、宇宙之間、秘在形山」。(三)曹源の池(境内にある。昔醍醐帝第十六の皇子兼明親王即ち二品親王中務卿前中書王と號された人が嘗て小野宮右府實頼に忌まれ、嵯峨の龜山に隠れ、詩文、音樂、能書などに名聲があつたが、此龜山は水に乏しかつた處から祭文を作つて龜山の神に祈つた。すると泉が忽ち湧き、後世曹源の池として口碑に傳へる。

(參考)〔夢窓國師〕源氏。伊勢の人。宇多帝九世の孫。嘗て死屍九變の相を描き、慨然として求道の志しを起ことし、十八歳で僧となつた處、夢に達磨の像を得た。其處で禪門に入つて一山寧に相模で會ひ、遂に名僧となつた。救命に由つて正覺と號を賜はり、天龍寺の席を主り、再び法輪寺に轉じ、後ち隱居して寂。

◎萬年山・相國承天禪寺 京都上立賣烏丸の東。五山の一。舊寺領千八百三十石。將軍足利義滿建立。後小松院の永徳三年夢窓國師が開基となる。初めは妙葩が開山であつたが辭して其師夢窓が代つた。妙葩は二世となり、國師の號を賜はり、始めて僧録司となつた。●(一)鐘樓堂(南都元興寺の鐘であつたが義滿が取つて當寺に寄附した。(二)七重大塔(高さ三十六丈。寺の北富小路の東にあり、其地を塔の壇といふ。(三)伏見殿、八條殿、及び足利家の塔。(四)塔頭(二十七院。(五)林光院(右塔頭の中。此處に名木の鶯宿梅がある。

◎東山・建仁寺 京都祇園の西南、五山の一。舊寺領八百八十三石。源賴家建立。開基榮西禪師。●(一)塔頭二十五院。(二)石塔會せきたうかい替者檢校たちが法會を爲し、毎年二月十六日光孝帝の宮、兩夜皇子の忌日として當寺清聚庵で皇子の畫像を掛け、法事をする。經が畢つて皆四條河原に出、石で塔を立て、香花を供養して之を拜する。名づけて石塔會といふ。(三)納涼會なすりのやうかいむかし六月前と同じやうな法會をした。之を納涼會といふ。

(參考)「榮西」姓は賀陽氏。備中の人。薩摩守貞政の曾孫。妊娠後八ヶ月で生まれ、八歳で俱舍頌を讀み、十一歳で安養寺の靜心を師とし、十四歳で落髮して叡山の戒壇に登り、十七歳で求聞持の法を受け、十九歳で叡山の有辯に従つて台教を學び、六條院の仁安三年商船に乗つて入宋し、歸つて一代から仰がれ、建永元年敕命に由つて東大寺の幹事となり、紫衣を賜はり、建保元年僧正に擢げられ、同三年相模の鎌倉にあつて壽福寺を造り、同七月五日入寂した。年七十五。一切經を三度通讀した人と

いふ。證は千光國師。

○惠日山・東福寺 京都の東南。五山の一。舊寺領千七百十四石。四條帝の延應元年九條道家公草創。開山聖一國師。今焼失した。(一)塔頭三十三院。(二)芳の札毎年二月方一寸許りの紙に「芳」の字を書き、當寺内同聚庵から出して人に與へる。門前八町の人家いづれも門口に之を貼る。傳説に由れば、昔し一の鬼神があり、聖一國師に逢つて禮を施していふには「此後ち火災疫病を防ぐには『一万』と云ふ字を書いてそれを一万軒の家に貼れ」と云ふことであつた。時に國師が竊に其一の字を十となし、それから此札を守りにすることになつたといふ。(三)釋迦涅槃の大像兆殿司の筆。竪三丈九尺。横二丈六尺。(四)甘露の井境内にある名水。(五)通天橋境内有名な橋。紅葉に名が有る。

(參考)「聖一國師」名は辯圓。字は圓爾。姓は平氏。駿河國久能の人。建仁二年十月十五日の朝生まれた。弘安三年十月十六日寂。正和元年聖一



師と謚を受けた。◎〔兆殿司〕淡路の人。幼時から此寺の大道和尚の弟子となつた。性質畫を好み、それが爲め放逐されやうとした時、道に棄てられるのは破れ履ばかりであるのに、自分も今繪で大道に棄てられるのかと思つて遂に破草鞋と號し、矢張り畫は止めなかつた。或る日兆がその師匠の留守を伺つて不動の像を描いて居ると、其處へ師が歸つて來たので大いに驚いて描いた不動の圖を膝の下に藏した。時に其不動の火燄が俄かに燃え起こつて掩ふことが出來なかつた。師が之を見て大に感心し、是れからは繪を差し留めず遂に自由に修めさせることになつた。其後兆殿司は東福寺の殿司となり、其後に涅槃の像が無いのを慨き、自ら大明國へ行つて其像を摸して來やうと決し、寺を出て筑紫に到る途中稻荷橋で一老僧に逢つた。其老僧がいふには「汝は何處へ行く？」兆殿司が其處で志しを語つた處、老僧が懷中から一卷の繪を取り出し、「是が即ち涅槃の像である。今汝が勞に代へて與へる」と云つて見

えなくなつた。其處で兆殿司は其一卷を懷にして本寺に歸つて一大像を描いた。是が屈指の名幅といはれる。其他四十八祖の像、達摩正面の像など何れもあり、佛畫に於いては古今獨歩の天才を見はし、日本で屈指の畫工となつた。又此寺の佛殿の天井には龍及び頻伽鳥を畫き、いづれも活きたやうで、其龍の長さは十餘丈。其畫法で、道釋の像は宋の李龍眠を學び、其雲行水流は天性自得して神に入つた。山水花鳥は特色では無いが佛畫では日本第一と云はれる。

◎京城山・萬壽寺 東福寺院内。舊山領八十五石。龜山院の文永九年草創。開基寶覺禪師。初め五條高倉にあり、今も其舊跡を萬壽寺通といふ。  
 (參考)〔寶覺禪師〕諱は湛照。備中の人。上古聖一國師に事へ、東福の第二世を命ぜられた。

◎正法山・妙心寺 洛西仁和寺の近處。花園院建立。開基關山國師。舊寺領四百八十石。もと左大臣清原夏野の宅地で、其園中の諸花實に美しく、それ

故帝が之を離宮となし、洛北の地を代はりとして夏野に與へた。其處を今も花園といふ。●(一)塔頭[七十三院。(二)花園帝陵]王鳳帝境内。(三)武田信玄の塔、同息勝頼の塔、同孫信勝の塔]王鳳院境内。(四)織田信忠の塔]大雲院にある。(五)祥雲院玉岩麟公の塔]豊臣公の童子。微笑庵境内。(六)細川勝元の塔、同政元の塔]大心院にある。(七)鹿納殿の塔]徳川家康第一の女。盛徳院にある。(八)池田勝入の塔]備前の國主。護國院にある。(九)前田徳善院の塔]玄以法印と號す。蟠桃院にある。(十)山内一豊の塔]土佐の國主。大通院にある。(十一)真田信仍の塔]左衛門佐。養徳院にある。(十二)福嶋正則の塔]左衛門太夫。海福院にある。(十三)石川、生駒等一族の塔] (参考)關山國師]諱は慧玄。號は關山。姓は源氏。信濃の人。鎌倉の廣嚴和尚に従ひ、やがて世に見れた。延文五年十二月十二日遷化。年八十四。もと圓成國師と謚され、萬治元年四百年忌に佛心覺照禪師と贈られた。

○龍寶山・大徳寺 愛宕郡紫野。舊寺領二千二百石餘。花園の帝建立。後醍醐

醐帝の崇敬厚く、元弘三年五山の一と云はれた。○此寺は一休和尚等に由緒があるとして名高い。●(一)塔頭[四十二院。(二)近衛信尋公の塔]方丈内。(三)一休宗純和尚の塔]眞珠菴内。(四)江月宗玩和尚の塔]龍光院内。(五)黒田如水の塔]龍光院内。(六)織田信長公一族の塔]總見院内。(七)豊臣一族の塔]天瑞寺内。(八)藤堂高虎の塔]大光院内。(九)細川幽齋の塔]高桐院内。(十)蒲生氏郷一族の塔]會津城主。瑞峰院内。(十一)大友宗麟の塔]豊後國主。同所。(十二)毛利輝元の塔]長門、周防の主。黃梅院内。(十三)小早川隆景の塔]同所。(十四)有馬道長の塔]玉林院内。(十五)片桐出雲寺の塔]同所。(十六)小出播磨守の塔]同所。(十七)立花飛騨守一族の塔]大智院内。(十八)蜂須賀蜂庵の塔]大源院内。(十九)前田利長の塔]芳春院内。(二十)京極淵龍院の塔]同所。(廿一)青木氏の塔]同所。(廿二)建部自得院の塔]同所。(廿三)水野氏の塔]瑞源院内。(廿四)醫師半井氏の塔]眞珠庵内。(廿五)小堀遠江守の塔]有名な茶人、號宗甫。孤蓬庵内。(廿六)觀世一族の塔]即ち鼓及び

猿樂の名人。瑞光院内。(廿七)吉田織部正の塔。金甫宗屋といふ有名な茶人。三玄院内。(廿八)山崎宗鑑の塔。連歌師。眞珠庵内。(廿九)久庵宗長の塔。同所。(三十)茶人珠光の塔。義滿の時の人。同所。(卅一)里村紹巴の塔。連歌師。正授院内。(卅二)千利休宗易の塔。屈指の茶人。聚光院内。(卅三)平判官康頼の塔。成親と共に清盛を殺さうとして敗れた人。三門の前にある。其他名將貴族の古墳は數へ切れぬほどである。

◎吉祥山・正傳寺 京都の北。舊寺領百八石。開基普門禪師。塔頭七院。

◎大雲山・龍雲寺 京都の北山。舊寺領三百九十石。細川勝元建立。開基義天和尙。細川家代代の塔がある。

(参考)〔義天〕名は玄昭。字は義天。土佐の人。蘇我入鹿の後裔。十五歳の時土佐の天忠寺の義山和尙に師事し、十八歳で大僧となり、洛東建仁寺に入り、後ち東遊して瑞泉寺の日峯舜和尙に就いて付法を受け、日峯遷化の後ち養源寺に在つた時、細川勝元が洛北に伽藍を建て、之を延いて

住持とした、即ち是が龍安寺。又丹波に寺を建て、此時も同じく義天が開山となり、其村を八木と名付け、米山龍興寺と號した。寛正三年三月十八日遷化。年七十。◎〔細川勝元〕頼之五代の後胤。義政の時、畠山持國と共に天下の執事となり、智勇があり、應仁の亂をなした。文明五年五月十一日病死。

◎等持院 京都の北、衣笠山の南麓。舊寺領四百二十石。源義詮建立。開山

夢窓國師。●(一)塔頭三院。(二)淨名寺貞氏〔尊氏の父〕。(三)等持院尊氏

法名妙義。(四)寶篋院義詮、法名道權。(五)果證院雪庭尼〔尊氏の母〕。(六)

〔天休寺古山源公〕即ち足利直義。(七)登貞院定海尼〔尊氏の室。赤橋武州の女。(八)藤業寺の尼〕足別義滿の室。日野時光の女。

(参考)〔足利義詮〕小名は千壽王。尊氏の三男。母は平久時の女。從二位登子。鎌倉で出生。尊氏上洛の時之を鎌倉に留め置いた。延文元年四月廿九日尊氏の薨後其跡を續ぎ、貞治六年十二月七日薨じ、死後寶篋院と

號した。年三十八。

●鹿苑寺ろくえんじ 京都北山。舊寺領三百石餘。即ち有名な金閣寺。應永四年鹿苑院足利義滿の建立。足利義滿が三層の樓を造り、屋上には金の雞を置き、美麗を極めた。其下層を法水院といひ、釋迦、觀音、勢至を祭り、第二階を潮音洞といひ、自然木の觀音を置き、第三階を究竟頂といひ、天井は三間の一枚板で造り、床柱には二握りもある南天を用ひ、額は後小松帝の宸翰で庭も甚だ美しく、其内の池を鏡湖池といひ、水を岩下水といひ、瀧を龍門の瀑といひ、泉を銀河泉、澤を安民澤といふ。すべて庭は數寄を極はめ盡くした。應永十五年三月帝が行幸あり、三日の御遊があつた。

(參考)足利義滿尊氏の孫。義詮の長子。母は善法寺道清の女。京都で出生。足利三代將軍となつて遂に足利の天下を固め、室町家累世第一の名將といはれ、官は相國に至り、位は一品に昇つた。十七歳の時、花の亭に移つて花の御所と稱し、室町殿と號し、應永十五年五月六日北の亭で

薨じた。年五十一。死後鹿苑院と號し、大上天皇の號を賜はつた。

●慈照寺 洛東淨土寺村。相國寺の末派。舊寺領三十四石。慈相院義政建立。一名東求堂。其形ちが金閣寺に能く似て居る處から之に對して普通に銀閣寺、或ひは東山殿ともいふ。

(參考)足利義政義滿の孫。義教の二男。酒宴に耽つて銀閣などに居て茶の湯などを行ひ、遂に天下の亂を醸した。延徳二年正月七日薨。死後慈照院と號した。其時代の詩繪其他美術品は凡て東山時代と云はれて後世に鳴り渡る。

●正覺山しやうがくざん妙光寺 鳴瀧。建仁寺末派。後深草帝の朝花山内大臣師繼の長子忠年が早世した時、舍弟心性法師、同大納言師信卿が父の命に従つて寺を建てて之を妙光禪寺と號し、法燈國師を迎へて開山とした。之を此寺の緣起とする。菴を歲寒庵と名付ける。鎮守、稻荷大明神。◎法燈國師が此寺に居た時、平岡八幡が來降あり、其時は歲寒庵の前にある松が地に伏し

神が去れば舊の通りになつた。それから其松を鐘松と名付けた。◎方丈の西に影向の室があり、對神軒といつた。

◎酬恩庵 綴喜郡新里。舊寺領九十五石。山號靈端山。山號妙勝山。南浦大應國師隱居の舊跡。一休和尚が之を慕つて庵を建て、小松中納言が再興した。◎塔頭五院。

(参考)大恩國師諱は紹明。字は南浦。諡は圓通大應國師。十五歳で剃髮し、建長寺の蘭溪隆和尚に従つて學を究め、後深草院の正元元年大宋に入り、留學三年の後ち歸朝し、建長寺に入り、文永八年大宰府の崇福寺に移り、居ること三十三年。後ち詔りを奉じて萬壽寺を主り、又嘉元寺を造つて開山となり、延慶元年十二月廿九日入寂した。年七十四。◎一休禪師名は宗純。號は一休。後小松帝の庶子。應永元年正月元日出生。六歳の頃から塵中に居ることを好まず、安國寺の長老に就いて聖鳥となつた。天性磊落で繩墨に拘はらず、遂に名僧の名を轟かし、一代から仰が

れた。人となり頓才に富み、滑稽洒落、檢束させる處もなかつた。文明十

三年十一月廿一日寂。年八十八。

◎黄檗山萬福寺 宇治郡大和田。舊寺領四百石。隱元禪師建立。純粹の支那風を守る寺で、今でも支那料理を作る。

(参考)隱元禪師姓は林氏。名は徳龍。明の福州福清の人。聘に應じて日本に來り、肥前長崎に抵り、承應三年興福寺に入り、次ぎに崇福寺に移り、明暦元年攝津富田の普門寺の龍溪が迎へて寺のことを主らしめ、万治元年關東の大將軍が延見し、開山となし、黄蘗と名付けた。それから多くの歸依を得、寛文十三年四月三日入寂。年八十二。

◎寶藏院 万福寺の塔頭。攝津難波の鐵眼和尚が一切經を刻り、此處に藏めた。之を諸國から争ひ競つて板にした。

◎佛國寺 伏見。開基黄蘗高泉和尚。即ち大圓廣慧國師と諡された人。

◎興聖寺 宇治川邊。曹洞宗。開基道元和尚。永井信濃守の再興。興正菩

薩が此處に來た時漁人が多く魚を捕つて居た。其處で其殺生を止めさせ、殺生滅罪の爲めに塔を立てた。

◎瑞鳳山・龍翔寺 太妻の西安井村。南浦紹明が住居の跡。後宇多帝が紹明の徳を獻感し給ひ、遷化の後ち之を建てた。今其跡は絶えて無い。

◎法雲院 廣隆寺の西北。開基如雪和尚。◎烏丸光廣卿父子、及び勘解由小路資忠卿の塔がある。

◎海生寺 太妻ウツキの南市川村。禪宗。開基未詳。車僧深山和尚住。

(参考)「車僧」履歷不詳。常に破れ車に乗つて四方を歩き、能く七百年來の往事を語つて之を詳かにした。それ故年は七百歳といふ。山科の草庵に住んで居たが、後ち當寺に還つて遷化した。

◎西方寺 嵯峨松尾の南。什物には聖徳太子の作の彌陀の三尊がある。行基が來て之を拜し、別に三尊を刻んで古佛を其胎中に入れ、寺を建てて西方寺と名づけた。

◎妙安寺 大佛殿の南。開山朗庵(一休和尚と同時代の人)。關西三十三箇國虛無僧の本寺。

◎八坂法觀寺 高臺寺の南。建仁寺の末流。●(一)五重塔「白鳳七年天武帝建立。延曆年中小野篁再建。(二)柿本人丸の塔」もと本國寺内にあり、本國寺建立の時、此處に移された。

◎圓光寺 一乘寺村。初めは相國寺境内にあつた。上古は下野の足利學校が此處にあつた。

◎神應寺 八幡山の北。禪宗。舊寺領二百石。應神帝の舊地といふ。行教和尚建立。◎豊臣秀吉朝鮮征伐の時首途の爲め八幡宮に詣り、當時に入衛あつて寺領を賜はつた。

◎谷の地藏院 葛野郡。禪宗。細川頼之再興。天台宗。後ち夢窓國師の法嗣周皎和尚中興。◎「細川頼之の塔」

◎淨住寺 葛野郡葉室。禪宗。葉室定然建立。興正菩薩の開山。律宗。文祿

二年鐵牛和尚再興。○〔舍利殿〕本堂の西。釋迦が入滅して茶毘の時、速疾鬼が佛牙一枚を取つて去つた。之を韋駄天が奪ひ却し、後ちに其者が支那に渡り、嵯峨帝の時此寺に安置したものと云ふ。

◎大梅山・長福寺 同郡東梅津。禪宗。舊寺領三百六十石。開山月林大幢國師。

〔參考〕〔月林〕名は道皎。號は獨歩叟。久我中納言具房の男。十六歳で薙髮して相模の佛國禪師を師とし、元弘年中宋で十年間留學し、歸朝して常寺に遷り、花園太上皇の寵を受け、觀應二年二月廿五日寂。諡は普光大幢國師。

◎花山寺 花山。禪宗。寛和二年花山法皇が當寺で落飾された。中興愚堂和尚。

◎圓通寺 愛宕郡幡枝。禪宗、本尊座像觀音。定朝の作。開基園大納言の女圓光尼公。延寶年中勅願寺となる。

◎大谷寺・智恩教院 東山吉水。舊寺領千七百石。順徳院建曆元年建立。開基源空上人。山號華頂山。淨土宗の本寺。◎智恩教堂の額は後柏原帝の宸翰。◎殊に後堂は歩む儘に聲が出、丁度鶯の鳴き音に似て居る處から鶯張りの牀と名付け、其裏に頼山陽が落書きしたのが今も遺る。淨土宗の本山として有名な所。◎〔鐘〕徑九尺厚さ九寸五分の大鐘。

〔參考〕〔源空〕一名法然。即ち東漸圓光大師。姓は漆氏。美作久米郡稻岡の人。十五歳の時皇圓阿闍梨に就いて髮を剃り受戒した。十六歳から三年間台教を通受し、十八歳の時西塔黒谷慈眼房叡空に従つて名を法然房と改め、密教及び大乘律を受け、學として伺はぬ處無く、全體の功を積んで高倉帝の愛顧を得、遂に一代の名流となつた。建曆二年正月廿五日光明遍照の偈を誦へて入寂した。年八十。元祿十年敕命に由つて圓光大師の號を贈られ、寶永八年東漸の二字を加へられた。一代の中で高倉、後白河、鳥羽の三帝の戒師となり、權威は實に世を傾けた。

◎紫雲山・金戒光明寺 東山新黒谷。舊寺領百三十石。開基源空上人。淨土宗四箇の一本寺。坊舎三十一院。●(一)〔平敦盛の塔〕(二)〔熊谷蓮生坊の塔〕◎長徳山・智恩寺 神樂岡吉田の北。舊寺領三十石。開基源智上人。淨土宗四箇の一本寺。中興淨忠上人。坊舎十九院。鎮守賀茂大明神。◎什物の中には有名な松蔭の硯石がある。之は宋の天子から贈られたもので、平重衡が譲り受け、それから源空に贈り、源空が又源智に賜ひ、遂に此寺の寶物となつた。

(参考)〔源智〕名は勢觀坊。備中守平師盛の子。父師盛が一の谷合戦の時攝州湊川邊に留まり、遠江守義定に殺され、母に抱かれて源空の許に投ぜられ、遂に僧となつた。曆仁元年十二月十二日入寂。年五十六。◎報國山・光明寺 西山栗生野。宇都宮蓮生法師の開基。淨土西山流義の一本寺。當寺の開基に就いては種種の説がある。名の似た處から或ひは熊谷蓮生坊の草創かともいふ。

(参考)〔蓮生法師〕俗名宇都宮彌三郎頼綱。永久二年八月二日頼綱が謀叛した時、頼朝が小山朝政をして追討させやうとした。頼綱が其不實を告げて下野に至つて鬚を切り、蓮生坊と改めて鎌倉に至つて陳謝し、朝光に預けられ、後ち赦免された。正元元年十一月十二日寂。

◎永觀堂・禪林寺 東山。舊寺領四十三石。聖衆來迎山と號する。開山眞濟、弘法大師の法孫、法相宗。中興は永觀律師。淨土宗の中興は靜遍僧都。(参考)〔永觀〕圓融院の朝の文章生源國基の子。毎日數萬遍の念佛を怠らず、天永二年遷化。◎〔靜遍〕池大納言頼盛の男。初め仁和寺の僧となり、後ち永觀堂の住持となつた。

◎清淨華院 京都寺町通今出川下る。初めは土御門烏丸の西にあつた。清和帝の敕願。慈覺大師建立。中興開山源空上人、又中興向阿上人。淨土宗四箇の一本寺。◎什物には親鸞上人筆の六角堂夢想の四句の文がある。(参考)〔向阿〕名は證賢。姓は源氏。武田安藝守時綱の子。官は光祿卿に



至り、後ち園城寺に入つて剃髮し、禮阿上人に就いて淨土宗を學び、當寺に住し、「歸命本願抄」及び「西要抄往生至要訣」等を著はして世に行はれた。又和歌にも長じ、新千載集にも載つて居る。貞和元年六月二日寂。年八十三。

○誓願寺 寺町三條下町。號は大本山。舊寺領十六石九斗餘。本尊正印阿彌陀。賢聞子、芥子國父子の作。俗に之を春日の作といふ。天智帝の御草創。初めは南都にあつた。開基三論宗の惠隱僧都。豐臣秀吉の愛妾松丸局（戒名壽芳院月晃盛久禪尼）再興。京都の末寺六箇所。○桓武帝が遷都の時當寺を深草に移され、後ち三論宗と改めて淨土宗の爲された。西山派の中深草流義の一本寺。

○誠心院 誓願寺の南隣。律宗。舊寺領十石。昔しは淨土宗。●(一)御堂關白道長の像(二)和泉式部の塔

(參考)和泉式部「越前守吉雅致女。上東門院の女房。和泉守楠道具の妻

となり、それから和泉式部と號し、和歌の名譽があつた。

○圓福寺 寺町四條坊門。舊寺領十八石。花園院の御願。淨土宗深草流義の一本寺。本尊源空上人作の阿彌陀。

○蛸藥師 寺號永福寺。もと天台宗。今は圓福寺に攝して淨土宗となる。初めは二條の南室町にあつて水上の藥師と號し、後ち圓福寺内に移されて蛸藥師といはれる。

○一心院 智恩院近處の山の上。淨土念佛三昧の一本寺。開基稱念上人。天文年中建立。

(參考)「稱念」諱は吟翁。初めの名は縁譽。武藏品川の人。藤田左衛門尉道昭の男。三緣山親譽上人を師として薙髮し、師の遷化の後ち下總飯沼弘經昭に到り、鎮譽和尚に従つて乘土一乘大戒を受けた。天文二十三年七月十九日遷化。年四十一。

○眞宗院 深草。淨土西山派深草流義の本。開山圓空上人。應仁の亂の時

諸堂悉く焼失。

〔参考〕〔圓空〕名は立信。十五歳で出家し、西山の善惠上人を師として淨土門を學び、洛南の深草に於いて其法を強め、後ち誓願寺に遷り、晚年本院へ歸り、弘安七年四月十八日端座唱名して入寂。年七十二。

○二尊院 嵯峨小倉山。舊寺領百十九石。阿耨菩提寺と號する。本尊彌陀釋迦。二尊院の名は是から付く。舊は嵯峨、淳和二帝の離宮。後ち延喜帝の皇子常廉法親王が寺の爲めに僧正遍昭に屬して天台宗とした。其後源宮上人が菴を結んで屢此處に通ひ、當寺の住僧正信上人が源空に歸依した。●(一)〔源空上人の塔〕碑の銘は宗の景濂の作。(二)〔御影堂〕源空の畫像より之を足引の御影といふ。(三)〔鷹司殿の塔〕(四)〔西三條家の塔〕(五)〔二條殿歴代の塔〕

○石像寺 千本通五辻の北。阿彌陀の石佛が堂前にある故の名。藤原家隆の塔が堂の東竹林の中にある故、山の名を家隆山といふ。家隆は定家卿と

双んで和歌を善くし、「新古今集」を撰した五人の一といはれる。

○德迎山・正法寺 八幡山志水。舊寺領五百石。後奈良院の天文十一年敕願。開基傳譽上人(源空十一世)。尾張亞相忠直卿の母相應院殿再興。●

(一)〔惡七兵衛景清の塔〕八幡山七曲の坂の中にある。(二)〔如法塚〕同所。經を藏めた故經塚といふ。(三)〔男塚〕〔女塚〕万稱寺の門前の東西に在る。

○龍池山・大雲院 寺町通四條下る。智恩院の末寺。舊は二條烏丸に在り、其處に池水のあつた處から龍池山と稱する。中興貞安上人。○〔信長父子の塔〕

○本覺寺 五條下寺町。本寺安阿彌作の如法佛。開基玉翁上人。

○新善光寺 同所。舊寺領十七石九斗余。一條院の敕願。

○長講堂 同所。舊寺領二十石。後白河法皇の建立。

○長壽寺 同所。舊寺領十八石。建立の日に平忠盛が奉行をした。

○淨善寺 寺町の北鞍馬口。今出川入道相國兼李(菊亭殿)代代の菩提寺。

◎佛陀寺 京極今出川の比。初めは春日通萬里小路に在つた。文明十年邦諫上人開基。

◎十念寺 佛陀寺の北。開基眞阿彌陀佛坊。

◎阿彌陀寺 鞍馬口。百萬遍の末寺。十念寺の北にある。開基生譽清玉上人。◎織田信長が本能寺で明智日向守光秀に圍まれ、弑された時、大雲院貞安和尚が其骸骨を拾ひ取り、之を當寺に葬つた。

◎勝林寺 北山大原。舊寺領五十石。

◎花開院 寺町筋違橋。舊寺領十一石。本尊阿彌陀慈覺の作。後深草院の敕願。

◎報恩寺 寺内通小川。舊寺領七石一斗五升。

◎九品寺 鳥羽。鳥羽法皇が九箇寺を建てた、其一。

◎無量山・西方寺 五箇庄。所謂彌陀二郎の舊跡。

◎西本願寺 西六條。舊寺領四十石。開山親鸞上人。京都道場三十一箇

寺。第十一代顯如上人建立。初めは攝津天滿にあり、天正十九年秀吉の命に因つて之を立て、八月五日此處に移した。

(參考)「親鸞」名は範宴。大藏冠鎌足公十八世の孫皇太后宮の大進有範の子。母は對馬守義親の女。幼名は松若丸。六歳で孤となり、慈鎮和尚の室に入り、薙髮して少納言の君と號し、叡山東塔の無動寺に住し、台教を究め、建仁元年二十九歳の時源空上人が弘めた専修念佛の法を喜び、吉水の室に往つて之に師として事へ、名を綽空と改め、建仁三年六角堂の觀音が夢に四句の文を授けた。其文は「行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂」で、之を不思議として人にはいはず、大いに感得する處があつた。それから遂に宗門を弘め、遂に天下其徒に靡くもの多く、其餘關東二十四輩と段段枝葉は盛んになつた。弘長二年十一月二十八日遷化。年九十。初め親鸞が一切經を宋から取つて歸つて來る時、舟が相模國に漂流した、即ち今の國府津驛の邊。親鸞上人を

一向宗の開祖の第一とし、之に繼ぐ者即ち次ぎの通り。第二、如信上人（正安三年正月四日遷化、年六十二）。第三、覺如上人（觀應二年正月十九日遷化、年八十二）。第四、善如上人（康應元年二月廿九日遷化、年五十七）。第五、綽如上人（明德四年四月廿四日遷化、年四十四）。第六、巧如上人（永享十二年十月十四日遷化、年六十五）。第七、存如上人（長祿元年八月十八日遷化、年三十二）。第八、蓮如上人（明應八年三月廿五日遷化、年八十五）。一向宗の中では最も有名な人で難行苦行して宗門を弘めた力は非常であつた。其子には男女各二十六人あり、嫡は順如、三は蓮瑞、瑞泉寺、五は蓮綱、松岡寺、七は蓮誓、光教寺、八は光兼、十二は蓮淳、河内顯證寺の祖、十五は蓮悟、十九は蓮藝、攝津教行寺、廿一は實賢、近江稱徳寺の祖、廿二は兼俊、廿三は實順西證寺、廿四は實行本善寺、廿六は實從河内順興寺、其餘は女子。第九、實如上人（大永五年二月二日遷化、年六十八。即ち蓮如第八の子）。第十、證如上人（天文廿三年八月十三日遷化、年三十九）。第十一、顯

如上人（文祿元年十一月廿四日遷化、年五十。信長と争つて有名な人）。第十二、准如上人（寛永七年十一月廿九日遷化、年五十四）。第十三、良如上人（寛文二年九月七日遷化、年五十一）。第十四、寂如上人。

◎興正寺 西六條御堂南。中興顯尊。西本願寺に屬して亦た一本寺とし。永祿十二年八月廿八日敕命に由つて門跡となり、天正十七年權僧正に任ぜられた。

◎東本願寺 京都東六條。開山親鸞上人。中興教如上人。慶長七年建立。宣如上人の再興。堂の桁行き三十七間二尺五寸。梁行き二十七間二尺七寸。柱九十六本。太さ二尺七寸。瓦數二十萬枚。棟上げ明曆二年六月十四日。移轉同四年三月十五日。第十二、教如上人（慶長十九年十月五日遷化、年五十七）。第十三、宣如上人（萬治元年七月廿五日遷化、年五十五）。第十四、琢如上人（寛文十一年四月十四日遷化、年四十七）。第十五、常如上人（元祿七年五月廿二日遷化、年五十四）。第十六、一如上人（元祿十三年四月十二日遷化、

年五十二。第十七、眞如上人。◎〔本願寺派敕許の十箇寺〕其十箇寺といふは左の通り。一本宗寺(三河土呂鷲塚)顯照寺(河内)乾證寺(伊勢長嶋)本法寺(遠江堅田)慈敬寺(同所)稱徳寺(同所)勝興寺(越中)順興寺(河内牧方)教行寺(攝津名鹽)常樂寺(大和吉野)。◎〔開山直弟六老僧〕明光房(相模西方寺)陸源房(相模善福寺)玄海房(三河如意寺)源誓房(甲斐萬福寺)專海房(三河願照寺)了海房(武藏善海寺)。◎〔直弟廿四輩〕武藏淺草報恩寺の性信房、下野高田專修寺の眞佛房、常陸光明寺の順信房、常陸如來寺の乘然房、下總弘徳寺の信樂房、下總妙安寺の成然房、下總西念寺の西念房、奥州蓮生寺の證性房、下總東弘寺の善性房、奥州本誓寺の是信房、奥州乘信寺の無爲信房、常陸善重寺の善念房、下野慈願寺の信願房、常陸阿彌陀寺の定信房、常陸枕石寺の道圓房、常陸壽命寺の入信房、常陸照願寺の念信房、常陸常福寺の入信房、常陸上宮寺の明法房、常陸常弘寺の慈善房、常陸淨光寺の唯佛房、常陸唯心寺の唯信房、常陸覺念寺の唯信房、常陸西光寺の唯圓房。◎〔山科坊舎〕山

科小野庄内野村。文明十二年蓮如上人建立。近江近松寺に在つた親鸞の眞影を此處に安んじ、天文元年八月廿四日回祿に逢つた。

◎佛光寺 五條坊門通高倉。舊寺領七石二斗餘。本尊は慈覺の作の阿彌陀。本名興正寺、號は花園院<sup>けわんゐん</sup>。開山親鸞上人。中興七世了源上人。建曆元年親鸞が配所から敕許され、翌年九月五條西の洞院の宅を山科の郷に移し、寺を建てて花園院興正寺と號し、眞佛房を住持とした。嘉曆三年尊氏の祈願で寺を澁谷に移し、近代になつて花園院と改める。後醍醐帝の時人が本尊を盗み去つた處、甚だ重くなつて行くことが出来ず、遂に之を野に棄てた。すると本尊が光りを放ち、それが禁闕に映じたため、帝も異しんで人をつて其所在を尋ねさせて此佛像を得たといふ。それ故本寺へ其像を賜ひ、佛光寺と改めた。◎天正十四年秀吉が大佛殿造營のため、木石運送などの都合で今の地に移された。◎〔傳統〕第一、親鸞上人。第二、眞佛上人。第三、源海上人。第四、了海上人。第五、普海上人。第六、光明上人。第七、了源上

人。第八了明尼公。第九源鸞上人。第十唯了上人。第十一性曇上人。第十二性善上人。第十三光教上人。第十四經譽上人。第十五經光上人。第十六經範上人。第十七存海上人。第十八經海上人。第十九隨庸上人。

◎本誓寺 河原町二條上る町。伊勢高田專修寺の末寺。

◎大光山・本國寺 堀川通松原。舊寺領百五十五石。元祖日蓮上人。開基日靜上人。●(一)本堂東西十七間。南北十五間。(二)祖師堂方十一間。(三)寶塔高さ十九間半。方五間半。(四)位牌堂東西十間、南北八間。(五)檀林東西二十四間餘、南北四十七間半。(六)坊舎四院觀持院、持珠院、松林院、戒善院。(七)高祖流罪赦免狀管寺の靈寶の一。(八)日朗土の牢舎赦免狀(九)釋迦の立像第一の什物、(十)安國論其他書翰(十一)曼陀羅數翰。(十二)僧正遍昭の塔もと山科の元慶寺にあり、加藤清正が觀持院に茶會を設けた時、此塔を石燈籠となし、燈を點して鑿應の一とした。(十三)今出川家の塔、菊亭殿と稱する家。(十四)松永彈正の塔(十五)加藤清正の塔(十六)六

條家の塔(十七)本阿彌妙本の塔即ち刀劔の目利き鑑定家。(十八)金吾中納言秀秋の塔

(參考)日蓮上人後深草帝の建長五年相摸鎌倉松葉谷に草庵を結び、後ち本國寺と號した。文明十一年五十三歳の時甲斐身延山に隱居し、後宇多帝の弘安五年十月十三日年六十一歳で武藏の池上宗仲の家で入寂。其本國寺を日朗に譲り、日朗が入寂して日印に譲り、日印が日靜に譲つた。この時後醍醐帝の敕願宣旨に因つて鎌倉を引いて京都に遷した。日靜は第四世で、洛の本國寺の開基となつた。

◎具足山・妙顯寺 寺の内通小川。舊寺領一石。開基日像上人。初めは妙本寺と號して二條西の洞院にあり、天正年中此處に遷された。加賀中納言利光再興。

(參考)日像下總葛飭郡平賀の人。建治元年二月日朗に就き、やがて又日蓮に就いて學び、永仁元年廿五歳の時京都に入つて宗風を揮はうと

思ひ、先づ鎌倉比企谷に入つて法華經一部を書いた。又由比が濱に出て  
 壽量品を念ずること毎夜百邊、其間靈瑞は甚だ多かつた。同二年三月海  
 水に向かつて題目一遍を書いた處が其字が波に浮かんで龍の勢ひがあ  
 つたといふ。それから人が浪動りの題目と稱へた。同年京都に到り、街  
 道に立つて説教などした處から諸宗徒は訝かつて之を朝廷に訴へた。  
 徳治二年五月亞相宣房に詔りして之を逐はせた。其處で日像は洛外に  
 出て宣旨を答へて日ならず赦され、延慶三年向日の神前を過ぎた時鶴及  
 び老翁の異瑞があり、又越中で宗門を弘め、處處に寺を建て、曆應四年遺  
 誠六條を製して大覺僧正に授け、康永元年十一月十三日龍華院で入寂。  
 年七十四。今高祖日蓮からの傳統を此處に云へば左の通り、一高祖日蓮  
 に次いで日照、日朗、日興、日向、日頂、日持(以上六老僧)。又日朗から出て  
 日像、日印、日輪、日傳、日善、日澄、日行、日範、朗慶(以上九老僧)。又日蓮から  
 分かれて日家、日源、日辨、日法、日傳、日位、日常、天目、日得、日合、日賢、日高、

日實、日禮、日祐、日忍、日門(以上十八人の中老僧)。

◎具足山・立本寺 北野天神の南。光嚴院の朝日像上人開基。もと四條の  
 櫛笥通にあつたが回祿の後ち寺町の今出川に移された。本尊及び二王な  
 どの名作があつたが焼失した。傳統は日像、大覺、朗源、日齊。

◎具足山・妙覺寺 上京柳原。初め室町の西二條の南。後圓融院の朝開基。  
 法華宗。以上三寺を三具足といふ。◎此寺には狩野法眼の塔がある。

◎妙塔山・妙滿寺 寺町二條下る町。法華宗。開基日什上人。明德三年二月  
 廿八日寂。年七十九。當寺と陸奥の妙法寺と遠江の玄妙寺とを三所一寺と  
 する。

◎法鏡山・妙傳寺 三條新地。初めは寺町二條上る町にあり、寶永類焼後此  
 處に遷された。開基日意上人。永平十六年二月三日寂。身延山の十二祖  
 ◎叡昌山・本法寺 堀川通寺の内。舊寺領十一石。法華宗。御土御門院朝開  
 基日親上人。

(參考)「日親」中山の日常第七の祖。嘗て「立正治國論」を著はして將軍義教に獻じた處、其趣旨が大いに上意に違つて禁獄呵責され、大鑪を焼いて頭の上から被せられ、皮肉を焦爛したが忍んで居た。これから鑪破なべかち上人といはれた。長享二年九月十七日寂。

◎本能寺 寺町姉小路上町。舊寺領四十石。後花園院の寛正年中日隆上人開基。寺家二十八軒。此寺と攝津尼崎の本願寺とは一葉で、日隆は寛正五年二月二十五日寂。◎織田信長が此處で明智光秀に弑されたとして名がある。

◎卯木山・妙蓮寺 寺の内通り大宮。舊寺領十石。開基日存上人、即ち日齊の弟子。應永二十八年二月廿六日寂。法華宗。

◎志光山・本隆寺 上立賣大宮紋屋の辻。法華宗。後柏原帝の永正年中建立。開基日眞上人。享祿元年二月十九日寂。

◎光了山・本禪寺 寺町淨華院の北隣。法華宗。後小松院の朝建立。開基日

陳上人。應永廿六年五月廿一日寂。◎大久保氏の塔がある。

◎廣布山・本満寺 京極今出川上る二丁目。法華宗。御花園院の朝建立。開基日秀上人。寶徳二年五月八日寂。

◎聞法山・頂妙寺 二條河原の向。舊寺領二十一石。法華宗。御柏原院の朝建立。開基日祝上人。永正十年四月十二日寂。中山の日常から第八の祖。

◎要法寺 三條新地。初めは寺町二條上る町にあつたが寶永三年類焼後此處に遷された。光明院の朝建立。開基日尊上人。康永四年五月八日寂。

◎本涌山・妙泉寺 三條新地。初めは寺町竹屋町にあつたが寶永の類焼後此處に遷された。開基日舜上人。享徳三年五月晦日寂。法華宗。

◎空中山・寂光寺 同境内。開基日淵上人。法華宗。◎碁で有名な寺で、即ち本因坊といはれる。當寺の住持日海上人が碁を善くし、信長に召されて祿を賜はり、天下碁所本因坊と稱し、以來巧手なる者を嗣とし、今日に至るまで本因坊の名が傳はる。



◎深草山・寶塔寺 深草。光明院の朝建立。開基日像上人。中興日銀上人。法華宗。

◎松崎山・本涌寺 松が崎。開基日生上人。文祿四年七月廿四日入寂。法華宗。

◎妙惠山・善正寺 東中山吉田の南。法華宗。開基日銳上人。元和二年二月廿三日入寂。第四世日演上人始めて壇所を建てる。

◎寂光山・常照寺 鷹峰。法華壇所。開基日乾上人。寛永十二年十月廿七日入寂。身延山二十一世の祖。

◎太虚山・光悦寺 同所。開基日上上人。法華宗。寛永年中本阿彌光悦が新田を鷹峰に開き、當寺を建てて興壽院日達を開祖とした。

◎丁光山・護國寺 山科。開基日勇上人。慶安三年十月廿三日寂。法華壇所。日勇は妙傳寺十三世を法性院と號した。

◎妙龜山・隆威寺 大龜谷。法華壇所。開基日達上人。萬治三年七月朔日寂。

◎雞冠井山・眞經寺 雞冠井。法華壇所。開基日像上人

◎久遠山・本經寺 小栗栖。法華壇所。開基日承上人。

◎正覺山・實相寺 上鳥羽。法華宗。開基大覺大僧正。

◎尼寺 上古は尼寺に五山あつた、即ち檀林寺、景愛寺、通寶寺、護念寺、惠林寺。

○檀林寺 嵯峨。舊寺領二百石。嵯峨帝の后檀林皇后本願。仁明帝の嘉祥三年建立。開基唐義空。尼寺五山の第一。

◎景愛寺 京都の北。尼寺五山の第二。開基如大禪師。一名無外、又無著。  
〔参考〕如大禪師、山城の奥州禪門の女。金澤越州守に配して一女を生み、長じて足利讚岐守淨妙寺貞氏の夫人となつて一字を洛北に建てた、即ちこれ。

◎曇華院 三條東洞院の東。舊寺領六百八十四石。山號瑞雲山通寶寺。尼寺五山の第三。開基智泉禪師。

◎護念寺 五辻の南。尼寺五山の第四。今は浄土宗となつて尼寺の名は消滅した。

◎惠林寺 在所不詳。尼寺五山の第五。

◎光照院 安樂小路。舊寺領四百五十八石。開山は御伏見帝の公主自本覺公。無人和尙に従つて薙髮し、大笑宗師に謁して受戒した。

◎大慈院 寺内通り。尼寺。從二位仲子(廣橋兼綱の女)の本願。御光嚴院の皇后、崇賢門院と號した。永徳三年十月廿二日遷化。

◎惣持院 瑞華院の北。浄土宗。舊寺領七十石。尼寺。開基未詳。

◎慈愛院 二階町の東側。舊寺領九十八石。尼寺。開基足利義持の妻。

◎寶篋寺 寺内通小川の西。舊寺領三百八十石。尼寺。開基足利義政の女。文龜年中建立。

◎瑞華院 寶篋寺の北。舊寺領四十石。尼寺。本願は大慈院殿の女。

◎寶鏡尼寺 等持院の東。相國寺の末寺。如大尼禪師の建立。初めは正脉

庵と號し、後ち夢窓國師が高師直に勸めて伽藍とし、改めて萬年山眞如寺と號した。御水尾帝再興し、第六の皇女尼に住持させ、仙壽院寶鏡尼寺と號した。◎開山の塔中は常照、即ち佛光禪師。東は普濟、即ち佛國禪師。西は心宗、即ち夢窓國師。

◎寶慈院 上立賣通り新町。舊寺領六十一石余。今は寶鏡寺の末寺。

◎大聖寺 室町の東上立賣。舊寺領二百五十石。御花園院の姫の開基。

◎三時智恩院 室町の西上立賣。舊寺領百四十九石。別號入江殿。

◎林丘寺 北修學寺村。御水尾院の皇女朱宮建立。本尊觀音。

◎靈芝山・光雲寺 洛の東山。舊寺領三百石。御光明院の國母東福門院の御願。開基英仲和尙。◎御水尾院の皇女女三の宮、即ち妙莊嚴院の御墓がある。

◎大歡喜寺 京極の北。西園寺の南。舊寺領三百石。上古は千本南にあつたが後ち此處に遷された。舊地を歡喜寺町と呼び、昔は藤原の定家卿の宅

地で時雨の亭があり、當寺は天龍寺に屬し、一旦住持の僧が無かつた。それから以來大聖寺の老尼を留守となし、後ち大聖寺の住尼を戒師とする。◎寺中に式子内親王の塔がある。

◎往生院 嵯峨。尼寺。淨土宗。承保年中觀徃法橋の草創。建保年中善惠再興。◎岐王、岐女刀自尼の塔などがある。

(参考)「妓王、妓女」姉は岐王、妹は岐女。共に平清盛に愛せられ、後ち當寺に來つて草菴を結んで遂に歿した。

◎觀月橋 舊名豐後橋。京から奈良へ出る道にある。

◎伏見町 稻荷停車場の南二十丁餘。戸數四千五百餘。人口一萬八千計り。宇治川の北岸に在るため水利よく、繁盛を極はめる。町は東西十四町南北一里十町。内に紀伊郡役所、警察署、郵便局、區裁判所など皆備はる。豊臣秀吉が在城してから從來の原野が一變して人家稠密の地となり初めた。伏見の城は石田三成の關原事件後は廢城になり、後世は道に桃を植ゑ

て春は見物が群集する。土地の名産は伏見人形を主とし、扇、團扇、茶等亦名が有る。

◎巨椋の池 伏見の南。宇治川の分派。周圍四里。池の水鳥、蓮などに聞こえる。其近所には古代の山吹の名所井手の玉川がある。

◎宇治 宇治郡。伏見の東南二里五町。山科停車場から二里廿町。應神帝の皇子菟道の稚郎子が帝位を辭し、此邊に閑居された故事が有る。地は特に製茶に聞こえる、その茶は梅尾の明惠上人が種を宋から齎らし歸つて此地に植ゑたのが初めであつた。

◎三條大橋 京都市内。鴨川の長橋。長さ六十三間幅四間餘。天正十八年豊臣太閤の命により其頃増田長盛が架けた。橋板皆花崗石を用ゐた。橋は市外の里程を數へる最初の點で、東海、東山、北陸各道の中心にあたる。橋西を三條通り、橋東を粟田口と呼び、其邊に旅店等が多い。

◎嵐山 大堰川の南岸。滿山櫻樹多く、櫻の名所として知られる。龜山帝の

御宇大和國吉野山の櫻を移植したもので、其絶景言語に盡くせぬ。大堰川に架けた橋は有名な渡月橋で、川を溯れば戸南瀬の瀧、千鳥が淵などある。古への嵯峨野は此最寄を指した稱へで、それ故土地は全體歴史的風流の事實に富む。

●保津川 桂川の上流。末は淀川となる。丹波龜岡から川船で此急流を下り、岩石、瀑布等の奇觀を眺める人が多い。初夏は満岸に蹲躑が咲き亂れて殊に美しくしい。

●嶋原 有名な遊里。遠く足利時代から今日に至る迄引き續く。

●新京極 京都寺町の東。近世新開の町ながら熱鬧は實に京都の各町町の第一で、芝居、見世物、茶亭、酒樓等で充填する。

●四條鐵橋 鴨川に架けた橋。兩岸は花柳狹斜の地。西岸を先斗町、東岸を祇園町といふ。其最寄りの歌舞場で例年有名な都をどりがある。橋は長さ四十八間、幅四間。明治七年鐵橋となる。

●圓山 八坂神社の東。一名華頂山。旅館酒樓に富む。月にも雪にも、其他京都市一般の眺望にも究竟の地で、こゝに温泉場もある。

●豐國神社 方廣院境内。明治後の建築で、豐臣秀吉を祀る。

●建勳神社 雲林院の傍。維新後の建設で、織田信長を祀る。

●白峰神社 建勳神社の傍。明治元年崇徳帝の神靈を讃岐から此地に移して祀られた。

●詩仙堂 一乗寺村。石川丈山忠房の山莊。室の四面に唐宋卅六詩人の像を描き、みづから詩賦して楽しんで居た。

●修學院 後水尾帝の離宮。林泉の風流を盡くした所。山に近い亭を鄰雲亭、池を浴龍池、花苑の亭を疇月觀、池の中嶋にある亭を窮遠軒、及び止止齋といふ。

●鹿谷 靈鑑寺の東。今も談合谷として、ひかし俊寛が藤原成親等と平家族滅の談合を此邊のわが山莊で行つた故事の名を遺す。◎櫻門の瀧鹿谷。

高さ九丈、幅壹丈。

◎永觀堂 龜山帝離宮の地。紅葉の名所。其紅葉の内染め色の種種に現れる名木もある。境内の池をば鷺池といふ。

◎真如堂 櫻、紅葉共に聞こえる。

◎同志社 相國寺門前の學校。新嶋襄氏が親しく米國などから義捐金を募り、獨力終に創建した私立大學で、關西から書生が輻輳する。

◎禁裏 京都市の北方。通稱一條の地。もとは内裏と稱へ、面積廿五萬坪。周圍は築垣で圍み、六門を穿ち、中央に内郭あり、之に承明、日華、月華の三門を置く。中に紫宸殿、清涼殿、南に仙洞御所の舊跡。維新後公家の多く東京に移轉されたため、其邸跡は皆取り拂はれ、柳櫻を植ゑ列ねられた。

◎二條離宮 市の西南の部。古への二條城。慶長七年築造。正門は堀川に臨み、明治十九年離宮となる。神泉苑社は此中にある。

### 大和國

#### 添上郡

◎春日神社 三笠山の麓春日。大和國の一の宮。祭神四座。第一武甕槌命、第二經津主命、第三天津兒屋根命、第四姫大神。◎稱徳帝の神護景雲二年十一月常陸國鹿島から武甕命、下總國の香取から經津主命、河内國平岡から天津兒屋根命が飛び來たつて三笠山に垂跡があつた。それから此處に祭られたといふ。社内には今も鹿を飼ひ、よく馴れて人を恐れぬ。◎奈良停車場から廿町。●(一)境内攝社十七。第一榎木の宮、祭神猿田彦命。第二、忠澄金剛童子、祭神伊弉諾尊。第三椿本明神、祭神野見宿禰。第四風神の社、祭神龍田明神。第五杉本明神、祭神大山咋神。第六佐軍神、祭神田心姫尊。第七栗辛明神、祭神大酢芹尊。第八海本の明神、祭神大物主命。第九八雷神社。第十手力雄神。第十一飛來の天神、祭神天御中主命。第十二岩本明神、祭神

住吉明神。第十三神護寺の社。第十四青柳明神、祭神青和幣。第十五辛柳明神、祭神白幣。第十六穴栗明神、祭神穴次神。第十七井栗明神、祭神高魂神。(二)直會殿なほまのどの一名八講座。神事役人の集會所。又法華八講會も此殿で行はれる。(三)幣殿はにのどの祭禮の日に敕使が幣を奉る所。(四)祭禮まつり即ち有名な春日祭り。清和帝の貞觀十一年十一月九日の申の日始めて行はれ、毎年二月と十一月との申の日兩度に行はれる。(五)南門みなみかど承保二年二階作りの樓門となる。此門の南に赤童子の影向岩があり、又南に如意石あり、康保四年此地に自然の穴が出来た。其深さは際限の無い處から大般若經一部を納めたといふ。(六)布生の橋ふせのきし(七)御間の橋みまのきし

(参考)武甕槌尊たけみかづねのみこと伊弉諾尊が十握の劔を抜いて軻遇突智かぐつちを斬つた。其時滴つた血が神となり、鹽速日神しほはやひのみかみと名付けた。其子を煉速日神ねはやひのみかみといひ、其子を武甕槌尊たけみかづねのみことといふ。○經津主神ふつぬしのみかみ一名齋主命いはひぬしのみこと亦軻遇突智の血から出来た神。○天津兒屋根命あまつこやねのみこと與登魂よとたまの命が玉主たまぬしの命の女許登能麻遲媛ことのまぢを

娶つて出来た神。天照大神の敕を奉じ、天孫降臨の時補佐となり、八百萬の神の棟梁五臣の第一、春日大明神といはれる。卜部、中臣、藤原、諸氏の祖。○姫大神ひめがみ高皇產靈尊たかみかほの女萬幡姫よろよろひめ。瓊瓊杵尊よろよろきの母神で春日四柱の神の一となる。

●春日神社若宮 祭神天津兒屋根命の子天押雲あめのおしぐもの命。長保五年の建立。●(一)手力雄神社てぢからのおとこ(二)通合つうがふの神かみ即ち中臣祐房なかとみすけふらの靈。(三)童子明神こどものあき即ち三輪明神。(四)南宮明神みなみや祭神金山彦神かみやひこ。(五)兵主明神ひやうしゅ祭神諏訪明神。(六)廣瀨明神ひろせ俗に鬼子母神おにこぼとこといふ。(七)懸橋明神かかけはし祭神葛城神かき。(八)卅八所明神さつかは(九)佐良氣さらかの明神あき祭神蛭子の神むしこ。(十)辨才天はんさいてん(十一)紀伊神社きい祭神四座よざ即ち日前の神ひるまへ、五十猛神いそたけ、大屋姫神おほやひめ、狐津姫きつひめの命みこと。(十二)禮拜石らいはいし卅八所の社やしろ南みなみにあり、明惠上人めいゑじゆん、解脱上人げつたつじゆんが此處で禮拜を遂げたといふ。(十三)祭禮まつり崇徳帝の保延二年九月十七日始めて行ひ、後花園院の寛正年中日を轉じて十一月廿七日とし、以來又此日を用ゐる。今は春日本社と共に年一回。

此時鳥獸を贊とし、雉子は千二百五十六羽、兔は百三十四耳、狸は百四十二頭で、其だ嚴重な儀式であつた。又流鏑馬、伶人舞百二十番、相撲十番、細男の舞、田樂の曲等があり、翌二十八日に猿樂を行ふ、之を後日の能といふ。

●水屋の社 毎年陰曆四月五日社前に猿樂があり、之を水屋の能といつた。祭神は三座、素盞鳥尊、稻田姫、南海の神女。◎北にある川を水屋川といふ。

●焼春日 ヤケカサガ 平岡明神を當山に遷した後ち雷火に焼けた處からいふ名。

●三笠山 總名、春日山。春日神社の後ろの山。鹿、月などの名所で古來名高し。

●若草山 一名九折山。三笠山の北。名所。

●能登川 高圓三笠の両山の間から出て西に流れる。

●飯合川 イヒあひ 訛つて伊夜川といふ。高圓山の南から出て大安寺の前を過ぎ、能登川に入る。

●高圓山 たかま 萬葉集では「高松」の字を用ゐる。三笠山の南。

●白毫寺 高圓山。天智帝の御櫻。舊寺領五十石。

●高皇產靈神社 祭神宇奈太理坐高御魂尊。武内宿禰の勸請。

●荒神の社 三笠山。祭神三座。即ち土祖神、澳津彥命、澳津姫神。

●手向山 若草山の邊。◎武藏塚大納言正三位良峯安世(兼武藏守)の墓。之を神に祭つて武藏塚といふ。素性法師が此處で歌を詠じた。後世其和歌から手向山といふ。即ち其歌、「手向けにはつづりの袖も着るべきに紅葉に飽ける神やかへさん」。

●武藏野 若草山の麓、袈裟谷の東。文武帝の時小野美作吾臣といふ者が武藏國を領して居た。其時分妻子は國にあり、自身は京に在つて重病に罹り、今にも死なうとした。其處で嫡子に自分の死體を送り還せといつて死んだ。然しながら路は遠し、成り難かつた故春日野の邊に葬つた。之を武藏野、武藏野塚といふ。―伊勢物語「武藏野は今日はな焚きそ若草の妻も籠もれり我もこもれり」。

◎玄武山 一名二十五所山。治承年中大佛殿再興の番匠二十五人が菩薩となつて飛び去つた跡に祠を建てたもの。今も上生院の内にある。

◎飛火野とよひの 續日本紀の説に據れば和銅五年正月河内高安の烽を廢し、始て高見の烽及び大和春日の烽を置いたといふ。―古今集「春日野の飛火の野守り出でて見よ今幾日有りて若菜摘まなん」。

◎野守の池 雄略帝の御狩りの時鷹が逸れて逃げ去つた。それから諸所を探がして野の邊に行つた處一人の野守りがその所在を知つて居た。其者がいふには影が池水に寫つた故知れたとの趣きで、それから歌などに「野守りの鏡」として詠ずる。

◎興福寺 古名山階寺。一説厩坂寺。法相宗。舊寺領一万五千四百廿九石餘。坊舎百院。附屬第一、一乘院、即ち御門跡、舊寺領千四百九十五石二斗。附屬第二、大乘院、即ち御門跡、舊寺領九百五十一石七斗餘。◎大職冠鎌子が山城宇治郡小野郷山階に居住し、寺を造つて山階寺と號した。後ち天武

帝の白鳳元年大和高市郡厩坂に遷されて厩坂寺と號し、元明帝の和銅三年又春日の地に遷され、淡海公に造營されて興福寺と號し、日本で屈指の大寺と仰がれた。今其跡は奈良の市街の中央垂井町の北になつて居る。今日に於いては頽廢して僅かに樓門金堂が遺り、維新前には毎年二月南大門で薪の能を行つたが、是も近年は廢滅した。今立派であつた頃の建物を其儘記せば左の通り。●(一)金堂第一、本尊藤山佛師の作の釋迦。白銀の長三寸の小佛を御首の中に藏し、即ち大織冠所持の靈像。第二、鐘樓、西、第三、鼓樓、東。第四、北室きたむろ。第五、東室。第六、西室。以上の室で維摩會を行はれた。(二)北圓堂本尊彌勒。元正帝の養老四年淡海公の建立。(三)東金堂本尊藥師。聖武帝の天平廿年元正帝御惱の御祈りの爲め建立。(四)五重塔。高さ十五丈一尺。天平二年光明皇后建立。(五)西金堂本尊釋迦。天平六年光明皇后建立。(六)講堂本尊安阿彌の作の阿彌陀如來。天平十八年長岡の大臣の祈願。脇士は左が勢土菩薩、右が觀音。(七)維摩會講堂で行はれ



る。大職冠疾まひに罹かり、既に危かつた時百濟國の尼法明と云ふ者が維摩經の中間疾品を請誦したならば疾まひが癒えるであらうと曰つた。其處で僧をして之を讀ましめた處、果たして平癒した。それから諸處で維摩會を修することになつた。延暦二十一年から興福寺の外では勤めることが出來ぬ事となつた。すべて維摩會の講師は聖寶僧正所持の如意を持つて之を勤める。若し如意が東大寺から出なければ行ふ事が出來ぬほど嚴重な儀式であつた。(八)食堂本尊千手觀音。淡海公建立。(九)七堂伽藍以上の七堂、即ち金堂、北圓堂、東金堂、五重堂、西金堂、講堂、食堂。(十)南圓堂本尊不定羅索。弘仁四年藤原冬嗣建立。淡海公から五代内麻呂の子。純銀の觀音の像千體を地の底に埋めてある。西國巡禮の第九番。(十一)中門金剛力士。(十二)佛生會中門で行ひ、俗人の樂がある。(十三)南大門金剛力士の二王像。(十四)薪の能即ち南大門の前で、毎年陰曆二月七日から十四日まで行はれる。今は絶えた。(十五)羅辨才天弘仁年中弘法大師の勸

請。(十六)一言主神社所謂聖天の神社。(十七)中の院の屋佛舍利を祭る。(参考)淡海公大職冠鎌足の子。文武帝の四年詔を奉じて律令を撰して政務の本とし、天下の重寶となり、元正帝の和銅元年右大臣となり、養老四年八月三日六十二歳で薨去。贈大政大臣正一位。諡、文忠公。近江國を領した爲め淡海といふ。其餘皆詩文を善くし、天平九年疱瘡で兄弟皆死に、二女あり。一を宮子と云ひ文武帝の妃、二を光明子といひ、聖武帝の妃、孝謙帝の母。長子は武智麻呂といつて正一位左大臣に任じ、之を南家と稱し、次ぎを房前トモサキと云ひ、之を北家と稱する。後世藤原の末葉は皆これから殖ゑた。◎玄昉法師元正帝の靈龜二年詔を奉じて入唐し、聖武帝の天平七年遣唐使多治美廣成と共に歸朝し、經論五十餘卷を持ち來つた。帝が之に紫袈裟を賜ひ、且つ法相宗に傳來して興福寺に相承し、天平十八年六月筑紫で入寂した。僧律に背く品行であつたとて人の憎みを受けたといふ。

●さるさき猿澤の池 興福寺南大門の前。印度の獼猴池に比べて呼ぶ名といふ。平城帝の官女に采女うねめといふのが有り、寵の衰へたのを恨み、終に身を此に投げて死んだ。帝も大いに其志しを憐れみ、行幸して哀悼されたといふ。事の趣きは大和物語に見え、今も池邊に采女の社、采女の衣懸きかけの柳など有る。池は半月形で、興福寺の南圓堂、五層塔等を望み得られ、且其近年櫻を植ゑたため遊人も群集する。池畔には旅店、酒樓など多い。一人丸まるわきもことがねくたれがみを猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき。

●とらふき轟の橋 東大寺と興福寺との間の橋。北に在る坂を雲井坂といふ。一「うちわたる人目も絶えず行く駒の踏みこそ鳴らせとどろきの橋」。

●とらふいし東大寺 奈良。舊寺領二千二百一十一石餘。一名城大寺、恒說華嚴寺、大華嚴寺、國分寺、金光明四天王護國之寺、華嚴宗、八宗兼學派。天平十五年聖武帝大佛を造り、其十七年八月當所に置く。開基僧良辨。●(一)金銅雙遮那佛「普通に云ふ奈良の大佛」。座像。高さ五丈三尺。面豎一丈六尺、幅九尺

五寸。眉五尺四寸五分。目三尺九寸。口三尺七寸。鼻孔徑一尺。頸二尺六寸五分。耳八尺五寸。胸二丈九尺。頤一尺六寸。肩二丈八尺七寸。腹一丈三尺。臂一丈九尺。肘腕間一丈五尺。掌一丈三尺。中指五尺、周四尺五寸。脛二丈三尺八寸。膝高さ七尺。蹠徑一丈三尺。蓮華銅座徑六丈八尺、高さ一丈。蓮花瓣二百八十葉、周廿一丈四尺。基礎周廿三丈九尺。鑄工從五位下梯本男玉、同高市眞國、同高市眞麿、番匠從五位下稻部百世、同益田繩手、佛工從四位下國中連公麿。開眼導師天竺の婆羅門僧正。呪願師行基僧正。大像數回の失敗を累ね、七年を経て天平勝寶元年竣功し、同四年大供養有り、四月九日天子行幸になる。時の導師婆羅門僧正。呪願師導塔律師(行基は天平勝寶元年入寂)。講師隆尊。讀師圓福。●佛殿東西廿九丈、南北十七丈、高さ十五丈六尺。廻廊柱數五百八十。●治承四年十二月廿八日平重衡の兵火で本堂焼失。●建久年間後白河帝の命で源賴朝、俊乘坊重源等本堂再建。建久六年三月十二日大供養。此時修繕費、唐金七十三萬九千五百六

十斤、黄金一萬〇四百卅六兩、金箔十五萬枚、白鑽一萬二千六百八十斤、水銀五萬八千六百二十兩、炭一萬六千六百五十六石、鑄工宋の陳和卿、草部是助、番匠物部爲里、櫻島國宗、佛工康慶、連慶、定覺、快慶、導師權僧正覺憲、呪願師權僧正勝賢。○永祿十年松永久秀の兵火に佛首落ち、之を大和の書工山田道安が私財で補ふ。但し佛殿は其後百餘年無し、貞享の頃寺僧龍松院再興。貞享五年四月二日手斧はじめと千僧供養。寶永二年四月十日棟あげ。同六年四月八日大供養。(二)二月堂にぐわつだう本名けんさくゐん羅索院。本尊十一面觀世音。開基實忠。正嘉二年二月九日、寛文七年二月十五日本堂焼失。寛文九年再興。毎年二月に法會(一日から十四日間)、其故に二月堂の普通稱も起る。法會に牛王ごわうの護符を出す、之を二月堂と云ふ。(三)戒壇院かいだんゐん天竺の鑑真和尚聖武帝の朝に來朝し、天竺那蘭陀寺の土で戒壇を此所に築いた縁起。(四)「法華堂」一名ほつげだう羅索堂。金鐘寺。通稱三月堂。本尊彌勒菩薩。開基僧良辨。(五)「三昧堂」通稱四月堂。本尊普賢菩薩。(六)東南院とうなんゐん開基聖寶。大佛供養の時

源頼朝の旅舎と爲り、嘉曆二年暫時後醍醐帝の行在となる。(七)總持院そうぢゐん本尊地藏尊。所謂ふみづかひの地藏。東大寺再興奉行左少辨行隆死去の時其女が大に悲しみ、書狀を認めて地藏尊の手に結び付け、冥府にある亡父からの返書を望んだ所、不思議にも七日を過ぎて地藏尊の手に父からの返書があり、しかも明きらかに亡父の筆跡であつたといふ。(八)正倉院しやうそうゐん即ち所謂敕封の庫。稀有の寶物をのみ藏する神庫、日本で屈指の靈殿。今は宮内省の管理で、毎年盛夏の頃風入れと蟲干しとを行ふ。其寶物の中殊に昔しから聞こえるのは黄熟香(一名蘭奢待)及び大紅塵の二名香で、前は量三貫三百五十目、後ちは四貫六百目。蘭奢待の名は聖武帝が命ぜられたもので、冬の字の中に「東」「大」「寺」の三字を籠め含ませたものであるもの、實は蘭の中の字は「東」で、「東」は誤りであつた。此香に對する歴代の待遇は嚴密を極はめたもので、元龜三年三月廿八日織田信長が其端一寸八分を剪り取つて拜領した時なども勅奏を經、勅使に日野大納言資定、飛鳥井大納言雅

教奉行に佐久間右兵衛尉信盛、菅屋九右衛門、塙九郎左衛門、蜂屋兵庫頭、武井夕庵、松井友閑法印などの人人が儀式に臨んだほどであつた。○鴨毛の屏風「寛文六年三月四日から同七日に至る迄の間に寶藏開封を行ひ寶物を點檢された中に見出だしたのは鴨毛の屏風といふものであつた。上古東大寺供養の時唐から進獻した屏風で、東大寺から法華寺に至るまで十五町ばかりの間に連なるほどの長さで、光明皇后が當寺に參詣の時之を建て列ねた故事が有るといふ。(九)如意塚「東南院寺内。聖寶が如意を掘り出したといふ處。此如意は興福寺の維摩會の講師が必ず携へるべき例となつて、大に貴重される。(十)東の塔「七重。高さ廿三丈八寸。天平勝寶五年の建立。(十一)西の塔「七重。高さ廿三丈六尺七寸。後此礎のみ残る。(十二)講堂「永祿十年の回祿後建たぬ。(十三)鐘樓堂「この堂の釣鐘に費した銅と錫とは合計七萬三千斤ほどであつたといふ。(十四)念佛堂「本尊地藏、俊乘の作。(十五)遺像堂「俊乘の遺像を本尊とする。(十六)仁王門「

安阿彌の作。(十七)御影堂「本尊は良辨自作の影像。

〔參考〕「婆羅門僧正」名は菩提。南天竺の高僧。唐土五臺山の文珠の瓊瑤を聞き、舟を浮べて入唐し、同山に登り、老翁に逢つて聞けば文珠は移つて日本に在るとの事であつた。それから急に日本に來り、時の高僧行基に歡迎され、帝室の歸依も厚かつた。天平寶字四年二月廿五日遷化。

○般若寺 奈良の北。舊寺領三十石。開山觀賢僧正。本尊丈六の文珠。○治承四年平重衡に焼かれた頃は眞言宗で、龜山院の文永年中興正菩薩が再興してから以來律宗となつた。○後醍醐帝の元弘年中大塔宮が此寺に隠れ、身を般若經の櫃の中に入れて遂に賊兵に捕へられるのを免れた。○正親町院の永祿十年當國志貴の城主松永彈正が三好と合戦の時其兵火に寺も亦焼けた。○寛文年中再興。●(一)惡左府藤原賴長の墓(二)三間卒都婆

〔參考〕「觀賢」姓は秦氏。讚岐の人。醍醐聖寶僧正の高足となり、延喜十

九年醍醐寺の座主に任じて般若寺を開き、延長三年僧正となり、同六月十一日入寂した。

◎奈良坂 此邊に昔し癩人があり、忍性律師が之を看病した處、其人が死んで又再び來り、奴となつて其恩に報いたといふ。

◎佐保川 春日山から出る川。西の方肩間寺の南麓を流れる。肩間寺の山號は佐保山。

◎本川社 いさがはのやしろ 今の子守町。祭神開化天皇、子守神、住吉神。右大臣藤原是公建立。

◎元興寺 もとこうじ 奈良の南。「くはこせ」「くはこじ」などとも讀む。舊寺領五十石。推古帝の四年高市郡飛鳥の地に四門の敕額寺を建てた。蘇我馬子が守屋を討つ時誓ひを立て、守屋を殺した後ち勅を奉じて建立し、法興寺又は飛鳥寺と名づけ、後ちに元興寺と改めて新都の奈良に遷し、中古以來衰頽し、後世は唯五重の塔一基と觀音堂一字のみ遺つた。◎高麗の釋慧灌が來

朝したのは推古帝の三十二年で、其夏大旱のあつた時、之に雨を祈らせた。其處で慧灌が青衣を着して三論を講じた處大雨が降つた。それから之を擡んで僧正となし、三論宗を弘めさせた。

◎極樂坊 元興寺の北。初めは元興寺の末寺であつたが後に西大寺の法流となつた。智光法師住居の寺。

(參考)「智光」河内の人。門守りの姫の子。幼名は麻福田丸。戀慕のことから遁世し、禮光と共に元興寺に止まり、智藏の三論の深旨を得、智藏も亦此二人を神足として愛した。◎「禮光」前と同じく智藏に就いた人。晩年無言の業を行ひ、遂に入寂した。禮光の居た處に寺を建て、仙光院と名付けて極樂坊の北にあつたといふ。今日では分からぬ。

◎禪院寺 所在不分明。道昭法師が歸朝の後ち、門弟子の建立。

(參考)「道昭」河内丹北郡の人。元興寺に住して戒行の譽れがあり、孝徳帝の白雉四年遣唐使小山長府に従つて入唐し、玄奘三藏に謁した。文武

帝の四年三月年七十二。始めて本朝で火葬を行つた。道昭一代の中に井を穿り、船を設け、橋を架ける等の事業は多く、其事業の中で有名なのは山城の宇治の大橋を架けたことなどであつたといふ。

◎少塔院 舊跡は西の新屋にある。護命僧正住居の寺。

(参考)護命姓は秦氏。美濃各務郡の人。五歳で吉野山に入り、やがて元

興寺の萬耀に従ひ、十七歳で得度し、同寺の勝虞に従つて唯識を學び、山に入つて虚空藏の法を修し、弘仁七年僧都に任じ、天長四年僧正となり、仁明帝の承和元年九月十一日元興寺の少塔院で終つた。年八十八。奈良の有名な法論味噌は此僧正が始めて工夫爲出したものといふ。

◎紀寺 舊名埴城寺。舊寺領二十石。開基行基。紀有常再興。

◎十輪院 元興寺近處。開基弘法大師。石の堂、石の地藏尊。

◎頭塔 玄昉僧正が筑紫で藤原廣嗣の靈に攫まれ、其首が興福寺の庭に落ちた處玄昉の名が記してあつた。其處で此處に埋めたといふ俗傳がある。

◎不空院 高島。由來未詳。舊寺領三十石。

◎新藥師寺 清水。舊寺領百石。聖武帝が眼病の救願の爲めの建立。

◎八島の陵 藤原の南。或ひは八島寺といふ。即ち早良親王の陵(山城御

靈社参考)。

◎光仁天皇の陵 田原。

◎菩提寺・正曆寺 奈良の東南一里許り。眞言宗。舊寺領二百石。本尊藥師如來。開基兼俊僧正。一條院の正曆年中攝政兼家の子兼俊僧正が敕を奉じて建立し、龍樹院と名づけた。本尊は天竺の龍樹菩薩の作で、善無畏三藏が來朝の時持ち参り、當寺の物となつた。◎建保六年信濃大僧正再興。

◎石淵寺 高圓山の東。今は古跡のみ残る。勅探僧都住居の寺、即ち三論宗の元祖。◎中古當寺の僧が大地院の兒を若阜山で殺して自殺した。それから兩寺の争ひとなり、遂に寺院を焼かれることになつて滅却した。其

二人の塚は若草山の西にあり、今も燐火が出て戦ふなどといつて逢火あひひの塚の名もある。

(参考)「勸操」姓は秦氏。大和高市郡の人。天平寶字二年十二歳で大安寺に入り、善讓法師に就いて三論の學を禀け、神護景雲四年勅命を以つて宮中及び山階寺で一千の僧を度して名一代に高く、弘仁年中大極殿で最勝王經を講じ、諸宗と辯論あり、賞されて僧都となり、東大寺の幹事を兼ね、延曆十五年始めて法華八講を執行し、天長四年五月七日西寺で入寂。年七十四。

●中川寺 奈良の東。號、成身院。開基實範大徳、即ち藤原顯實第四の子。

●忍辱山・圓成寺 奈良の東北。舊寺領二百三十五石。開基唐僧虎瀧和尚。

眞言宗。

●眉間寺 みけんじ 佐保山。律宗。舊寺領百石。聖武帝の建立。●(一)南陵「聖武帝

の陵。帝は天平勝寶八年五月二日崩。(二)東陵「平城帝の后。寶治六年七

月薨。(三)西陵「桓武帝の后。(四)佐保山「眉間寺の傍の山。北は山城に續き南は大和添下郡となる。前の川を佐保川といふ。

●欲良峯陵 よらのむねのみやま 眉間寺の乾。即ち元明帝の陵。其傍に元正帝の陵もある。其處をば法華寺村といふ。●境内に不思議な石があり、其石面に狐が杖を携へて踊る形ちが彫つてある。上古は此石が七つあり、之を七匹狐と云つたが今は一箇のみ残る。其象を以つて推する處非常な上古の遺物で或ひは多少の形跡を歐洲の古代と同じくする處があるといふ。作者來由未詳。

●不退轉法輪寺 眉間寺の西。舊寺領五十石。在原業平の建立。其自作の觀音像を本尊とし、又自畫の遺像と陽成院震翰の讚とがあるといふ。

●法華滅罪之寺 律宗。舊寺領二百二十石。光明皇后の建立。其自作の十面觀音を本尊とする。◎建長元年以來西大寺の末派となる。●(一)横笛

堂「法華寺東の門内。(二)薦枕川「法華滅罪寺の南。

●阿闍寺の舊跡 法華寺近處田の中。今は田となる。光明皇后が敕願あ

り、浴室を立てて千人の身の垢を去らうとした時、阿闍佛が癩人に化して其信心を試みたといふ。後ちに寺を建てて阿闍寺といふ。

〔参考〕〔光明皇后〕淡海公の女。母は橘氏。三千代皇太后といふ。聖武帝の妃となり、高野帝及び皆皇子を生んだ。性質仁慈で物を救ふ志しがあり、佛道を信じ、東大寺を建て、天下の國分寺は皆皇后の勤めに由つて成り立ち、又悲田施藥の兩院を設け、天下の飢病の徒を療養し、天平寶字四年六月崩。年六十。天下大いに悲しみ、三日の間は哀聲が絶えなかつた。大和添上郡佐保山に葬る。東大寺の大佛が成つた時、皇后が浴室を建てて貴賤に拘はらず千人の垢を去らうとした。既に九百九十九人が濟んで今一人となつた時一人の癩人が來た。皇后はそれでも堪へて其者の垢を去ると、其癩人が膿を吸へと云つた。皇后が又其瘡の膿を吸つたと思ふ中忽ち其癩者が光りを放つて告げていふには「我れは阿闍佛である。慎んで人に語る勿れ」と。皇后が驚いて之を視れば妙相端嚴光華

馥郁、忽ち見えなくなつた。遂に其地に伽藍を搦へて、阿闍寺と號し、皇后も自ら大藏經を寫した。

◎大安寺 初めの名は百濟寺、後ち大官寺と號した。推古帝の二十五年聖德太子草創。初め熊凝に建て、後ち百濟川邊に遷し、百濟大寺と名付け、舒明帝の十一年改めて大安寺と號し、此處に遷した。沙門道慈が唐の西明寺に摸して大伽藍を建て、本朝七大寺の一といはれた。東大寺、西大寺に准じては此寺を南大寺ともいふ。

◎海龍王寺 一名角寺すみでら。舊寺領百石。天平寶字三年光明皇后建立。

◎柏木の森 六條大道の北。

◎辰の市の社 大安寺の南。祭神、時風秀行の靈。其邊りの村を辰の市と云ひ、毎辰の日に市が行はれる。

◎宇留末うるまの清水

◎帶解寺 辰市の東南。本尊地藏。染殿后が之に祈つて懷胎し、皇子を平



産されたといふ。

〔参考〕〔染殿后〕藤原良房の女明子。文徳帝の后となり、染殿后と號し、第四の皇子即ち清和帝を生まれた。

◎大和七箇寺大念佛派 南都の徳融寺。郡山の圓融寺。櫻井村の來迎寺。宇多の光明寺。榛原の宗祐寺。白石村の興禪寺。東谷の大念佛寺。

添下郡

◎平城宮（平城宮） 元明帝が菅原の宮から此所に遷都された。

◎佐紀山 歌姬村の西。●〔一〕神功皇后の陵。〔二〕成務帝の陵。〔三〕神功皇后の陵の北。〔四〕孝謙帝の陵。〔五〕日葉酢媛（ひはすひめ）の陵。〔六〕鷹塚（たかづか）神功皇后の陵の南。金の鷹を埋めてあるといふ。

◎佐紀の池 一名盾波の池。垂仁帝の時堀る。◎〔垂仁帝の陵〕

◎超勝寺 招勝寺村。眞如法親王建立。◎〔念佛堂〕正暦年中興福寺の僧清海超勝寺に遷つて念佛三昧の一字を院内に造り、自ら曼陀羅を圖した。之

を本朝第三の曼陀羅といふ。

〔参考〕〔眞如法親王〕平城帝の第三皇子。出家して眞如と號し、當寺を建て求法の爲めに天竺に渡り、其旅行の中虎に殺された。寺は天正以來廢滅して僅に一小庵のみ残つた。

◎菅原寺 超勝寺の南。本名喜光寺。舊寺領三十石。本尊阿彌陀。行基菩薩が造營して此處に住居した。

◎伏見の岡 菅原寺近處。昔し何處の人とも分からず（或ひは天竺から來たと）伏見の翁といふ人があり、菅原寺の側の岡に臥すこと三年、其間起つことも爲す又物も言はず唯時時首を擧げて東の方を見るばかりであつた處から人は之を啞とした。天平八年行基が婆羅門僧を迎へて供を設け、共に歡しみ、やがて箸を執つて拍板（びんざら）となし、互に舞つた時、翁が俄に起つて寺に入り又歌を作つて「時なる哉、時なる哉！」と歌つた。それから三人共に舞つた爲め人が大いに驚いた。其今迄頭を擡げて東を見たのは東大寺の

營構を見たものといふ。其臥した所を是から「臥見の岡」と名づけた。

◎興福院 菅原の南。尼寺。舊寺領二百石。もと弘文院の舊地に一人の尼が草庵を結んで住居した。天正年中寺を造つて興福尼院と號し、寺領を賜はり、一旦闕所せられ、寛永年中又舊地を賜はり、寛文年中添上郡眉間寺の内に遷された。

◎新田邊の親王の陵 天武帝の皇子。俗に此陵を蓬菜といふ。

◎靈山寺 稱、鼻高山。舊寺領百石。本尊藥師如來。行基菩薩の開基。

◎唐招提寺 蓬菜村の南五條村。律宗。舊寺領三百石。聖武帝の敕願。孝謙帝の敕額。開山は唐の鑑真和尚。◎(一)金堂唐僧如實の建立。本尊丈六の釋迦。(二)經藏唐の義靜建立。(三)御影堂唐の思佗建立。(四)食堂(五)羅索堂(六)講堂本尊は唐の法力作の彌勒菩薩。(六)西方院中興祖師の廟所。(七)佛舍利當寺第一の什物。三十粒ある。鑑真が唐から齎した。

(參考)「釋鑑真」姓は淳于氏。唐の揚州江陽縣の人。十四歳で大雲寺の智

滿禪師に就いて三藏の教法を究め、戒律を授かり、天寶元年揚州の大明寺で律講を開いた。此時日本の興福寺の僧榮叡及び大安寺の僧智照が留學のため遣唐使廣成に随つて入唐し、鑑真に向かつていふには「昔し吾が聖徳太子が書いた物の中に『二百年の後ち異域の人が來て眞教を興すであらう』とあつたと見れば今は其期である。願はくは東遊されよ」と。鑑真も承知して天寶二年夏、照等八十餘人と海に浮かんで來た。處が忽ち猛風が吹き、中夜船人四神の金の甲を着け、臚に立つのを見て遂に恙なく、天寶十二年の冬副使伴右の船に乗つて太宰府に着し、それから勅命で東大寺に館した。其時天竺の婆羅門僧、唐の道璿も共に來た。鑑真が持つて來た佛舍利は三千粒で、其他阿育王の塔、樣銅支提止觀玄義文句、菩提子三斗、晋の王右軍の眞行の書一卷、何れも稀代の寶物であつた。聖武帝、皇太后、太子、公卿以下菩薩戒を受ける者四百三十餘人あり、又別に寺を建てて招提寺と號し、天平寶字二年大和尙の號を賜はり、

同七年五月六日遷化した。壽七十七。此人一代に戒を受けた者が大凡四萬餘人もあつた。藥物をば常に鼻で香を辨別して少しも誤らなかつたといふ。

◎藥師寺 招提寺の南。舊寺領三百石。天武帝の白鳳八年十一月皇后病氣の時勅願に由つて建立。釋の祚運が入定して龍宮の伽藍を見、定から出て其模様を奏し、遂にそれを土臺として建てた。故、結構は目を驚かすほどであつた。此處に遷されたのは元正帝の養老二年。●(一)金堂、本尊は藥師如來。齋衡二年法華會が始まる。(二)講堂、天長七年最勝會始まる。(三)西院、舍人親王建立。(四)東院、長屋親王建立。(五)鎮守八幡宮、別當榮昭の勸請。(六)佛足形の石、金堂の西、叢林の中。

◎勝間田の池 藥師寺の邊。

◎犬塚 郡山。聖德太子が飼はれた犬の塚。其犬の名を白雪丸といふ。

◎赤檜の墓 守屋大臣を殺した人の墓。

◎松尾寺 まつのおでら 山田村。本尊十一面觀音。舍人親王の建立。

◎矢田寺 やたでら 松尾寺の北。西矢田村。本尊地藏菩薩。天武帝の勅願。開山智通僧正。中興の開祖は滿米上人。◎小野篁が魂を冥途に通はせた時、閻魔王が菩薩戒を受けやうと篁に戒師を望んだ。篁が對へて、臣が師友に滿慶上人といふがあり、閻浮の日本國にあると。其處で王が悦んでいふには早く喚び來れど、それから共に伴つて地獄に行き、閻魔が悦んで菩薩の大戒を受けた。其時上人の所望で阿鼻、及山等の地獄に往つて苦報を見、或る處で一人の比久尼が焰の中にあつて熱を耐へて居るのを見た。それからそれ近付き、其名と罪とを問ふた處、吾は地藏菩薩なり。汝來つて戒法を説き、爲に苦を離るる者多し。吾も亦隨喜す。吾嘗て衆生の苦しみには代はるなり。然れども無縁の衆生を濟ふことを得ず。汝人間に反つて之を告げ、我れに歸命せよ！と云ふ赴きであつた。それから滿慶が歸るといふ時、閻魔王が漆で塗つた篋を呉れた。それを啓いて見れば白い粳米で、幾ら取つ

ても竭きなかつた。此に於いて良工を招いて地獄中の地藏の相を刻ませ  
て此寺に安んじ、それを祭つたのが此矢田寺である。其像の身長は五尺。  
此米の故事から時の人は満慶の一名を満米とも云つた。

◎東明寺 矢田の北。本尊薬師如來。舍人親王建立。

◎西大寺 西大寺村。舊寺領三百石。稱徳帝天平神護元年草創。開山常騰  
僧都。中興叡尊僧正。●(一)四天王の像(身長七尺の銅佛。(二)愛染明王(粟  
古退治の御願。(三)觀音堂(延寶二年建立。(四)豐心丹(當寺から出す秘藥。  
丸藥で能く諸病に利くといふ。

(参考)〔常騰少僧都〕姓は高橋氏。博く經論を究めて一時に名があり、諸  
經の注釋六十三卷を著して世に傳はつた。嵯峨帝の弘仁六年九月寂。年  
七十六。◎〔叡尊〕醍醐寺の叡賢の弟子。十七歳で髮落し、唐の鑑真に従  
つて律宗を學び、西大寺に於いて盛んに戒法を弘め、一代の名僧と仰が  
れた。伏見帝の正應三年八月二十五日西大寺で入滅。年九十。正安二年

救命に由つて興正菩薩と證された。

◎秋篠寺 西大寺の北。舊寺領百石。光仁、桓武二帝の敕願。本尊薬師如  
來。開山善珠僧正。舊秋篠は地名。

(参考)〔善珠〕姓は安部氏。幼時は愚鈍で自分でも耻ぢ、専心唯識宗を學  
び、因明論を習ひ、種種の苦學を経て遂に志しを達して非凡な人となつ  
た。延暦十六年僧正となり、同四月寂。年七十五。

◎外山の里 秋篠の近處。西行の歌「秋篠のとやまの里や時雨るらん生駒  
の嶽に雲のかかれる」で聞こえた名所。

◎高山八幡宮 外山里の西北。

◎添縣坐神社 祭神武乳遺命。今は所在不明。  
平群郡。

◎八幡宮 孝謙帝の天平勝寶元年十二月肥後から此處に遷された。初め  
神託があつて京に迎へることになり、石川年足、藤原魚名を迎神使とし、宮

の南梨原宮へ新殿を造つて神官として、之を祭り、神封八百戸、位田八十町と充てた。

◎青垣山 景行帝が登つて歌を詠じたとして名のある山。

◎法起寺 小泉の南。一名、池後寺、又岡本寺。聖德太子法華演説の寺。其

西山の瓦塚は太子が數万枚を納めた所。

◎栗毛馬の塚 聖德太子が常に乗つた栗毛の馬の死んだのを埋めた所  
法起寺の近處。

◎法琳寺 法起寺の西。一名、三井寺、又御井寺とも書く。推古帝の朝百濟の僧と山城の大兄王等と合體しての建立。法隆寺の伽藍と共に相並んで美しかつた。今は衰頽して古塔が一基あるばかり。

◎富の小川 法隆寺の南。和歌の名所。

◎中宮寺 斑鳩寺の東北。初めは法隆寺の東にあり、名を法興寺ともいつた。聖德太子の母公、間人皇后の草創。本尊如意輪觀音。

◎駒塚 聖德太子の乘馬、黒駒の墓。

◎調子丸の塚 駒塚の南。上に一本の松がある。百濟の調宰相の男が聖德太子の御馬副となつた、それを葬つた所。

◎斑鳩の里 今の法隆寺の東院の地。聖德太子居住の舊跡。其近處に因可の池といふのがある。

◎法隆寺 別號、斑鳩寺、七德寺、聖國寺、寶龍寺、來立寺、鳥路寺、往生寺、法隆學問寺。聖德太子が用明帝の祈禱の爲め自ら藥師の像を彫刻して此寺を造つたが、帝の病は愈えず、遂に崩御になつた。それから止むを得ず推古帝の十五年敕願を果たして寺は残らず建立になつた。法宗八宗兼學。舊寺領千石三斗二升。◎(一)金堂(聖德太子作の藥師、釋迦の二佛。(二)五重塔)(三)太子堂(四)東院(五)八角寶形堂(所謂夢殿。(六)舍利堂)一名護持堂。  
(參考)聖德太子(桶豐日の子。豐日は欽明帝の子、敏達帝の弟。母は穴穗部間人の皇女といふ。一代の間、殊に佛法を信じ、それを保護した功績は

擧げて盡きぬほであつた。推古帝の二十八年二月五日妃と同時に薨去になつた。壽四十九。◎〔釋智藏〕吳國の人。福亮法師の俗の時の子。喜祥に謁して三論の奥旨を受け、日本の法隆寺に居て盛んに空宗を唱へ、天武帝の白鳳元年僧正となり、其夏旱魃の時雨を祈つて大雨があつた。

◎叶堂 法隆寺の西南安明寺村。聖德太子が守屋連を殺してからの建立。願成就の祝意を表したものと云ふ。

◎常樂寺 古市場。太子建立四十六箇寺の一。

◎蘆壙の宮 法隆寺の南五六町。號は上宮村。聖德太子が此處に居住した。それから上宮太子と云ひ、其宮殿は蘆を垣とした故、蘆壙の宮の名もあつたが今は残らぬ。

◎新龍田の社 法隆寺の西南六七町龍田町。祭神二座、龍田彦神、龍田姫神。聖德太子が法隆寺を建てた時瑞現があり、之を法隆寺の鎮守とした。

◎椎坂 聖德太子が此坂で尺八を吹いた時山神が出現したと云ふ。

◎北岡の墓 平群川の西。山背大兄王を葬る。

〔参考〕山背大兄王やましろのおおえのみか聖德太子の長子。性柔和で善く佛法を信じ、蘇我入鹿の奢侈専横を憎んで遂に之と戦ひ、敗れて自殺し、大いに人に惜しまれた。

◎福貴寺 椎坂の北谷。道詮法師が求聞持の法を修した所。

◎平隆寺 法隆寺の西一里ばかり。推古帝の建立。

◎龍田社 法隆寺から一里餘。本社は立野にある、祭神天御柱神、國御柱神。天武帝四年小紫美濃王小錦下佐伯連廣足が勅を奉じて風神を龍田の立野に祭る。伊弉諾、伊弉册尊の吹いた息が風の神となつて級長津彦命しなかつひこと云ひ、其女を級長戸部命と云ふ。伊勢では之を風の宮と稱する。●(一)若宮(二)三太神三座(三)瀧祭神一座伊弉諾、伊弉册の二神が天の逆矛を以つて下界を探つたといふ所。

◎神南かみなみ 龍田の近處。又「神名備」にも書く。



●龍瀨山 かみのせき 聖徳太子が始めて開いた河内への通路。

●淺笹原

●古手山

●龍田川 明神から四五町。古來紅葉で聞こえた名所であつたが、後世紅葉の數も全く減つた。

●三室山 龍田川の岸。此邊は龍田川と同じく昔し紅葉で有名であつた。

●信貴山・朝護國孫子寺 大和河内の境。舊寺領三十石。觀喜院朝護國孫子寺と號する。天台宗。本尊は毘沙門天。開山は明蓮上人。聖徳太子が守

屋連と合戦の時寶器を得て勝利があつたといふ。當山の中には焼け米が多く、其原因に就いては種種な説がある。

●施鹿園寺 勢益の里。昔し此處で犬に噛まれて死んだ鹿を憐んで、聖徳太子が此寺を建てて葬つた。

●摠持寺 かみまひ 神南山。聖徳太子の遺像を什物とする。

●久土寺 くつでら 久土の里。聖徳太子の建立。

●額安寺 額田部村。舊寺領二十石。本尊十一面觀世音。推古帝に而瘡が出来た時、聖徳太子が祈願して藥師佛を造つたところ、果たして瘡が平愈した。因つて之を額安寺と號した。中興、忍性律師。●鎮守神推古帝を祭る。

●柏木の森 額安寺の西南。和歌の名所。

●生駒山 此邊の名山。東は當郡に屬し、西は河内の河内郡。其頂上を聞かみ上峠といふ。山上に歡喜天の祠が有る。山は和歌の名所。

●鬼取山 おにとり 生駒山から北十町ばかり。

●竹林寺 生駒山の東の麓。本尊文珠。開基行基菩薩。

●都史陀山・寶山寺 般若窟。役小角修行の靈窟。中興寶山和尚。本尊寶山自作の身長二尺五寸の不動明王。●(一)歡喜天の祠。(二)常念觀音堂。

(三)雲上閣本尊虚空藏。(四)彌勒佛。(五)辨天才社。(六)役行者堂。(七)十三

級石塔婆の頂上に佛舍利及び三千の佛名がある。(八)石塔彌勒佛の岩の上。非常な峻峻な處にある。

(参考)〔寶山〕寶山の傳に就いては種種な説がある。今元亨釋書其他を折衷して下に引く。〔寶山名湛海、姓山田氏。勢州安濃郡一色村人也。母辻氏。寛永六年二月二日生。性敏穎、伎藝不學而善焉。捏鏤彫畫自絶妙也。十八歳潛薙染師事周光阿闍梨、復隨東寺光辨和尚受密乘。從高野賴山和尚授傳法職位。又學密藏於仁範上人。出洛陽、就岡村三叔學儒書也三年。此間毎月廿四日斷食登愛宕山。其上下徒跣誦心經千遍。遂於山上。一七日斷食。復赴江戸、列處處講席。雖然常慕小角泰澄之風。或斷食修法、或累夜不眠。遂廢學業、偏事修業焉。乞得光宥阿闍梨所持螺髮佛舍利、而百日後分殖成百六十粒。信之篤也可知。常修歡喜天法時、壇上出現象頭人身也。願拜真形。則現三面六臂形。面赤如火。長可七尺也。因始行一萬座、華水供數千座、而任告到京、得粟田口天王坊、住持、擴地建堂、目專

勒之(即ち其所が今の歡喜院)。修花水供二萬三千餘座。修浴油供二千日、有法驗不可收擧。一時歡喜天出現真形。則海自圖之命工鑄之。此像傳于鬼住覺彦和尚(今は觀心寺にあるといふ)。一時歡喜天告曰、汝要爲我眷屬。然則使所願悉速成就也。海曰出家修道期佛果。冀現今入佛位。天曰是非我三昧。因海以爲、聖天本是大自在天外部天也、成其眷屬、豈沙門志乎。時天呵曰、汝以我爲魔醯首羅毗那夜迦乎甚非也。我是毗盧遮那佛化身號大聖歡喜天須見小野曼陀羅寺古書也。爾後閱覺禪鈔、有聖天秘訣曰、此天法入魔醯首羅部者大謬也。有悉地自在德故、名自在天。於是雖解疑而猶豫。又夢不動明王諭曰、汝速覺名利夢、可發菩提心也。因一向歸明王、止聖天供。天甚憤、入皮肉骨髓而痛、或援落於牀、障礙多。明王亦有擁護。於是師圓忍和尚、習諸威儀、遂讓歡喜院於周範、到和州法隆寺、住北室。復病難頻發至不起。蓋是聖天所憤也。仍懺謝曰、以後亦日日可法施、願恕宥焉。隨病患頓痊、入泉南神鳳寺受律學也三年。又遷和州風森南禪寺不出房也。



千日。又期二百日坐胡牀無言一食便轉之外無起。爾以來對人則曉其意。見鳥獸亦能察其志。一日洞元比丘來對話曰、生駒山有般若窟。本役行者修行靈場而凡人不能登住。海聞之大喜、此所我願也。乃請聖天曰、入彼巖則以尊天爲鎮守、任緣行浴油。移住般若窟隨身搦一笠一衣鉢無一掬一文米錢。安然坐樹下。或日暮、黑色大夜叉來現捉海曰、汝何爲來住於我山乎。可速出去也。海掬力沮之。將眼瞑氣絕。時念不動唱名號、乃力十倍曰、汝何者耶。夜叉不答而去。後詣岩船大明神社。般若能似彼夜叉肌膚。知是明神來試者矣。一日麓里人來曰、當山鎮守辨才天像近世以來安山下俗家。却恐有祟。故今將來。乃海拜受之、後改建社焉。初無一瓢之器一枚之筵。漸有詣來檀越而有侍者二人。一名好道、一名清心、嘗給仕左右。好道曰、師常一食。今朝乃三元。幸有餽餐餅者、宜受用喫之也。海觀之。妙道成辨才天、清心成大黑天也。蓋以爲天女乃鎮守有所以乎。大黑有何因緣然乎。武陽偶修摩訶迦羅法。其後我久忘焉。天不棄而然耳。感信不斜。既而欲

修八萬枚護摩而無道場。誘村人營方五間草屋、築壇、始修前行。其間斷百穀、山蕪野菜外無食。四月朔日斷食、五日卯時始八日巳時八萬枚修畢。無人不驚信。尋自彫刻不動像、又自鑄彌陀像、安岩窟。鑄虛空藏像、安雲上閣。使佛工作十一面觀音像。安常念觀音院。又自鑄小塔、任前約、作聖天像、建殿安之。又鑄役小角像。安岩頭(是を行者の洞といふ)。十三級塔婆。不意自得建焉。而後讓寺務於洞之、別構小屋、閉關絕語。斷穀立十萬枚護摩、八千枚護摩之誓、初修十萬枚、秋修八千枚。此以來每年然也(寬文夏大旱)。奉青蓮院門主令旨、請雨至第三日大雨(貞享夏大旱)。依郡山城主本多中務大輔命、雩即時雨(元祿六年大旱)。自憐百姓、誦呪不過時雨降之類不違記。凡入當山以來、再不下。常坐不臥。一食而斷穀味。修八千枚護摩。八萬枚、十萬枚、慈救呪、其苦行可推知、嘗歡喜天爭論問答面如與人對話爾。未至二十年而一峯爲伽藍。號大聖無動寺。後改寶山寺。可謂中古無比之行者也(正德五年十二月八日)。告門弟曰、持明悉地長壽願行時機

不相應、故轉前誓、偏期都卒內院上生。翌春正月十六日如眠入寂。壽八十八歲。

葛上郡

○葛城 神武帝の二年高尾張井に土蜘蛛といふ賊があり、其身は短く手足は長く、勇猛で王命に従はなかつた處、官軍が葛網で之を縛り殺した、其場所といふ。

○金剛山 大和と河内との界。舊寺領七十石。本尊は法起菩薩不動明王、藏王權現。此三尊は役行者の作。昔に當山に出現したといふ十五童子の内、八大金剛童子は大峯にあり、七大金剛童子は當山にある。○〔役行者の像〕六月七日法會。○寺傳に據れば當山は金峯山と同じく金山で金剛砂も亦此處から出る故の名といふ。當山に産する藥品は上品といふ。○楠木正成が此處に立て籠もつて賊兵を惱ませたとて最も有名な山。其時築いた正成の城跡は今日も残る（\*河内國參考）。

○一言主社 葛城山東の下。祭神一言主命一名葛城神、素戔嗚尊の子。古事記、雄略天皇登幸葛城山之時悉給著紅紐之青捐衣服彼時有所向登山人既等天皇鹵簿亦其裝束之狀乃人衆相似爾天皇望令問曰於茲倭國除吾亦無主今誰人乎即答曰之狀亦如天皇之命於是天皇大恐矢刺百官人等悉矢刺爾其人等亦皆矢刺故天皇亦問曰然告其名爾各告名曰彈矢於是答曰吾先見問故吾爲名告吾者雖惡事而一言雖善言而一言言離之神葛城之一言主之大神者也天皇於是惶畏而曰恐我大神有宇都志意美者也不覺白而御刀及弓矢始而脫百官人等所服之衣服之拜獻爾其一言主大神手授受其捧物故天皇之還幸時其太神送奉故是一言主太神者彼時所顯也。

○高天彥神社 高天山。金剛山の半腹。承和三年從三位に叙せられた社。

○高天寺 高天山。蘇我馬子建立。寺傳に據れば孝謙帝の時當寺の僧に愛兒があり、其子が俄に死んだ爲め僧が非常に悲しんだ。歲月を経て段段忘れて仕舞ひ、或る時一羽の鶯が庭の梅に來て啼いた處から僧が怪しん

で之を聞けば、「初陽每朝來不遺還本棲」といふ聲に聞こえた。和字で之を寫せば三十一字の和歌となつた。そこで僧が吾が子の鶯に化して來たことを悟り、哀痛は已まなかつた。其歌を譯せば、「初春のあした毎には來れども遣はでぞ還るもとの住家に」。◎神武帝の時王師に抗した土蜘蛛が當山に住居した。其穴居の跡は今日にも殘る。

◎白鳥の陵 兵庫村の西。日本武尊を伊勢の能褒野に葬つた處、白い靈鳥と化して大和琴引原に飛び去つた故其所に陵を建てた。すると又此所から飛んで河内古市邑に行つたゆゑ又其所にも陵を建てて祭つた。之を白鳥三陵といふ。

- ◎高岡宮 綏靖帝の都。
- ◎室秋津嶋宮 室村。孝安帝の都。
- ◎玉出岡上陵 玉出村。孝安帝の陵。
- ◎高宮廟 蘇我大臣の祖廟。

- ◎茅原村 役行者誕生の地。玉出村の西北。
- ◎掖上池心の宮 御所村。孝昭帝の都。
- ◎孝昭帝の陵 三室村。
- ◎掖上の池 茅原村の南。推古帝の二十一年之を堀る。
- ◎巨勢山 高市郡の境。其麓を流れる川を巨勢川といふ。

城上郡

- ◎穴師の社 穴師村。
- ◎舒明帝の陵 忍坂村。
- ◎釜口山・長岳寺 上長岡。眞言宗。舊寺領百石。金別身院と號する。開基弘法大師。
- ◎痛背川 三輪山と痛背山との中間から西に流れて末堰は向川に至る。
- ◎纏向珠城宮 纏向川の北里。垂仁帝の宮都。
- ◎纏向日代宮 檜村。景行帝が暫く此處に都した。

◎豊受太神宮 今不分明。  
 ◎箸墓 倭迹日百襲姫命の墓。  
 ◎三輪大明神 三輪山。一名三諸山。舊社領百七十五石。祭神大日貴尊、一名大國主神即ち大物主神。神殿は無く、ただ一の鳥居、二の鳥居、樓門、拜殿等がある。昔し里人が神殿を造營した時群鴉が來て其殿を破り、餘木も残らぬ故神が社を好まぬとて建築せぬことになつた。其事實は奥儀抄にある。◎一若宮祭神未詳。一説、大田田根命即ち大日貴の子。清和帝の貞觀元年三輪神を正一位に叙せられた。二祭禮四月十二日上の卯の日、三印杉相傳伊勢國奄藝郡の獵人が異女に逢ひ、之を婦として子を儲け、後ち母子共に行方が知れなくなつた。其時遺してあつた歌「戀しくば尋ねても見よ我が宿は三輪の山もと杉立てる門」。此歌に従つて獵人が尋ねて行き、神木の下で三人共に神となつた。其緣起から當社の祭りには伊勢の人が來て之を行つたといふ。(四)神代卷の説に據れば大日貴神の幸魂

奇魂が大和國三諸山に行くとの趣きで即ちこの三輪大明神は日本の神の中で最も尊いものといふ。又舊事本紀の説に據れば大日貴神が天羽串に駕して虚空を飛び、偏く妾を求められた時、節渡縣に下り、潛に大陶祇の女活玉依姫に通はれた。其往來は人が知らなかつたが其女が孕んだ處で父母が怪しんで其故を尋ねた處。女が對へて「神があつて屋根の上から來て常に通はれた」と云つた。是に於いて針を苧環に着けて其來たといふ神の裾に着けて置いて其跡を探つた處、吉野山に入つて三諸山に留まつた。其縮めた處の絲は三條あつた故三諸山、それからして三輪大明神ともいふ。  
 ◎大三輪寺 三輪社の近處。舊寺領三十石。開山慶圓法師。法華宗。◎此寺の東北の隅に人の足跡があり、今日でも踏めば温い。俗傳に據れば明神が里人の女に會つて子を生子を生み、其子が十歳で入定した所といふ。  
 ◎狹井神社 三輪社の二町北。祭神大日貴荒魂。世に所謂花鏡めの神。疫